

どんしよどしよ!

vol.4



キスキス・モー
睦月カオル illustration: ひろ

心、奪われて
恵陽 illustration: 女将

空も一緒に泣くから
天菜真祭 illustration: 天菜真祭

山吹の門
あんのーん illustration: あんのーん

夜風は囁く
GB illustration: 立神勇樹

はじめに

オリジナル小説誌

▼新人からベテランまで、ネット小説界で活躍中のみなさんの作品を集めた、オリジナル短編小説誌です。

▼さらりと軽快な作品から技巧が光る読み応えのある作品まで、作家の皆さんが全魂を込めて書き上げた、名作・傑作・快作・秀作の数々をぜひご堪能ください。

対象年齢17歳以上

▼読者対象として17歳以上を想定しております。

▼描写レベルとしてはPG-12程度ですが、内容に関して対象年齢以下のお子様への配慮はしておりません。

▼対象年齢以下の方の閲覧を禁止するものではありませんが、低年齢層の閲覧には保護者の方が十分ご注意のうえ適切なお指導をお願いいたします。

コメント歓迎

▼作品への応援メッセージは作者の励みになります。気に入った作品がございましたら、ぜひコメントをお願いします。

▼コメントをいただく場合は、どの作品（または表紙絵）へのコメントかわかるように、「作品名（本文or表紙）」を明記のうえお願いします。

作品概要

キスキス・モー 睦月カオル／ひろ

君がいた幸せ。君が支えてくれた幸せ。そして――君が、守ってくれた幸せ。
心ゆさぶる名作・現代ファンタスティックドラマ

心、奪われて 恵陽／女将

あたし達の人生は二度と交わることはない。どんなに切なく乞い願ったとしても……
心かきむしる愛を描く・異世界ロマン

空も一緒に泣くから 天菜真祭／天菜真祭

今から雨を降らせます！ 手鞠姫となった少女は、大切な想いを胸に雨を祈る。
心ほっこりしっとり・現代青春メルヘン

山吹の門 あんのーん／あんのーん

黄昏の国で再会した少女に揺れ動く心。恋慕と嫌悪。誠意と裏切り。そして――
心突き刺す幽玄の世界・現代幻想奇譚

夜風は囁く GB／立神勇樹

あの者に報いを！――夜な夜な神の御許に通い、呪いの言葉を捧げる女の正体は！？
心昂ぶる熱血ロマン・異世界ミステリー

キスキス ・ モー

君がいた幸せ。君が支えてくれた幸せ。
そして——君が、守ってくれた幸せ。

心ゆさぶる名作・現代ファンタスティックドラマ

睦月カオル

illustration ひろ

「あっ」

声とともに伸ばした手は僅かに届かず、クッキー缶が滑り落ちていく。

「――っ！」

予想通りの大音響を目をつぶってやり過ごすと、散乱した床を薄目で確認してため息をつく。散らばったのが粉々になったクッキーではなかったことがせめてもの救いだ。

「なぁーお」

凄まじい騒音に隣の部屋から顔を覗かせたのは、五年前から共に暮らす猫。名前はモー。相当驚いたようで、しっぽが倍に膨れあがっている。

クローゼットの上段を整理していて、死角に置かれていた缶に肘が当たり、落としてしまったのだ。この子が下にいなくて本当によかった。

「ごめんごめん、ビックリしたよね」

折り畳み式の脚立から降り、白黒模様の頭を撫でて言った。

「さて、と」

自らに気合を入れて、缶の中身をかき集める。色褪せた映画の半券やスキー場のリフト券、古びたシューズの紐、折れ跡がついた大吉の恋みくじ、萎んでしまった水風船……。

四季折々の彩りを背景に撮られた写真を一枚ずつ眺めては、また缶の中へと戻していく。

――チリン。

モーが幼い頃に使っていた鈴付きの首輪を手にとると、目の前にいる成長した彼の姿が何だか誇らしく見えた。

全てを缶に戻したつもりで蓋をしてから、クローゼットの折れ戸の下に入り込んでいた小さな手帳に気が付いた。

缶の蓋に手を掛けたが、開けるのはやめ、そのまま上から力を加えて固く蓋を閉めるとクローゼットの中に押し込んだ。折れ戸の隙間から手帳を取り出しこたつの上に広げる。

手帳の中には、三枚の写真が挟み込まれていた。

「大丈夫」

心配そうな目ですり寄ってきたモーに小さな声で応えると、テレビ台の隅に置かれた卓上カレンダーを見つめる。最後の一枚となりバランスが悪くなったのか、最近よく倒れるようになった。

「もうじき二年……か」

あのときもこうして、こたつの上に手帳と写真を広げていた。

雪がよく降る、寒い冬だった。

「待って待って、今見せるから！」

こたつに前足をかけて身を乗り出すモーを止めながら、二枚の写真を並べた。

「これがね、初めて病院に行ったときにもらったやつだよ。ほら、黒い丸が見えるでしょ？ 赤ちゃんが入る袋なんだって！ それでこっちが今日もらった写真！ ほら、ちいさーく、赤ちゃん見えるでしょ？ あとこれが母子手帳ね！」

モーの鼻先まで持って見せ、ひとつひとつ話して聞かせた。

初めて産婦人科を訪れたのは、妊娠約五週の頃だった。自宅で検査薬の反応を見てすぐに駆け込んだのだが、あまりに早すぎて赤ちゃんの姿はまだ見えず、予定日も断定できないため二週間後に再診の予約をとった。せっかちな自分が少し恥ずかしくて、診察室では終始早口になっていた。

次の診察では、週数と予定日が確定し、赤ちゃんの姿と心拍も確認できた。母子手帳発行のための書類を病院でもらうとその足で役所に向かい、たくさんの冊子とともに持ち帰ってきた。

「七週だって。これからどんどん大きくなるんだよ。楽しみだね！」

大好きな人との結婚。憧れだった、海外への新婚旅行。そして念願のハネムーンベビーにも恵まれた。家族や友人たちからも祝福され、気が早いと思いながらも、名付け辞典まで購入した。人想いの愛らしい飼い猫に、やがて生まれてくる我が子の成長を語りながら、優しい夫の帰りを待つ。妊娠を知ったときの夫の喜ぶ姿を思い出して、くすぐったさのあまりモーを抱き締める。何もかもが順調で、怖いくらい幸せだった。普段気が向かないとすぐに腕から抜け出してしまうモーも、やれやれ、という顔で身を委ねてくれる。それがまた嬉しくて、私はいつもの合言葉を繰り返した。

「キスキス！ キスキス、モー！」

――カタッ。

物音で回想が遮断される。卓上カレンダーが、過ぎた月の重みで倒れていた。

「ん、またか」

広げていた三枚の写真をまとめる。あの二枚の写真に加えられた一枚には、そら豆のような赤ちゃんの姿が写っていた。けれどこれで写真はおしまい。赤ちゃんがこれ以上育つことはなかった。

流産、だった。妊娠九週目の定期検診では、赤ちゃんの心拍を確認することができなかった。動かなくなっていたのだ。知らない間に。小さな命が消えてしまったのだ。私のがんきに鼻歌を歌いながら過ごしていた日々のどこかで。

苦しくはなかったのだろうか。助けを求めて、私の体に訴えていたのではないだろうか。そうとも知らず、可能性として考えることすらなく、安穏と暮らしていた自分。

一般的に、一割ほどの妊婦が流産を経験しているという知識はあった。けれどどこかで、自分とは無縁なことのように感じてしまっていた。手帳とともに瞼を閉じると、すぐにあの日の自分に引き戻される。

我が子の死を告げられ、実感もないまますぐに組まれる手術の日程。別れを惜しむ間もなく翌日には取り出されてしまう、幸せの印。

すぐに涙は出なかった。自分が持つべき感情もとるべき行動もわからず、待合室のやけに柔らかいソファに体を沈ませ、自分の両手を眺めていた。零れ落ちていく幸せを留めることもすくい上げることもできずに、ただぼんやりと。ふと周りを見渡すと、そこには我が子の成長の経過を

楽しみにしている『母親』たちの姿があった。ときにお腹をさすり、ときに話しかけ、待ち時間さえ愛おしんでいた幸福感を、私も確かに知っていた。かつては自分も『あちら側』だったのだ。引かれてしまった境界線を足元に感じて俯いてみると、途端に視界がぼやけて何も見えなくなった。手の震えを誰にも悟られないよう、両手を組んで抑え込む。幸せな想いばかりが詰まったその場所で、決して泣きはしまいと唇をいくら固く結んでも、溢れだす涙を止めることはできなかった。

「染色体の異常によるもので、こうして淘汰されることは、受精の段階で既に決まっていた。母体には何の責任もない」

そんな医者からの説明があっても、私は一割という数字の壁を越えられなかった自分を責めた。

「次は大丈夫だよ」

周りはそう励ましてくれたが、「この子」が戻るわけじゃない。大丈夫？ 何が？ 慰めの言葉にもつい刺々しくなっていた。人に気を遣う余裕などなかった。私の体の中で、ひとつの小さな命が消えてしまったのだ。この世界の空気を一度も吸うことなく。鮮やかな景色の眩しさも、抱き締められる胸の温もりも知らないまま。

私が殺してしまった、守れなかった。何がいけなかったの？ 次？ そもそも、こんな私にまた幸せの種など運ばれて来るのだろうか？ 来たとしても、私はもうひとつの命まで奪ってしまうことになるかもしれない……。

不安は尽きなかった。何より、夫の顔を見るのが怖かった。言葉では優しく気遣ってくれるが、本心はどう思っているのだろうか？ 本当は私を責めているんじゃないか？ その答えを知るのが怖くて、私は俯いたまま日々を過ごした。

やがて月日を重ねて少しずつ感情の整理ができるようになった私は、周囲への気遣いも取り戻せるようになっていった。残念がる相手に「ありがとう」と言えるようになっていった。夫の目も、まっすぐ見られるようになった。それでもやはり、胸の奥には底知れぬ不安が燻り続けた。

倒れたカレンダーを直そうと立ち上がる。もうじき役目を終えようとしている最後の一枚を眺め、無意識にお腹をさする。行為を敬遠しているわけではない。しかし毎月のものは、順調すぎるほどに続いている。不妊治療を考えたこともあったが、一度の辛い経験が、それを遠ざけた。まだできないのは、時期じゃないからだ。家を建てる計画だってあるし、その場所で落ち着いたらきっと……。

「なあーお」

カレンダーを手にしたまま考え込んでいた私の足に、モーが額をすりつけてきた。

モーと出会ったのは、夫との付き合いが生活の一部として馴染みだしたような頃。ペットショップでケージ越しに目が合い、私が一目惚れしてしまった。小さかった当時から柄はハッキリしていて、まるで牛みたい。だから、「モー」。

元々動物好きだった彼も私の強い推しに負け、近所では珍しいペット可のアパートを探して移り住んだ。そのときから、ずっと一緒。2DKのこのアパートで毎年かなり早めに出すこたつの

中が、モーの特等席。

「お腹すいた？」

「なあーお……」

モーのおやつを取りに行こうとした私を制するように、足元にすりついてくる。8の字を描いて私の動きを止めると、まっすぐ私の顔を見上げた。普段は滅多に鳴かないモー。鳴くのはお腹がすいたときと、晴れて外へ出たいとき。それと――私が落ち込んでいるとき。

「なに？ 考え事してるの分かっちゃった？ 慰めてくれてるの？」

屈んで優しく頭を撫でると、ゴロゴロと喉を鳴らす。

思えば、この子の存在はかなり大きい。飼い始めた頃から、私たちが喧嘩をすると間に入っておろおろしてしまう優しい子なのは知っていたが、私が一番落ち込んでいたあのとき、モーは私の傍を離れようとしなかった。あっち行ってよ、と冷たい態度で八つ当たりする私にも、愛想を尽かさず体をすり寄せてきた。毎日、毎日。そんな姿を見て、決して人前では見せないような大泣きをした覚えがある。

子供がいない私たち夫婦にとって、モーはまさに一人息子のよう存在だった。もし私たちが二人きりなら、ギクシャクした状態が続いていたに違いない。モーは私たち、特に私にとって、決して欠くことのできない、心の拠り所となっていた。

こたつに座ってモーを膝に乗せると、額の真ん中を掻くように撫でながら語りかける。

「ねえモー、パパ、どう思ってるのかな？ やっぱ、赤ちゃん欲しいよね？」

モーの前でだけ、私たち夫婦は互いをパパ、ママと呼び合う。初めは少しくすぐったかった。

「最近さー、何だか自信がないんだよね」

このときが一番素直になれる。友達にも親にも言えない悩みを、いつもモーに聞いてもらう。

自信がない。それが最近の悩みだった。

高校を卒業してからすぐに就職した私は、地元の体育館で行われていたスポーツクラブで七つ年上の今の夫と出会い、付き合い始めた。

お互いに働きながら交際を続け、二年後には同棲を始めた。初めは反対していた両親も、夫の人柄と、結婚を前提に、という本人からのハッキリとした宣言により、同棲を認めてくれた。それから喧嘩しては仲直りを繰り返し、交際四年目の夏にプロポーズされた。そして五年目の秋に、結婚。会社は寿退社した。

夫は誠実な人だ。彼の浮気を心配する必要はない。気持ちの在り処《ありか》より、大きさが心配だった。私に対しての気持ちは、萎んでしまっていないだろうか？ 二人きりの結婚生活を続けるうちに、私に興味がなくなってきたんじゃないか？ そんな思いが、何度かき消してもしつこく脳裏に浮かんでくる。

特に大きな何かがあったわけじゃない。話を聞かない、こちらを振り向かずに話す、返事が遅い、冷たい気がする――ほんの些細なことだから、強くは言えない。

そんな小さな不安が、私の中で消えないシミとなっていく。今はまだ目立たないそのシミも、不満を重ねて色濃くなり、広がり続けていたら……？ 私は私のままでいられるのだろうか。彼とのこの生活を、続けていけるのだろうか。

二十五歳。自分の年齢を見つめ直して、よからぬことを考えるときもある。夫は、三十二歳。世間の感覚はよく分からないが、遅すぎることはないにしろ、次を探すには出遅れてしまうかもしれない。そんなことを考えている自分が、たまらなく嫌になる。どうして私はいつもこう、受け身なんだろう――。

カプッ。

モーが、いつの間にか撫でるのをやめていた私の手を甘く噛む。

「あ……あはは、ごめんごめん、また考え込んでたね」

出会った頃より三倍近くなった重い体を持ち上げる。モーは私の気持ちに寄り添うとき、抱き上げられても抵抗することなく身を委ねてくれる。私は彼の視線に瞬きで応えると、その鼻に自分の鼻を寄せ、小さな声で言った。

「キスキス、モー」

「なおおーん」

一度くしゅっと顔を崩し、いつもと違う声で鳴くと、モーは私の鼻の頭をペロッと舐めた。

『キスキス、モー』――これを言いだしたのは、モーを迎えて一年ほど経ってからだろうか。普段から色んなことを話しかけていたが、特に変わった反応はなく、鳴き声も大抵同じようなものだった。しかしこの言葉を言ったときだけ、いつもと違った声で鳴き、決まって私の鼻をひと舐めする。その鳴き方が何だか牛に似ていて、モーにはピッタリだった。

元々は「好き好き、モー」と言っていたが、繰り返すうちに「スキスキ」よりも「キスキス」の方が反応がいいことに気付くとすっかり定着し、それ以来、私とモーの間だけでの合言葉となった。夫には単純すぎると笑われたが、この言葉を言っても反応してもらえないひがみだろうと解釈し、フフンと鼻を鳴らして聞き流した。

「モー、すごいね。分かるんだもんね？ ふふ……」

不安を抱えつつも、モーが居てくれるおかげで、それなりに充実した毎日を送っていた。

それから約半年、梅雨の鬱陶しい雨に嫌気がさしてきた頃、急な吐き気を覚える。確かに月ものは予定よりも遅れていたが、ぬか喜びになってはいけないからと、買い置きの検査薬も引き出しに入れたままだった。封を切って慌ててトイレへ向かうと検査薬の窓には陽性の印がハッキリ浮かび上がった。

「で……」

手を洗うのも忘れて勢いよくトイレから出る。

「できたー!!」

一人で万歳の体勢をとると、急に開いた扉にぶつかりそうになったモーに睨まれ、すぐ我に返る。もう一度トイレへ戻って手を洗うと、あれほど抱いていた不安も忘れ、モーを抱きかかえて頬ずりする。

「モーも応援してくれてたんだよね！ モー、キスキス、モー！」

「なおおーん」

くしゅっ、ペロリ。そのくすぐったさや手にかかるモーの重さ、さきほどまで不快だったはず

の雨音にさえ、全てに幸せを感じた。「キスキス、モー」のやりとりを繰り返しながら布団のないこたつに座り、ウキウキと夫の帰りを待った。

しかし帰って報告を聞いた夫の表情を見て、浮かれた気分はすぐに萎んでしまった。

もちろん、喜んでくれた。ホントか！ やったー！ と、私と同じように万歳もしてくれた。問題は、その前だ。私の言葉を聞いた夫の頬が、一瞬引きつって見えた。目にも、不安の色が掠めた……気がした。

結局そのあと抱き締められうやむやになってしまったが、あれは考えすぎだったのだろうか？

もしこの人が、私との子供を持つことに、躊躇いを感じているんだとしたら――？ いや、そんなはずはない。私にだって、不安はあるもの。そうよ、ほら、喜んでくれているじゃない。必死に自分に言い聞かせた。

翌日を待って、産婦人科で診察を受けた。待合室の懐かしい空気を感じ、少し目頭が熱くなる。自分の名が呼ばれるのを今か今かと待っていたのに、診察室のドアに手をかけた途端、動悸が激しくなりだした。検査薬の反応に間違いはないだろうか。もし赤ちゃんがいたとして、心臓はちゃんと動いているのだろうか。またあのときのようにお腹の中で動かなくなっていたら……？ 急に襲ってきた不安に、診察台へ向かう足が震えた。自分の心臓の音がうるさくて、カーテン越しの声が上手く耳まで届かない。聞き取ることを諦めて、真っ黒なモニターだけを見つめる。次の瞬間、白いものがモニターに映し出された。これは……？

「うん、元気そうですね。おめでとうございます」

「……え？」

モニターには、一定の早さで心臓を動かす赤ちゃんの姿が映っていた。トクン、トクン、トクン。せわしない拍動。無音のモニターから命の音が聞こえてくる気がして、愛おしさに涙が溢れた。

妊娠三ヵ月。前回別れの時となった九週を既に越えていることを知り、ほっと胸を撫で下ろす。その後の定期検診も順調で、毎回もらえるエコー写真をモーに見せては、二冊目の母子手帳に挟み込んでいった。

日々成長する我が子に愛しさを募らせる。つわりは酷かったが、急につわりが止まることの意味を考えると吐き気はむしろ安心感を与えてくれた。お腹の中の命が確かに存在しているという、証。

三度目の結婚記念日とともに妊娠七ヶ月を迎える頃には、その辛さもすっかり忘れるほどに落ち着いていた。少し腰がだるいが、愛しい命を支える重さだと思うと、全く苦にはならなかった。時々お腹を蹴る足は思いのほか力強く、物理的な感触だけでなく、気持ちも何だかくすぐたかった。

夫も事あるごとに膨らんだ私のお腹へ耳を当てては、たわいもないことを語りかけた。その日の天気、夕飯の献立、建築予定の家の話、いずれ連れて行きたい旅の行き先。思い描いていた、幸せな家族の光景。それでも、時折迫りくる不安は拭えなかった。この子は無事に生まれてくれるだろうか……妊娠を報告したときの夫の表情も、忘れた頃に繰り返し脳裏をよぎる。幸せにひ

たりきれない自分もどかしかった。

モーはというと、大きくなるお腹にすっかりメロメロの二人に呆れてか、機嫌の悪い日が続いている。いつもの「キスキス、モー」にも、このところ反応が鈍い。ヤキモチでも妬いているのだろうか。

そんな様子でモーとは少しギクシャクしたまま、出産予定日まで残すところ一カ月となった。

何かあったときのために、夫の携帯番号を控えたディズニー柄のメモを、磁石で冷蔵庫に貼り付けておいたし、自分の携帯の短縮にはワンタッチで夫の番号が出るよう、登録し直した。これで何とかなるだろう。あとは約一ヶ月、ゆっくり心の準備を進めていこう……そう、思っていた。

週の初め。いつも通りにキスで夫を送り出す。

前日は雪道に車を走らせ、二人でベビー服を見に行った。生まれてくる子の性別はお楽しみにとっておいたため、無難な黄色や、淡い緑のものを買った。大きなお腹を抱えて店内をまわる自分たちの姿がガラス窓に映ると、溢れる幸せについ頬が緩んだ。その間留守番をしていたモーは、帰宅した私たちをムスツとした顔で迎えた。寂しかったからなのか自分も外に出たかったからなのか、家を空けたあとは決まってそんな顔をした。私は大きいお腹に気を遣いながら屈んで、モーを抱き上げた。

「キスキス、モー」

鼻は寄せてきたものの、返事はなかった。するりと私の腕から逃れ、奥の部屋へ行ってしまった。

「ま、明日には機嫌も直ってるさ」

そのときは夫の言葉を素直に受け取った。しかしモーは翌日を迎えても、まだ虫の居所が悪いらしい。ご飯のときだけは出てくるが、雪晴れの空に鳴きもせず、こたつに潜り込んだままだ。私はひとつため息をつき、

「ねえ、モー。仲直りしようよ？」

そう声をかけながらこたつ布団をまくって覗き込むと、気に障ったのか、モーは反対側から出てそのまま奥の部屋へ行ってしまった。

「モー、待ってよ」

あとを追おうと立ち上がったとき、下腹部を激痛が襲った。たまらずその場にへたり込む。

「な……に？ コレ……いったあ……」

そのまま身動きがとれなくなった。初めて経験する痛みに戸惑いながら、顔をしかめる。

陣痛？ ……って、もう来るものだった？ とにかく夫に電話しようとして手を伸ばす。こたつの右端にある、小物入れ。けどそこには、いつもあるはずのその場所には、ない。私の携帯。

「なん……でえ？」

痛みで言葉が切れ切れになる。お腹を両手で抱えながら何とか思考を巡らせると、ひとつのことが思い当たった。――車だ。昨日出掛けたときに携帯を夫の車のシートに置き忘れた。取りに

行かなきゃと思っていたのに……。

このままじゃ駄目だ。外に出て、助けを……お隣さんに、救急車を呼んでもらおう……。這いずりながら台所へ向かう。玄関はその先だ。

ふと、連絡メモを思い出す。そうだ、あれ持って行かないと……。けれど、痛みでとても立ち上がれそうにない。

「何で私、あんな高いところ……バカ……」

いつもは目線の高さである場所に貼り付けたメモが、このときばかりは絶望的に高く見えた。床に張り付いた姿勢のまま手を伸ばしてみるが、それでもメモは腕一本先だ。せめて少しでも起き上がろうと力を入れた瞬間、さらなる激痛が体を駆け巡った。

「うあっ!!」

もう駄目、動けない……苦痛に歪めた顔だけを動かすと、視界に赤色が飛び込んだ。マタニティワンピースの一部が、赤く染まっている。血……？ 何で……？

――ぼろっと、涙が溢れた。先ほどから痛みで涙目ではあったが、この涙は次から次へと溢れ出てくる。感情よりも先に反応した涙腺に、悟る。

「お別れって……こと？ もう無理って……こと？」

過去の絶望を思い出す。三枚きりの写真、待合室での孤独感、消えてしまった温もり……。

いやだ……私は……私の落ち度で、この子まで失うの？ そんなの耐えられない。いや――滲む視界に、白黒模様が動く。モー……!!

「モー、助け……て。いやだよ、この子……死なせたくないよお……」

頼んだところでどうにもならなのは分かっていた。でも私は、涙でぐしゃぐしゃになった顔でモーを見つめ、必死に訴えた。モーは一度首をかしげてから、こちらへ向かって歩いてきた。さきほどまでの不機嫌な顔はしていない。

私は痛みには挫けながらも、ちょっとだけ救われた気がした。だって、モーが、怒ってない。

モーは台所へ入ると向きをかえ、私の視界から消えた。と思うとすぐに、くすぐったいものを手のひらに感じる。モーが私の手に鼻をすり付けているのが分かる。

カサッ。

「モー……？ なに……？」

モーは私の顔の前へまわると苦しむ私をじっと見つめ、見つめ返す私の視線を確認してから顔にくしゅっと皺を寄せた。

「なおおーん」

そして……ペロリ。私の鼻をひと舐めするとくるっとむこうを向き、玄関に向かって歩いていく。

どこに行くの？ モー……駄目だよ、玄関には鍵が――

力が抜け、目の前が真っ暗になった。あれ？ 私、このまま死んじゃうのかな？ この子の顔も見られないまま……この子に眩《まばゆ》い世界を見せることもできないまま？ 大好きなあの人を……残して――？

真っ暗な中に、写真のスライドショーを見るかのように数々の場面が浮かび上がる。あの人と出会った体育館、初めてのデート、教えてもらったスノーボード、喧嘩をしたとき真っ赤になっていた耳、夏祭りでのプロポーズ、結婚式ではにかんだ顔、初めて子供ができたときの潤んだ目、私のお腹に耳を当てるあの人の長い睫毛――。

なんだ、幸せじゃないか。こうして見ると、愛しい思いばかりが溢れる。普段の自分をとてつもなく愚かに感じた。寂しかったなら言えばよかったじゃない。思い切り話し合って、素直に甘えればよかったじゃない。くだらない意地を張って目を逸らしていたのは、私――。

次に浮かんだのは、モーの姿だった。ケージの中から見つめる、黒く透き通ったガラス玉のような瞳。迎えてすぐの頃の甘えた鳴き声。パーカーの紐にじゃれつく無邪気な姿、困ったときの垂れた耳。泣き続けていた私に懸命にすり付けてきた、額の温もり。

.....これ、走馬灯とかいうやつだよな？ やっぱり私、このまま.....？

くしゅっ、なおおーん、ペロッー

薄れゆく意識の中、私はサイレンの音を聞いた気がした。近付いてくる？ そんなワケ、ないか.....。

もう一度、最後のモーの姿を思い出す。二人だけの合言葉。また私に言ってくれたね。最後にモーと仲直りができて、よかっー

気が付くと、目の前にはナースキャップを被った中年女性の顔があった。

「先生、意識が戻りました」

彼女が振り向きながらそう言うと、今度は白衣を着た太眉の男性が視界に入る。

「本村美香さん、ですね？ 気分はどうですか？ ここは市の総合病院ですよ」

モトムラ・ミカ。私の名前.....総合病院？ ここが？

「――あと少しでも処置が遅れていたら、母子共に危険な状態でした」

「え.....？ ぼ、し.....？」

太眉の医師が看護師に頷く。そこで私はようやく、自分のお腹の変化に気づいた。明らかに、かつてほどの膨らみがなくなっている。まさか、あのときと同じ――？ いや.....赤ちゃん.....私の赤ちゃんは!?

「おめでとうございます。二千二百グラム。少し小さいですが、呼吸器などの機能も成熟していますし、心配ないでしょう。元気な男の子ですよ」

「.....え？」

私の胸の上に、布でくるまれた小さなかたまりが置かれる。あったかい.....？ 指で布をよけると、手のひらよりも小さい、皺くちな顔があった。目元が少し夫に似ているような気がする。

でも……本当に？ この子が私の子なんだと、喜んでしまっていていいのだろうか？ あとになって夢だったなんて、そんなことは――？

「旦那さんも、もうすぐ着く頃だと思いますよ。先ほどご連絡しておきましたので」

「え？ どうやって？ 私、メモ……」

「あら。しっかり握っていましたよ、旦那さんのお名前と電話番号が書かれたメモ。ほら、そこに」

看護師が指す棚の上には、見覚えのあるディズニー柄のメモが置かれていた。端が少し破れてはいるものの、確かにあれは私が書いた字だ。でも、どうして？ あのとき届かなかったはずなのに――

「美香!!」

慌たましい足音と共に病室へ飛び込んで来たのは、私の夫、康之だった。外仕事の彼は所々に泥の跡がついた作業着のまま、赤い顔で息をきらしている。

「康之……？」

「ああっ美香、無事でよかっ――」

安心した表情で歩み寄った彼は、直前でピタリと止まった。彼の視線は私の胸の上に注がれている。初めて見る我が子に戸惑っているのか、口が開いたままだ。

そんな夫の姿を見て、急に実感が湧いてきた。

――この人の、子供。この子は、私たち二人の子なんだ。この胸の小さな温もりを、どれほど願ひ続けてきたか。肌で感じる、確かな命。じわじわと湧き上がるのは、これまで味わったどの感情とも違っていった。さきほどまで強張っていた顔が、思わず緩む。

「ふふ……ほら、触ってあげて？」

夫は手を出したり引っ込めたりしながら、ようやく我が子の頬に触れた。赤みがかった小さな頬がくぼむのを見ると、夫の目からは大粒の涙がこぼれた。

「――おっ、俺……」

「康之？」

初めて見る夫の姿に少し戸惑いながらも、これから語られる彼の言葉をひとつも聞き漏らすまいと、じっと耳を傾ける。

「……俺、怖かったんだ。この子を失うのもそうだけど、もしかしたらお前がまた、辛い思いをするんじゃないかって……男の俺は見ていることしかできなくて、お前に何もしてやれなくて。もし、今度はお前の身にも何かあったらって思うと、すごく不安で……でもお前は俺よりずっと大きな不安抱えてるだろうから、こんな弱気なこと言えなくて……」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、必死に言葉を紡ぐ。そんな夫の姿に、私の目にも涙が滲む。なんだ、そうだったんだ。この人も……不安だったんだ。

「……ばかね」

この言葉は自分自身にも向けられていた。ほんのちょっとのすれ違い。お互いが不安を見せまいと意地を張り、気を揉んで疲弊し、いつの間にか素直に向き合えなくなっていた。ただ、それだけのこと。

夫は微笑む私の頭をひと撫ですると、耳元で囁いた。

「頑張ってくれてありがとう。――愛してる」

「――っ！」

夫の口から初めて聞く言葉。「好き」の気持ちは伝え合っても、照れ屋な彼は、その言葉だけは決して口にしなかった。そう分かっているながら、私が心のどこかで求め続けてきた言葉。

私の中にあったドロドロとした醜い感情が、溢れる涙とともに流れてゆく。これまでの苦悩が嘘だったかのように、全てが浄化され、彼への純粋な愛しさだけが心に還る。

彼は私の反応を見て照れくさそうに笑ってから、お前もな、と息子の額に自らの額を重ねた。

その光景に、私とモーの姿が重なる。

「モー……」

夫に視線を向け、頭に浮かんだ彼のことを尋ねる。

「モーは？ ……それに私、どうやってここへ？ 救急車、呼べなかったのに――」

すると私たちの様子を静観していた看護師がこちらへ歩み寄り、それが不思議なのよ、と語りだす。太眉の医師はお役御免と思ったのか、お大事に、と小さくひとこと言い残してその場を去り、病室には一家三人と看護師の、四人だけが残った。

初めは、別の通報だった。私が意識朦朧としていた頃だ。アパートの前で男の子を撥ねたと運転手からの通報があり、救急車は急いで現地へ向かった。

怯えて確認できていないという運転手が指さす方向には、恐らく撥ねたあと驚いて突っ込んだのだろう、白のバンが、道端の道路標識にめり込んでいた。救急隊員は車の下や周辺をくまなく探すが、人の姿は見当たらない。誤報かとも思い始めた隊員は、せめて目撃者がいないかと目の前のアパート、最も現場に近い部屋を訪ねる。

そこが、私たちの部屋。半開きになった扉を不自然に思った救急隊員は声をかけながら取っ手を引く。そして、台所に血を流して倒れる私の姿を発見したのだ。すぐに応急処置が施され、私はこの病院へと運ばれた。

「……？ 男の子、は？」

私の問いかけを予想していたかのように、看護師は、そうなのよ！ と話を続ける。

「これは私もあとになって聞いたんだけどね、あらためて警察が調べるとやっぱり男の子なんていなくて、数メートル離れたところに猫の死体が転がってたって。その猫の様子から見て、運転手は猫を撥ねて、人と勘違いしたんだらうって言うのよ。でもおかしいでしょ？ 今この話題で持ちきりで――」

完全に世間話と化した看護師の言葉を脳内で遮り、その中のひとつの言葉だけを反芻する。猫……猫――？ 呼吸が乱れ、眠る我が子を抱く胸は上下に大きく揺れる。

「その、猫って、どんな――？」

「ん？ 白毛に黒のブチらしいわよ？」

看護師の信じがたい言葉に、その場で叫び声をあげそうになる。不思議なまでの確信が、私の正気を奪っていく。

モー――!!

夫も私と同じことに気付いたらしく、驚きの表情を見せる。

ああ、何ということだろう!? 私はあのとき、モーに助けを求めた。それを聞いたモーは？ 玄関へ向かったわ。それから!? 必死に記憶の糸を手繰り寄せる。サイレンが聞こえた……違う、私は聞いたわ。その前。モーの姿が見えなくなってすぐ。大きなブレーキの音、小さな鈍い衝突音、何かが壊れる音。それからしばらくして、サイレンが……。

降り積もった真っ白な雪の上に浮かぶ、モーの黒。

猫には不思議な力があるって聞いたわ。あの話は年老いた猫だった？ でも、もしモーがその力を使ったんだとしたら？ 私のために人の姿をして、自ら車の前に飛び出たのだとしたら？

自分だって寂しかったはずなのに。最後のあのやりとりは仲直りなんかじゃない、別れの挨拶だったんだ！ あのメモを私の手に握らせ、これで大丈夫だよって！ 私の鼻を舐めて、ばいばい、って！

そのとき、私は？ ……私は何も返してない、あなたにスキスキってすら、言えてない！
ああ、モー……モー——!!

「美香……」

赤ん坊を胸に乗せ、仰向けのまま泣きじゃくる私の頬を、夫がそっと撫でる。

「康之……どうしよう!? 私のせいでモーが、モーが……!!」

状況をつかめない看護師は、きまり悪そうに口を噤むと医療器具の整理を始めた。病室には器具が重なる高い音と、私の嗚咽ばかりが響き渡る。声をあげて泣き、枕に水溜まりができては消えていく。

「ふえ……」

眠りから目覚めた息子が、私と一緒に泣きだす。小さな口をいっぱい広げて泣く我が子の頭を撫でながら、夫が言う。

「守って……くれたんだな、モーが。お前もこの子も、モーが助けてくれたんだな。……モーには、お礼言わなきゃなあ……」

その言葉を聞いて、私は口を結んで固く目を閉じる。そしてゆっくり、しゃくりあげながらも大きく息を吸って呼吸を整える。泣き続ける我が子を見つめ額に触れると、くしゅっと顔を寄せてから泣き止んだ。私と夫は顔を見合わせ、モーみたい、と呟く。涙だらけの自分の顔を袖で拭くと、胸の中で語りかける。

ねえ、モー……聞こえてる？ あなたのおかげで私もこの子も、命を救われた。それだけじゃない、不安にのまれかけていた私の心まで、あなたは救ってくれたのよ。

夫は私の手を握ると、二人の腕で我が子の上に橋を架けた。もう一人の息子も、一緒に抱き締めあげられるように。

帰ったら、凍える体にお墓を作ってあげよう。家が建ったら、その庭に。いつまでもいつまで

も家族四人、一緒に居られるように。

今も……いるよね？　ここに。お別れじゃ、ないよね？

瞬きをした目から、最後に一粒だけ、涙がこぼれた。

「……キスキス、モー」

――夢を見た。君の夢。

君はあの頃と何も変わらない。

ふくよかな白い体に艶のある黒を浮かべ、透き通った瞳で私を見つめる。

穏やかなその顔は、笑っているようにさえ見える。

君は私の手の甲に頬をすり寄せ、私とその体を抱き上げると、鼻先にそっとキスをする。

そして――

「タダイマ」

――玄関が開く音で目が覚めた。真っ先に目を向けたのは、四年前に泣きながら作った君のお墓。君が好むと思って選んだ日当たりの良い庭先が、この家での君の特等席。その名が彫られたプレートの下に、今も君は眠っている。

夢の中での久しい再会。思わぬ懐旧の余韻にひたっていると、四歳になった息子が私の顔を覗き込んできた。

「ママ？」

「ん、帰ったのね。おかえり」

さっきの声は、この子のものだったのだろうか？

あとから夫が顔を出す。両手には新しいおもちゃの箱。二人で買い物に出掛けていたのだ。

息子を抱えようと手を伸ばしたとき、そのうしろに何かを隠していることに気付いた。

「？」

「あっ、ママ、あのね、んとね……」

遠慮がちに差し出された小さな両腕の中には、白黒模様の子猫がいた。

夫は息子のうしろに屈みこむと、さっき拾ったんだよな、と言って息子の頭に手をのせた。言葉につまる私を、息子も子猫も無垢な瞳でじっと見つめる。

「このこ、おうちにいても、いい？」

目から涙ばかりが溢れ出て、息子の問いかけに答えることができない。だってその子猫は、幼い頃の君そのものだったから。

口元を押さえたまま、首だけを何度も縦に振る。

「ママ？　どうしてなくの？」

心配する息子を、子猫ごと胸に抱き締める。……強く、強く。

「何でもないので。……ねえ、このコの名前、ママがつけてもいい？」

——また私に呼ばせてくれる？ 懐かしくて愛しい、君の名前を。

あのときのように聞いてくれる？ いっそう募った、君への想いを。

「ママが？ いいよお、なんてなまえ？」

「ふふ、それはね——」

庭には眩しいほどの光が差し込み、緑の生垣が深い影をおとす。その下の君が眠る場所から、またあの声を聞いた気がした。

あとでちゃんと応えなきゃ。眠っている君に。そして目の前にいる、小さな君に。あの日言いそびれた、二人だけの合言葉とともに。

キスキス・モー

睦月カオル（むつき・かおる）

どんな内容でも、読後にほんのり気持ちが温かくなるような話作りを目標にしています。

ひろ -イラスト特別提供-

よろしく申し上げます。

あたし達の人生は二度と交わることはない。
どんなに切なく乞い願ったとしても……

心かきむしる愛を描く。異世界ロマン

心奪われ

恵陽

illustration : 女将

泣くな。

「ごめんなさい」

泣くな、あたし。緩みそうになる涙腺を、必死で抑えた。

「あたしは貴方と共に歩めないわ」

笑え、笑うのよ。唇の端を持ち上げて、しっかり彼の目を見て、笑うのよ。

城の前にたくさんの人が詰めかけている。その中にあたしも混じっていた。今日の天気は雲ひとつない晴れだ。それはまるで民衆の歓喜を表しているよう。これから起こることがどれだけ皆を待たせていたか、あたしはよくわかる。それぞれが期待に満ちた表情で城から張り出した露台を仰いでいた。

あたしだって、少し前まで皆と同じだった。素敵な話だと微笑んで、夢のある想像だとはしやぎ、彼や客にその想像を語って聞かせた。あたしの稚拙な想像を、彼はいつも幸せなことのよう微笑んで聞いてくれた。それが嬉しかった。あたしの心にやわらかな明かりを灯した。けれども、現実はどうだろう。あたしは今、その想像の中と同じように城の前に立っている。けれど他の皆のように明るい表情なんて出来そうにない。ただチクチクと痛む胸を押さえて、彼の姿を見ようと露台を仰ぐことしか出来ない。

大衆のざわめきが大気を揺らし、いよいよだとあたしは胸の前で両手を組んだ。まるで祈りをささげるような格好になってしまって、あたしは自分に何を祈ることがあるのだと哀しくなった。それでも視線は目当ての場所から外せない。

露台に少しずつ階《きざはし》を登ってくる様に現れるのは、栗色の髪とやさしげな微笑だ。見た目がやさしげなだけではなく、彼は本当にやさしかった。その彼が手を繋いでいるのは、あたしが到底持ち得ない美貌を持った女の子。綺麗というよりはかわいくて、彼に手を引かれてはにかむ姿は微笑ましすぎて涙が出そうだ。隣国から嫁いで来た本物のお姫様の彼女は、まるで御伽話からそのまま飛び出してきたかのような蜂蜜色の髪をしている。唇は朝露のような潤いを保ち、頬はさくらんぼのように仄かに染まっている。あたしよりも七歳も若くて、彼よりも三歳幼いお姫様。

彼は彼女と一緒に大衆に向かって、手を振る。穏やかに笑う彼が眩しい。群衆に埋もれたあたしに気付くことはないだろう。一人だけ哀しい顔をしているあたしなんて見つけれない方がいい。もう、どんなに願っても、あたしと彼の人生が交わることはないのだから。

城下の食堂で働いていたあたしが彼と出会ったのは、二年前のことだ。その時の彼はまだ、本当に少年だった。身長もあたしにまだ足りなくて、あどけない、幼い顔を精一杯大人にみせていた。

「名前を教えてよ」

それは彼があたしに掛けた第一声。それまで彼は女将さんや友人とばかり話をしてきた。でも

彼はあたしの顔を知っていたと思う。目が合ったことはあったから。もちろんあたしは彼の顔を知っていた。けれど話をしたことはなかったのだ。だから初めて声を掛けられた時は嬉しかった。緊張しているのを押し隠そうとしている声が微笑ましかった。

「どうしてこの店で働いているの？」

彼はあたしにたくさん質問をした。一人で暮らしているのか、好きなことは何か、花は何色がいいか、苦手な食べ物はあるか、と。その中で一番印象に残っているのがこの質問だった。

「あたし、母親と一緒に隣国から越してきたの。ほら、今は何処も戦争で大変じゃない。あたしが居たのは小さな村で、他国の兵隊がやってきたらすぐになくなっちゃうようなところだった。今はもう、やっぱり跡しか残ってないらしいのだけど、あたしと母はその前に村を出て、あっちよりも落ち着いているこの国に、この街にやってきたの。王都だったら職もすぐに見つかるかもしれないって、来たんだけど……。なかなか母を雇ってくれる人も、住む所も見つからなくてね。あ、街に来たのは春先だったのだけど、春でもまだ夜は冷えるでしょう。路地で母と蹲《うずくま》っていたら、女将さんが見つけてくれて、宿と食事をくれたの。あの時、女将さんと出会えたから今のあたしはいるの。此処を宿にしていたのは少しだけだったけど、雇ってくれる所も見つかってね。あたしはいつか恩返しがしたいと思って、機会を窺《うかが》っていた。そうしたら給仕を探しているって聞いて雇ってもらったの。あたしのことも覚えてくれていたのよ。嬉しいじゃない」

あたしは別に不幸自慢をしたいわけではなかったけれど、彼はあたしに複雑な表情で返した。

「隣国はそんなに荒れているの？」

「あたしが見てきた限りはね。争いが起きないならそれに越したことはないわよ。今度はこの国が攻め込むのでしょうか。あたしの故郷に。回避出来るものならどんな形であれ回避して欲しいと、あたしは願うわ」

そう答えたあたしの顔を彼は暫く見つめ、僅《わず》かに目を伏せた。その行動の意味があの時はわからなかったけれど、今ならわかる。彼はたくさんの民の命をその背に負っていた。民の命を捨てることは彼には出来ないだろう。今も、あの時もそれは変わらない。それが彼らしさでもあった。

今でこそ笑いながら言えるけども、戦争の話をするのはやはりよい気分ではなかった。でもそれがどんなにつらいものか、皆が戦争によって生じるものを知っていけば戦争は減っていくのじゃないだろうかと思う。だからあたしは乞われれば答えることにしていた。それでもすべてを話せるわけではなかったのだけれど。

「そういえば、君のお父上はどうしているの？」

何気なく問いかけられたこの質問。あたしは、幼い頃に亡くなったわ、と返すしか出来なかった。彼に話した父の死について、間違いはない。でも今でも父のことを詳しく人に話すことが出来なかった。

父はあたしと母を守って死んだのだ。あたしの住んでいた村は本当に小さな村だった。特産などはなく、自分たちで小麦や野菜を育て、家畜を飼い、皆で協力して生活していた。豊かではなかったけれど、満足していた。戦争もあたしたちの村まで来るとは思っていなかったのだ。だ

からある日、兵士が村を訪れた時には驚いた。その人は一人だった。幼いあたしはよくわかっていなかったけれど、その兵士は敵対している国の人だったと思う。戦争をしていることは知っていたけれど、それはこんなに近い場所で起きることだとは思っていなかった。だからあたしたちは油断していたのだ。兵士に少しの食糧を分けて欲しいと乞われ、皆で本当に少し渡したのだ。お腹をきゅうきゅう鳴らした兵士は感謝を述べるとすぐに村を去って行った。大人たちはその兵士から戦況を聞いたようで、その夜から話し合いを始めた。

避難しようと父が言ったのはその数日後だった。何処へ行こうとも苦勞することは目に見えていた。故郷を離れることを渋るあたしに、父は明るい展望を話して聞かせた。新しい土地でたくさん野菜を植えよう。今度はヤギも増やして、チーズを作ろう。それにあたしと一緒にもっと遊びたい。そう言った父の笑顔にあたしは大きく頷いたのだ。けれどその未来は塵となって消え去ってしまった。村を出ようとしたその日に、兵士が村を襲ったのだ。前に来た兵士もその中に混じっていた。彼らは村の食糧を奪いに来たようだった。あたしと母は先に逃がされ、父は村の大人たちと一緒に戦った。

あたしは信じていた。

父はあたしたちを追って来るのだと思っていた。けれど母はあたしの手をずっと引いて、父を待つ素振りもみせなかった。その後この街に落ち着いて、村のことを知っているという人に話を聞いた。抵抗は哀しいことにほぼ無意味だった。村はけして戦場ではなかったのに、そこはまるで大きな戦があったようにすべてが壊されていたという。蹂躪され火を放たれた村にはもう本当に何もなかった、と言っていた。だからあたしは戦争が好きではなかった。なくなればいいと思った。どんな方法であれ、戦争をなくしてしまえるならいいと思った。そうしたら皆が互いに協力するようになるだろう。足りないところを分け合ったあたしたちは、幸せに過ごせるようになるだろうと思った。

そんなあたしを彼が実際どう思っていたのかはわからない。ただ彼の素直でやさしいところはあたしを癒やしてくれた。初めは話をするだけだったけれど、もっと親しくなると彼は何度もあたしを誘ってくれた。あたしには彼が散歩をねだる犬のように見えたのだった。彼はただ街を歩くだけでいつも楽しそうだった。道の脇に広げられた露店の商品を覗《のぞ》くだけ覗いて冷やかし、女将さんお勧めのお茶屋さんではお茶よりお菓子に舌鼓を打つ。あたしが見ていた髪留めを後でプレゼントされた時はびっくりもした。

そうして誘いに乗って遊ぶようになった頃にはもう、異なる感情が芽生えていることを自覚しはじめていた。それは当然の結果だった。彼はあたしにお姫様に接するようなやさしい表情をして、時に強引に手を引いて、あるいは満面の笑みで甘やかしてくれた。あたしの意見を尊重してくれて、かわいい笑顔で癒やしてくれた。荒れたあたしの手を、慈しむように両の手で包み込んでくれた。水仕事もするあたしの手はカサカサだったし、元々がそんなに綺麗じゃない。でも彼は頑張っているこの手が好きだと言ってくれた。

「どんな手よりもこの手が愛しいよ」

そう言って、口付けた。

きっとこの時、あたしの心は彼に完全に奪われたのだ。

街中に王子の婚約の噂が囁かれはじめたのも、思えばこの頃だったと今更に思い出した。

付き合うにつれて、彼のことも少しずつ見えてきた。初めて会った時からまるで紳士のような立ち居振る舞いをしていた少年。大きな口を開けて元気いっぱい笑いながらも、どこか気品を窺わせる態度や仕草。金銭感覚のなさ。屈託のない笑みの中に時折現れる、真剣な男の顔。皮肉を口にすることも稀にあった。その理由をあたしは最悪の形で知ることとなった。

よく晴れた日だった。今日も仕事を頑張ろう。そんな風に朝から考えたくなるような天気だった。あたしは軽い足取りで店へ向かっていた。その途中で見知らぬ男に呼び止められた。身形《みなり》がいい。一目で貴族だとわかるような格好だった。栗色の髪と顔立ちがどこか彼に似ていた。だからかもしれない、男に何の疑問も持たず付いて行ってしまったのは。

男は値踏みするようにあたしを凝視した。と、思うと大きな溜息を零した。それは誰がどう考えても落胆の意味に違いなかった。

「別れてくれないか」

建物から張り出した露台、赤い格子戸の内側、到底あたしが来られないような場所で男は言った。そこは街の者でも特に裕福な者たちがよく使っている店だ。あたしの働く店は、店員と客が簡素な仕切り一枚で仕切られたくらいの小さな店。露台もないし、綺麗な格子戸で仕切るなんてこともない。ただでさえ緊張しているのに、この男は更にそれを高める。

男の青の瞳は彼と同じなのに、まったく違った。ナイフのように鋭い言葉にあたしは意味がわからず聞き返した。

「王子と別れてくれ。あんたもこの国の人間なら今がどれだけ重要な時期かわかる筈だ」

王子って誰のことだろう。言われて思い当たる人物は一人しかいなかった。男の青い瞳があたしを映していた。彼しか、頭に浮かばなかった。それにもう一つ、気になることを男は言った。

「重要な時期っていうと……」

「重要は重要だ。隣国は疲弊しきって戦う力は残っていない。今なら、民の望む平和な世を築くことができる。その一番の好機なんだ。邪魔をしないでくれ」

青い瞳が恐ろしかった。あたしを認める気がまったくないことを教えてくれる。

「もし今のこの時期でなくても、お前のような者が王子にふさわしいということはない」

追い打ちのように放たれた言葉が、私の胸に深く刺さった。

その後のことはよく覚えていない。

ただ、気分よく迎えた朝はもう翳《かげ》ってしまっていた。あたしはその日、仕事にお皿を三枚も割ってしまった。

「今日は随分とぼんやりしているようだ。どうかしたの？」

給仕の途中でふらついたあたしを彼が支えてくれた。彼が来店していたことにすらあたしは気付いていなかった。昨日までならすぐに目に入ったのに、今日ばかりはそうもいかなかった。

「……本当にどうしたの？ 顔が真っ青だ」

何も返事が出来なくて、けれどあたしを支えるたくましい腕を放したくないと思った。彼と居ると安心する。あたしを不安がらせないように大切に扱ってくれる。そう、まるでお姫様のように、宝物のように扱ってくれる。その気遣いが嬉しかった。

「もう今日は上がった方がいいよ。わたしが女将さんに伝えよう」

彼はあたしを気遣ってくれた。そのやさしさに救われていた。でも、と疑問が湧いてしまう。やさしさはきっとあたしだけに向けられたものではないのだろう。

今はあたしだけに向けられている。けれど彼が皆にやさしいことをあたしは知っている。街を散策している途中でも具合の悪い人を見かけると必ず彼は声を掛けた。そのことを好ましく思っていた。

「ただの偽善者だよ、わたしは。君の方がよっぽどやさしい」

彼はよく、そう言いながら笑った。少しだけ眉を下がらせて。

だがそんなことはない。偽善だとしても出来ない人は出来ない。

あたしは結果的に家に帰らされることになった。彼が、あたしを帰らせるように女将さんに交渉してくれた。皿を割った効力なのか、その申し出はすんなり受け入れられた。握った手から与えられる温もりが心地よかった。この温もりが続けばいいのにと思った。

「あ、キレイな兄ちゃんだ！」

店を離れ、いくらか進んだところで子どもが手を振りながら寄ってきた。あたしの知らない子だった。子どもは彼の知り合いのようで、あたしが居るのに気付くとにやにやと笑い出す。

「キレイな兄ちゃんの彼女？」

「あ、そ……！」

「うわー照れてるー。かーわーいーいー」

「こ、こら！ 年上をからかうものじゃないよ」

彼は顔を真っ赤にさせて子どもに叫んでいた。こんなに必死に叫ぶ彼を見るのは珍しかった。けれど恥ずかしがりながらもどこか笑顔の彼にあたしは驚いた。

「おや。本当だ、今日はいい人を連れておるのう。しかも姉《あね》さん女房かえ。やらしいのう」

今度はおじいさんだ。子どもに誘われて出てきたのか、足元に先ほどの子どもがしたり顔で立っている。その時あたしの手が急に空気に触れた。彼があたしの手を解いて、おじいさんの方へ行ってしまったのだ。抗議する彼の微笑ましさについ笑みが零れた。そして、何故か視界が滲んだ。

彼への愛しさが奥から奥から溢れている。それなのにあたしがでしゃばってはあたしの願いは叶わない。戦争が嫌いだという気持ちは本物だ。故郷を失くしたり、家族を失ったり、哀しい想いをする必要のない世界が欲しい。

どうして邪魔なんて出来ようか。あたしは男の言葉を思い出す。次第に顔が醜く歪んでいく。

どうして邪魔なんて出来ようか。あたしは願っていたのだ。戦がなくなることを、ずっと。その方法が例え、隣国の姫と王子の結婚という形になるとしても受け入れるべきなのだ。

彼は必要とされている。今もこんなに皆に慕われている。王子だからではない。そんな薄っぺらな理由ではない。彼をあたしだけのものには出来ないし、してはいけない。彼は彼だからこそ皆に必要なのだ。あたしは彼の隣に居る資格など初めから持っていなかったのだ。

犠牲が必要ならばそれはあたしだけでよかった。ただあたしが心を決めてしまえばよかった。

「どうしたの？」

目尻に涙を滲ませたあたしに、彼は驚いていた。心配をしてくれるその気持ちがあたしを慰めてくれた。

「なんでもない。ゴミが入っただけよ」

あと少しだけ、とあたしは彼の腕に絡みついた。彼の身長はいつの間にかあたしよりほんの少し高くなっていた。

彼があたしに大事な話をしたいと言ってきたのは男に会ってから五日も後のことだった。あたしは表面上、何事もないように振る舞ってその夜に会う約束をした。普段より沈んだ彼の表情が話の内容を物語っていた。何を言われてもあたしは答えを決めて、彼に会いに行った。

「急に呼び出してしまって、すまない」

突然会いたいと言ったことをまず詫びるところが普段と変わりなくて、あたしは苦笑した。初めて会った時と違って大人びた顔。目線も彼の方が高くなった。面影は残っているものの、彼は随分と大人になった。微笑ましいと思っていた彼の成長が、今はもう素直に喜べなくなってしまった。

「聞いて欲しい」

真正面からあたしを見つめてくる瞳に吸い込まれそうになる。綺麗なサファイア。一拍の間を置いて、彼はあたしの両手を彼自身の手で包み込んだ。

「隠していて申し訳ない。わたしはこの国の第一王子だ」

ああ、やはり。まるで遠くからこの光景を眺めているような感覚になる。

「しかしわたしは、貴女を愛している。だからわたしと、一緒になって欲しい」

期待と不安が入り混じったサファイアから、あたしは知らず視線を外す。わかっていた。彼があたしに好意を持ってくれていることなんて、とっくに気付いていた。彼の全部があたしに好意を示してくれていた。胸のうちにじわじわと広がるのは喜び。嬉しい。ありがとう、あたしも貴方が好きよ。そう言ってしまうればどんなによかっただろう。

「隣国の姫との婚約は……」

もう店の中や、街の至るところで王子の婚約の噂が囁かれている。あたしだって、その噂を最初聞いた時はなんて素敵なことだと舞い上がった。その婚約によってあたしの故国も、あたしの住むこの国も、争わなくて済むのだと喜んだ。父のように、戦争で死に行く人間がいなくなる。故郷を焼かれることもなくなる。人々が穏やかに生きていられる国になるのだと無条件で歓迎した。

「その話は白紙にするよう、わたしが説得する。いざとなったら、弟に婚約してもらえばいい」

涙が、出そうになった。

「わたしの伴侶になってくれないか」

「伴侶？」

鸚鵡返しに訊いたあたしに彼は厳かに頷いた。

「わたしの妻に、いや一妃として貴女を城に迎えたい」

嬉しくて、胸がいっぱいで、そして哀しくて、涙が出そうになった。

「あたしが貴方の妻になったら戦争はどうなるの？ 隣国とまた争いになるの？」

「それは……それはまた別の方法がある。だから貴女が悩むことではない」

彼の手が強く、あたしの手を包む。痛くはない。けれど、彼の想いの強さを表しているようだ。あたしはその手をそっと押しやって、反対に包み込んだ。本当は強い力であたしを身体ごと抱きしめて欲しかった。そしてそのまま奪い去って欲しかった。誰も彼とあたしの邪魔などしない場所へ連れ去って欲しかった。けれど、彼には出来ないと知っていた。

彼はたくさんの命を背負っている。その中にはあたしも含まれていて、その命には等級があるようでいて、実は同格なのだ気付いていた。もっと悪いことに、あたしの方が本当は低いのかも知れない。彼は自分を犠牲にする人だと、そうしてしまうほどやさしい人だとあたしはわかっていた。傍に居るならば同様に皆の命の選択を迫られる。彼の一番近くにありながら、最も遠くに追いやられるのだろう。

「だめよ。それが最良の方法だと王様がお決めになったのでしょ。だったらそれに従わなくては。あたしのような小娘に、貴方は惑わされてはいけないのよ」

「そんなことは！ わたしは……」

あたしはただの力のない娘だ。あたしが隣国の姫であれば、あるいは力を持った貴族の娘ならばよかったのと思う。でもそれはあり得ない。あたしは隣国の小さな村に生まれ、戦火を逃れてこの国にやってきた、慎ましやかに一日一日を暮らすしかない。

そんな、ただの小娘だ。

「聞いて。あたしの幸せを願うのなら、お姫様と一緒にあって、争いを止めて。それがあたしの一番の願いよ」

「それが貴女の願いなのか」

「ええ。もう戦争はいや」

あたしの手は小刻みに震えていた。彼は気付いただろうか。

父のことが頭をよぎる。けれど震えの理由はそれだけではなかった。

「それでは、わたしへの返事は……」

泣くな。

「ごめんなさい」

泣くな、あたし。緩みそうになる涙腺を、必死で押さえ込む。彼の手を離して、あたしは自分の胸の前で両手を握り締める。

「あたしは貴方と共に歩めないわ」

笑え、笑うのよ。唇の端を持ち上げて、しっかり彼の目を見て、笑うのよ。

「さよなら」

告げた瞬間に涙が零れそうになる。けれど零れたのは、あたしではなく彼の涙だった。頬を伝う水滴を綺麗だと思った。彼はあたしの肩をやさしく抱いた。額にやわらかな彼の唇が落とされる。

「それでも、わたしは貴女を愛している」

やさしい言葉に見え隠れする強い意志。

「わたしの傍に誰がいようと、心は貴女に奪われたままだ。永遠に、わたしは貴女を愛し続けます」

あたしはどんな顔をしているだろう。微笑むことが出来ているだろうか。彼はあたしのためにあたしを諦めてくれたのだ。絶対に笑って送り出さなくてはならなかった。あたしは彼の体温に安堵しながら、彼に最後となる言葉を告げた。

「ありがとう」

仲睦まじい様子の王子とお姫様は誰から見ても似合いの二人だった。城ではこの後盛大な式が行われるのだという。周囲にひしめく歓喜が耳に痛い。

笑顔で観衆に向かう彼に一片の曇りも見当たらない。どうしてだろう。視界がぼやけてきた。手を顔に当てたら、知らずに涙を流していた。皆は城を向いている。あたしは両手で顔を覆った。見てもらえない。

恍惚の表情で城を見上げる集団が滑稽に思えた。でも本当に滑稽なのはあたしだ。まるで道化。王子の答えを否定したのはあたしなのだから、どうしてこんな場所にまで来ているのよ。未練なんかみせてはいけないというのに、あたしは何を期待していたんだろう。人の波に逆らって、あたしは城から離れようと身体を捻る。あたしの居場所はもう彼の隣にはない。仲睦まじい二人にあたしは背を向けた。

せめて、せめて今のあたしに気付いて欲しいと願ってしまう。そんなことありはしないのに、あたしは醜くも願ってしまう。一人だけ背を向けている女があたしだと気付いてくれたら嬉しい、と。それを見て、彼が一瞬でも笑顔を曇らせてくれたら――。

もう忘れることなんて出来ない。

心を奪われた女のことを胸に抱えたまま、貴方は生きていくのだ。

恵陽（けいよう）

http://www.geocities.jp/keiyo_u/top.html

現代、ファンタジー、コメディ、シリアス、様々なジャンルで書きたいものを書き散らしています。その中の一つでもあなたの心に響けば嬉しいのです。

女将（おかみ）

まだまだ未熟者ですので、どこまでできるか怪しいですが精一杯やりたいと思っています。どうぞよろしくお願いします！

今から雨を降らせます！
手鞠姫となった少女は、
大切な想いを胸に雨を祈る。
心ほっこりしっとり
現代青春メルヘン

A detailed illustration of a young girl with long, dark blue hair and large, expressive blue eyes. She is wearing a vibrant red kimono with a floral pattern. She is holding a small, light blue bird with its wings spread, as if it is about to fly. The background is a soft, blue sky with a checkered pattern and some faint, stylized clouds. There are also some green leaves and a large, stylized red character '火' (fire) in the background.

空も一緒に
泣くから

天菜真祭

illustration

天菜真祭

衣装合わせと進行説明会を一度に片付けることにしたその日は、とにかく早起きした。

始発電車で飛び乗って、乗換駅の売店でジャムパンを買って、新幹線の中で朝食代わりにかじった。それから、また在来線に乗り継ぎして……最後は、市内巡回コミュニティバスで、祐久市役所西館へ向かった。

梅雨が明けたとたん、夏空はてんでん干しで、日傘を広げても目が回った。市役所前のバス停を降りて少し歩くだけのちょっとした間でも油断大敵と思っていた。私は色白だから、紫外線にはすごく弱い。うっかり焼くと大変な目にあうから、日焼け止めを塗りたくって、真っ黒な日傘を持ち歩いていた。

自動ドアを通り抜けた先、西館の一階ホールは、エアコンが良く効いていて幸せだった。何とか、約束の時間までに辿り着いて、ほっと、ひと息ついたところで、ちょっと芝居がかった声に後ろから呼ばれた。

「お疲れ様です。手鞠姫《てまりひめ》さま」

振り返ると、私の担当者をしてくれることになった祐久市観光協会の青井さんが、銀色眼鏡の向こうでにっこり。私は、ぷいっと膨れて見せた。

「橘智菜《たちばな ちな》です……こんな場所で、そっちの呼び方はやめてください」

青井さんは、困って見せた顔で、それでもへらへら笑った。営業スマイルっていうの。大人っでずるいなと思った。

「長旅でお疲れのところ、恐縮ですが、早速、衣装合わせをします。こちらへどうぞ」

私は、もう一回、膨れて見せた。

市民のみなさんによる手作りのお祭りだから、出演する私の衣装も、地元の服飾専門学校で縫製やデザインを学んでいるお姉さんたちが作ってくれていた。何でも、約七十年ぶりに手鞠姫が代替わりするから、今年の雨乞い夏祭りについては、準備に関わってくれたみなさんの気合いの入り具合がいつもと違うらしい。

菊子おばあちゃんの遺言だから仕方ない。それでも、すっかり、おもちゃみたいに、いじくり回されるのには疲れた。

最初に案内された部屋は小さな和室。観光協会が招いたお客さま向けの控え室らしい。そこにステージ用の巫女さん衣装みたいなのと、浴衣がそれぞれ複数パターン用意されていた。仮縫いされた衣装に袖を通すと、専門学校のお姉さんたちに取り囲まれた。

「ちっちゃいね、本当にあなた、中学生なの？」

「細いね……ウエスト、もう少し絞ろうか」

「髪飾り減らした方が良いわ。多過ぎると、お稚児さんになっちゃう」

お姉さんたちは楽しそうに、くすくすと悪戯笑い。

失礼なことを言われている気がしたけど、みんな悪気はないし、変に気を使われない方が楽だ

から我慢した。

昼食は西館二階の職員食堂で済ませた。そのまま同じテーブルで、夏祭りの説明会になった。とにかく時間が足りないから、本当に大忙しだった。つまり、夏祭りの実行委員会の人たちに取り囲まれて、次々と会場配置やタイムテーブルを詰め込み勉強させられた。

例えば、ちょっとゴツイ感じの機材担当さんからは、「注意事項というかお願いですが.....当日は十時三十分までは雨を降らさないでください。メイン会場の演出に花火を使用しますから」

と釘を刺された。張りぼてか何かに少量だけど花火を仕掛けるらしい。どういう演出なのかは理解できなかったけど、濡れると困るのは確かみたい。

それからと、今度は進行係さんが、タイムテーブルを印刷した資料を私の前で捲りながら続けた。

「十三時から中央運動公園Aグラウンドで保存会による火縄銃の演目がありますから、この前後も雨は避けてください」

他にも三味線や大正琴の演奏時間も楽器が濡れるからダメとか。こんな感じの説明が延々と続いた。私が雨を降らせてもいいタイミングは、雨乞い夏祭りっていうのに意外に限られていた。ちょっと心配になった。おばあちゃんから手鞠姫の役を引き継いだばかりの初心者だから、私、指定時間を避けて都合良く雨を降らせるなんて、できる自信がなかった。

とにかく間違えないように資料を蛍光マーカーで塗りながら確認した。他にも来賓のみなさまへのご挨拶とか、恥ずかしいことにパレードにも参加させられるとか。チェック用の蛍光マーカーを握ったまま、おもちゃにされているような気がして、ため息が零れた。

こんなに詰め込み学習なのは、私が帰りに乗る新幹線の時間が決まっているからだった。

最後に、大急ぎで仕上げてもらった衣装を身にまとってのポスター撮りになった。

「ミス祐久のみなさんのポスターがあるんだから、本番まで一ヶ月ないんだし、今更、私のバージョンを用意しなくたって.....」

と、すねて見せても、青井さんに手馴れた様子で切り返された。

「いえいえ、良くお似合いですよ、手鞠姫さま」

絶対、この人、私のこと、小学生扱いしてると感じた。それから、手鞠や扇を持たされて、いっぱい写真を撮られた。カメラマンは地元商店街の写真屋さんだった。「こっちを見て」と視線を指定されるたびに、カメラの傍でクマのぬいぐるみを振られるのは、微妙な感じだった。

今日の日程を何とかこなしたときには、帰りの新幹線の時間がぎりぎりだった。近くの駅まで車を出してもらって、その後はとにかく走って、発車間際に駆け込んだ。

帰りの新幹線の中でため息をついた。まるで不思議な物語の中に迷い込んだように感じた。

この前まで大丈夫だって思えたのは、菊子おばあちゃんが傍にいてくれたからだった。

おばあちゃんにお願いされたから、手鞠姫の役目を引き継いだ。けれども、本当に、私、おばあちゃんみたいに、上手に雨を降らせたりできるのかな？ 車窓を流れる景色を眺めながら、そう思った。

私が泣きたいときは、空も一緒に泣いてくれる。

そう思うようになったのは、小学校五年生の夏休みだった。学校の中庭に小さなウサギ小屋があって、そこにそれぞれのクラスで一匹づつウサギを飼っていた。

私のクラス、五年二組では「リン」と名付けた真っ白な雪ウサギを飼っていた。

私は、一年生からずっとウサギの飼育係をしていた。不思議な色合いをしたウサギたちの目が、私の左目に似ている気がしたから。

私、左目だけ、ほんの少しだけ青色がかかった色をしているの。それにすごく色白だから。

だから、幼稚園の頃には、先生が「智菜さんは、ウサギさんみたい」って可愛がってくれた。それが嬉しくて、ウサギが大好きになった。

だけど……リンが死んだの。

夏休み中だったから、連絡が取れて教室に集まれた子だけで、リンのお別れ会をした。

お花を入れた小さな段ボール箱が用意されても、私はリンを取られないようにぎゅっと抱いて、すすり泣いていた。

「智菜さん、そろそろお別れを……」

先生の優しい声が肩をたたいた。

それが合図だったみたいに、私は声をあげて泣いた。

リンを見送った後も、ウサギ小屋の前で泣き続けていた。

そうしたら、雨がぽつぽつと降り始めた。

何となくだけど、私の気持ちが空まで届いた気がして……もっと、もっと、いっぱい雨が降ったらいいと思った。そうしたら最後は、土砂降りになってしまった。泣き疲れて、雨にぐっしょり濡れて帰った私は、結局、夏風邪をひいて一週間も寝込んでしまった。

私、もしかしたら「雨女」かも知れないって思ったのは、その時が初めてだった。

次に私が、思いっきり雨を降らそうと思ったのは、去年の初夏のことだった。

理由は、恥ずかしいけど、失恋だと思う……たぶん。

中学校にあがって、すぐ、まだ部活をどこにしようかって迷っていた頃だった。

お母さんが厳しかったから、私はピアノや習字など幼い頃から色々と習い事をさせられていた。油彩画のことも、ほんの基礎だけど、自宅近くの教室で習っていた。そんな繋がり美術部へ見学に行った。

そこで、私は先輩に見初められたの。

「君を描かせてほしい」

背が高く知的な人で、眼鏡越しの視線が不思議だった。だから、うっかり「はい」と即答してしまった。

それから一ヶ月の間、放課後は毎日、美術部の部室へ通った。廃部寸前の美術部で、ちゃんと活動しているのは、先輩ひとりだけだった。

だから、先輩とふたりきり。

それに、「描く」といっても……私は、椅子に座ってぼんやり雑誌を読んだり宿題を片付けたりするだけだった。先輩が一生懸命にキャンバスと格闘しているのに、私はぼーとしてた。それなのに先輩は雑談の相手もしてくれたし、宿題も見てくれた。

「あれ、先輩、おつゆ描きはバートシェンナーとかじゃないんですね。ビリジャンですか？」

ひょいとキャンバスを覗いたら、先輩は木炭描きの上に、緑色の絵の具で描き始めていた。テレピン油で茶色系の絵の具を薄く溶いて使うから、おつゆ描きっていうのに、なぜ？ と疑問を感じた。

「特別な絵だから。いつもと違うやり方をするんだ」

つぶやいた先輩の声は少し低くて、追い詰められているみたいで、ちょっとだけ怖かった。

後から知ったけど、三年生の先輩は、進学先を決められずに悩んでいた。それで、担任の先生から県主催の美術展に入選したら美術系の専門学校へ行ってもいいって言われていたらしい。

だけど、何も知らなかった私は、その時はごく暢気《のんき》に気のせいと思った。

絵がもうすぐ描きあがる頃になって、急に先輩の様子が変わった。

「ありがとう、もう、明日からは来なくていいよ」

えっ……？

ぶっきらぼうな言い方で、絵が完成したという雰囲気じゃなかった。気持ちが途切れたみたいな言い振りに驚いた。キャンバスを見ると、ほとんど絵はでき上がっていた。背景の一部がまだ描けていないくらい。

「あの、もうすぐ、完成みたいだから、明日もお付き合いしましょうか？」

先輩が首を振った。パレットや絵の具を片付け始めていた。

「まるで描けなかった。この絵はこれで終わりにするよ」

寂しそうな言葉が痛かった。だから、片付けられてしまいそうなキャンバスの前に廻り込んで両手を広げた。

「こんなに上手に描けてるのにもったいないですよ。それに私、来週も空いてるし……」

だけど、先輩の声がそれを撥ね退けた。

「もういいって言ってるんだ」

怒気を抑えきれない声とともに、先輩は手にしていた絵筆を折って、乱暴に床に投げ捨てた。

「何してるんですか、絵が描けなくなっちゃうじゃないですか」

慌てて床に散らばった絵筆を拾い集めた。まだ絵の具が残ったまま折れた絵筆も仕方なく拾った。

「卒業したら、美術の専門学校に行きたいって言ってたじゃないですか。それなのに、急にどうして？」

私まで、泣きそうな声になっていた。

「この一枚でわかったよ。僕には才能がない。先生の勧めるとおり普通科に進学するよ」

新入生の私には、三年生の先輩の気持ちは全然わかってなかったと思う。

「せっかく、上手に描けているのに……」

そう、ぽつりと言葉に出してしまったのが、引き金だった。

「上手な、じゃだめなんだ。上手って言われるだけじゃ……美術を目指している奴らの中には、特別な絵が描ける奴がぞろぞろいるんだ」

先輩の声に泣き声が混じった気がした。うつむいていたし、見てはいけない気がした。

だけど……

「そう、智菜みたいな生まれつき特別な何かを持っていたら……」

えっ……？

「智菜を描きたいと思ったのは、智菜の左目が特別だからだよ」

ぶっきらぼうな言葉に驚いて立ち尽くした。

「虹彩異色《こうさいしょく》とか言うんだろ、それ。小説とかのキャラでは大人気の設定だっていうし。誰もが憧れるものなのに非常に稀にしかないもの。初めて智菜を見たときには、本当に魔法か何かに見えた」

先輩は描きかけの絵を眺めながら、泣き声混じりにつぶやく。それは、斜め左から見た構図の私の姿。椅子にかけて本を読んでいる様子を透明な感じに描いていた。ちょうど中央に淡く青色を載せた左目が描かれている。

「特別な題材を描けば、もしかしたら僕にも特別な絵が描けるかも知れないと思った。自分にも他の奴らみたいな才能があれば、目覚めるかも知れないと思った。だけど、だめだった」

「そんな……だって、もっと上手くなるために専門学校に行くんでしょ？」

だけど、私の言葉に答えずに先輩が振り返った。

「智菜の左目は、本当に綺麗だ」

震えたその声を怖いと思った。

「その目で見たら、僕が見ているのとは、もっと違う世界が見えるのだろう？」

先輩の視線がまっすぐ私の左目を見据えた。

「あの桜の絵を描いたのは、智菜の瞳が蒼いからなんだろう？」

すぐには先輩が言う言葉の意味がわからなくて、小首を傾げた。

すると、先輩はスケッチブックの間から、地元の県立美術館主催らしい美術展の募集要項を取

り出した。その裏面に過去の入選作が紹介されていた。そこに小さくだけど、私が描いた絵の写真もあった。

それは、小学五年生の時に描いた絵だった。

すっかり忘れていた。写真を見せられて、こんな形で先輩から意識されていたことに初めて気づいた。

「智菜には、誰にも見えないものが見える……特別な色彩感覚があると思う」

惨めな羨望に泣き濡れた声があった。

目眩がするほどに蒼い空の中に、白い桜の花が輝いていた。空の色が花びらに透けていた。だから、桜の花びらを藍色に描いた。私自身では、何でもない絵と思っていた。子供部屋の窓から見えた景色を描いただけ。自宅近くの堤防に一本だけ古い桜の木が毎年咲いていた。

だけど、面白い絵だからって、絵画教室の先生が美術展に送ったら、佳作になった。絵のサイズの号数指定も緩かったし、年齢制限もなし。そんな美術展だった。きっと、小学生の絵だからって、大甘に評価されているんだと思っていた。だから、すっかり忘れていた。

「特別ななんて、何もないです。だって、地元の美術展だし、それに小学生の頃にちょこっと描いただけなもの」

笑って見せた。それなのに……先輩がパレットナイフを握った。

「それを特別な才能があると言うんだ。僕はこんなにも苦しんでいるのに、智菜は県美に入選することに何の価値も感じないのか」

怒気を押し殺した声、褐色の絵の具に汚れたパレットナイフが振り上げられた。

やだ……

「叶うなら、その左目をパレットナイフで抉り出して、僕の目と交換したいくらいだ」

私の瞳の中で、先輩の嗤い顔がにじんでいく。

「君は、僕がこんなにも切望しているものを生まれながらに与えられているんだ」

先輩は力なく嗤った。好きだと思った人だから、身勝手に羨ましがられることが許せなかった。

謝ってっ！

短い沈黙の時間の後、私は声をあげた。

「どうして、私のせいにするの。特別って何？ こんなものが欲しいんだったら、カラーコンタクトでも入れたらいいよ」

私、望んで、こんな色の瞳をしているわけじゃない。それに、特別な才能なんて存在するわけじゃない。私は散々に冷たいことを言って、泣き出してしまった。

先輩は疲れきった声で私に詫びてくれた。そうしたら、やっと、この人を傷つけたことに気づいて、怖くなって、私は美術室から逃げ出してしまった。

後になって思い返すと、なぜ、あんなことを言ったんだろうって後悔する。きっと泣きたかったのは先輩の方だったはず。美術展に入選することが、先輩の進路決定にとって特別な意味を持

つなんて、あの時の私には理解できなかった。

もう、その後は先輩とは一度も会っていない。進学校に合格したと聞いているけど、今頃どうしているだろうか？ 本当にひどいことを言ったと思う。もう、会えないけど、ごめんなさい。

美術室を飛び出した後は、誰かに泣き顔を見られたくなくて、屋上に逃げていた。泣いておなかが空いたから、かばんの中に潜ませていたビスケットをかじった。そうしたら、鳩が一羽、寄って来たの。

「あなたもおなか、空いたの？ にこにこ動物ビスケットだけど、食べる？」

そのままだと鳩のくちばしには大き過ぎるから、手の中で握って砕いた。鳩の前に左手を差し出して開いた。鳩は嬉しそうに手の中のビスケットの欠片をついばみ始めた。

そうしたら、他の鳩も次々と寄って来たの。私はまたビスケットを砕いて、後から来た鳩たちにも分けた。そうしているうちに、ふと気づいた。

砕けたビスケットがまるで今の自分の気持ちに似ているって。

見上げると、まだ五月なのに西空はまるで夕立が来そうなほどに暗くなり始めていた。

私が泣きたいときは、空も一緒に泣いてくれる。

もしかしたら、私には雨女の才能があるのかも知れない。先輩の言う特別な才能なのかどうかは、わからないけど。でも、今日は、いっぱい泣こう。そう思った。

だから、手の中にビスケットを包んで、泣きたい気持ちを込めるようにぎゅっと握って砕いた。

「私の気持ち、届けておいで」

空に向かって放り投げた。私の周りに集まった鳩たちは、一斉に空に舞い上がって行った。

そして、その夕暮れは、学校のグラウンドが池みたいになるくらいの大雨になった。

それから二ヶ月ほど後、去年の夏休みのことだった。

この瞳の色のせいで失恋したって、しょげて失恋後遺症みたいに引きずっていた。

遠いお母さんの実家から電話があったのは、そんなときだった。その日は夜遅くまで、お父さんとお母さんが何事か話し合っていた。

次の日の朝、私を、お父さんは遠い実家に連れて行くって言い出した。もちろん、初めはお父さんもお母さんも何を考えているのか、想像もできなかった。

高速道路を三時間ほど走って、県道をしばらく、さらに山間の林道みたいな細い道をかたごと。着いた先は、祐久市北部の大きな茅葺屋根の農家だった。

「智菜に会わせたい人がいるんだ」

そう言われて紹介されたのが、菊子おばあちゃんだった。

軒下に玉葱が吊してある大きな農家、その一番奥の部屋に案内された。襖を開いた向こうは、本の匂いがする書斎のような不思議な和室だった。その中央に、着物姿のおばあちゃんが待っていた。

「その子かい。新しい手鞠姫の御霊《みたま》の宿り先は……」

菊子おばあちゃんの最初の言葉は、不思議な単語を含んでいた。

「はい。娘の智菜です。十三歳になりました。でも、手鞠姫うんぬんは非科学的と思いますけどね」

遠慮がちに応えるお父さんを見て、そう言えば、できちゃった結婚だったんだと思い出した。お父さんとお母さんにとって、この祐久の家の敷居はチョモランマよりも高いらしい。大人の事情は良くわからないけど、お座敷に座ったおばあちゃんは穏やかな表情で私を見ていた。

それにしても、手鞠姫って何？

私が首を傾げていると、おばあちゃんが手招きした。

「紗枝《さえ》も、あなたも、忙しいばかりで結婚して以来、顔も見せてくれないんだからね」

お母さんも仕事があるから、と言い訳して逃げているらしく、めったに実家には帰っていない。お父さんは申し訳なさそうに苦笑いを返している。だからかな。孫娘の私が歩み寄ると、おばあちゃんは目を細めた。

「嬉しいねえ、私が手鞠姫を継いだ若い頃にそっくりだよ……それに、綺麗な空色の瞳をしている」

声の色合いに気づいておばあちゃんを見ると、私と同じ淡く青味を帯びた左目をしていた。

それから、おばあちゃんは一冊の絵本を取り出して教えてくれた。

「この祐久の里には、手鞠姫という妖怪のお姫さまの昔話があるんだよ」

それは、むかしむかし、遠い都からやって来た手鞠姫という妖術を使うお姫さまが、祐久の里を荒らしていた悪い龍を退治するお話だった。

手鞠姫は、悪事を反省して謝った龍を助ける代わりに、龍の持つ雨を降らせる妖力を手に入れた。龍が立ち去った後、祐久の里では手鞠姫の子孫たちが代々、雨を降らせているという。

千切り絵細工で飾られた凝った古い絵本は、そんな内容だった。巻末には、古いお寺に伝わる縁起絵巻物らしい写真も添えられている。

「昭和五十年代に祐久が市になったときに、記念に作られた本だよ」

私が珍しそうに厚手の絵本を捲っていると、おばあちゃんが教えてくれた。

それから、ため息をひとつ零してから、居住まいを正した。

「智菜さん、あなたを呼んだのは、その手鞠姫のことです」

隣に座っているお父さんが、微かに笑ったように感じた。

「あなたに、手鞠姫の役を継いでもらいたいのです」

えっ？

「ちょっと、急にそんなこと、言われても、困ります」

驚いて声をあげた私に、おばあちゃんは今度は雰囲気をもてなして笑った。

「わかっているよ。必要なことは、これから教えるし、なあに、手鞠姫っていうのは、隆弘《たかひろ》さんの言うとおりの『非科学的』なものさ。お祭り行事ぐらいにしか出番はないよ」

お父さんまで、おばあちゃんの言葉に調子を合わせてうなずいている。

「で、でも、私、高校受験とかもあるし……」

さすがに即答はできないから、困って言い逃れをした。

「智菜、手鞠姫になれば、いずれこのお屋敷や財産を相続することになるから、少くく成績が悪くても大丈夫だよ」

お父さんとおばあちゃんの笑い声が座敷に弾けた。ちょっと、驚いた。お父さんってば、いつもは、もっと勉強しろって言うのに……

私が座布団の上で固まっていると、おばあちゃんは昔ながらの黒電話を取り出して、どこかへ電話を始めた。テレビのドラマでしか見たことのないダイヤルをころころ廻す仕草は不思議に思えた。

そして、地区の総代衆とか市役所とかに電話した後に、私へ振り向いた。

「決めかねているようだから、試しに雨を降らせてみようじゃないか。このところ、日照り続きだから、あちこちの村の総代衆からもぜひにと、お願いされているしね」

えっ？ 障子を開いて外を確認した。今日も、いい天気、雨なんて降りそうもない。

「心配しなさんな、あなたには手鞠姫の御霊が憑いているんだから」

そう菊子おばあちゃんは楽しそうに笑った。もちろん、てんてん干しのお天気なのに、急に雨が降るなんて信じられなかった。確か天気予報でも降水確率はゼロで、「紫外線に注意しましょう」だったはず。

だけど、本当に夕方には雨が降った。

といっても、何か特別なことをしたわけじゃなかった。おばあちゃんに言われるまま、実家の伯母さんに手伝われて、気持ちの良い紬の着物姿になって、それから……広い庭の隅にあった小さな土盛の山に、柄杓で水を少しかけただけ。

おばあちゃんは隣で見ている、私に作法みたいなことを教えてくれた。でも、本当にそれだけ。お父さんは、嬉しそうにデジカメで写真を撮っていた。学芸会みたいな気分だった。

その後、おばあちゃんと一緒に住んでいる親戚のみなさんの帰宅を待って賑やかな夕食になった。畑から採れたばかりのトマトやキュウリを盛り付けた冷やし中華は、とても美味しかった。少し涼しく感じるくらいに、雨が祐久の山と街を濡らしている。

それから、おばあちゃんには、市内の色々な人や所から次々と電話が掛かって来た。

夕ご飯の途中なのに、古びた黒電話が何度もりんりんと鳴るたびに、おばあちゃんは嬉しそう

に電話に出た。そんな様子を見ていると、失恋後遺症で塞ぎ込んでいたはずの気持ちが、なぜか軽くなった。十本近い電話を受けた後に、おばあちゃんは優しく笑いながら私に向き直った。

「智菜さんのおかげだよ。やっと、祐久に雨が降った。六月末からまるで降らないから、断水なんて話も出てたけど。みんな助かったって、こんなにお礼の電話が来たよ」

そんな、私、本当に、何もしてないのに。

私が困った顔をしていると、おばあちゃんが冷やし中華にマヨネーズをたっぷりかけながら、いたずらっぽく笑った。

「まあ、雨乞いなんて科学的じゃあないけどさ」

冷やし中華にマヨネーズ、たっぷりって、いったい？ 深く考えない方が、いいところもあるみたいだった。

その夜は、蚊帳を張った部屋をひとつ貸してもらい、早めに布団にもぐった。雨だれの音は不思議と気持ち良くなってすぐ眠くなった。

どれくらい時間が過ぎたのか。ふと、目が覚めると隣の部屋で話し声がした。誰か尋ねて来たらしい。

蚊帳の中で聞き耳を立てていると、夕方、電話をして来た村総代のおじいさんらしい。どうやら、雨が降ったお礼にと、お酒を持って訪れたらしいの。キャベツやほうれん草の他に、ナスとかトマトとか夏野菜の名前がいくつか話に出ている。灯りと一緒に、からからと弾けた談笑が襖の隙間から零れている。

耳を澄ますとお父さんの声も聞こえた。

私は、蚊帳の中で寝返りしながら、しばらく話し声に耳を傾けていた。すると、おばあちゃんが、大きめのため息をしたように聞こえた。

「やっと、私の面目が立ったよ。それにしても、私ひとりでは雨が降らなくなったってことは、もう、手鞠姫はあの子をとっくに選んでいたんだね」

急に笑い声が消えて、襖の向こうで、みんな聞き入っている様子が伝わってきた。

「……昭和のあんな時代の頃から、祐久のみんなに良くしてもらって、手鞠姫を続けて来たけど、私もそろそろお迎えが来るのかも知れないね」

寂しそうな懐かしそうな声は、雨音の中に溶けた。ほんの少しの間だけど、雨粒が庭先で弾ける微かな音だけになった。私は枕を抱いたままネコみたいに丸くなって、おばあちゃんが照れ笑いで沈黙を破ってくれるのを待っていた。

それから一週間、お父さんには先に帰ってもらい、もう少しだけ、おばあちゃんの家にお世話になった。その間、ずっと、しとしとの雨降り続きだった。

おばあちゃんは、折り紙が得意で驚くほどたくさんの折り方を教えてくれた。お手玉もしたし、琴も少しだけ触らせてもらった。

そして、帰る日の前夜、おばあちゃんにいっぱい遊んでもらったお礼を言いに行った。

「智菜さん、どうか、手鞠姫を継いでくださいな」

おばあちゃんは、私に深く頭を下げた。慌てて膝を突いた。手を握られて、もう一度、後を継いでくださいと、お願いの言葉を繰り返された。かさかさのおばあちゃんの手が、ぎゅっと私の両手を包んでいた。だから――

「そんな、こんなの困ります。私こそ、私で良ければ、手鞠姫、やらせてください」

おばあちゃんの気持ちがわかったような気がしたから、上手くできる自信はないのに、引き受けてしまったの。

手鞠姫の役を引き継ぐと決めてからは時間が取れたごとに、菊子おばあちゃんの家に行った。お父さんの都合がつけば車を出してもらい、それがムリなら新幹線と在来線を乗り継いだ。お小遣いが電車代に消えてしまうのは正直に言って痛かった。もちろん、お小遣いなんかじゃまるで足りないから、ほとんど、お父さんが出してくれたけど。

引き継ぎに関わる勉強を急いだ理由は、おばあちゃんの体調が良くなかったから。いつも笑っていたから、初めは気づかなかった。お父さんとお母さんから、「実はね……」と教えられたときも、まさかと思った。

去年の秋ぐらいから、おばあちゃんの具合がだんだんに悪くなっていたの。初めは、夏の疲れって言ってた。秋には、もう年だからと笑っていた。

だけど、お正月には布団に臥せったままの日さえもあった。

おばあちゃんは、それでも私に雨の降らせ方を熱心に教えてくれた。私も、勉強は自信がないけど、それでも一生懸命だった。

おばあちゃんは、いつも、からから笑っていた。だから、私も笑い返すことしかできなかった。お互いに言葉にはしなかったけど、もう時間がないことはわかっていたから。

冬休みも泊まりがけで、おばあちゃんから上手な雨の降らせ方を習った。

それは、まるで、風水占いと、気象の勉強と、祐久の里の地理や歴史の勉強をごっちゃ混ぜにしたような変な勉強だった。

それは冬休みも終わりの日、夜更け頃のこと。

火鉢の傍で五行相生絵図《ごぎょうそうじょうえず》と、気象庁の地上天気図とを見比べて「全然、わかんないよ」って、首を捻っていたときのことだった。

ふっと、おばあちゃんの不思議と優しい声がした。

「智菜さん、あなたは優しい子だから、すぐに泣いてしまうけど、あなたが空も一緒に泣くことを望むと、あなたに宿っている手鞠姫は本当に大雨を降らせてしまう」

おばあちゃんの指が、木火土金水《もくかどごんすい》と、五行が次々と相手を生み出す順序に絵図を撫でた。木は火の燃料となり、火は灰を残して、つまり土を生む。土からは金が掘り出

されて、金は水を生むと五行では説明するらしい。そして、おばあちゃんの解釈では、金性を人と読み換えるから、つまり手鞠姫が願えば雨が降るといふことらしい。

おばあちゃんに、すっと抱き寄せられた。着物が擦れ合う音がした。

「陰陽五行での説明は代々伝わる古典的な解釈だけど、手鞠姫が何者なのか私はもう少し違う見方もできると考えている」

秘密を打ち明けるような声色だった。

「古今東西、時代も国も民族も問わず、人は普遍的に神仏に祈るのは、どうしてだと思ふかい？」

不思議な質問だった。だから、ちょっと考えて答えた。

「神さまがいつも見てくれるから……かな？」

おばあちゃんが目を細めて笑った。

「智菜さんは、本当に可愛いねえ。でも、私はそうは思わない」

抱きくすめられて、耳元でささやかれた。

――牡丹雪が軒先から落ちる音がした。

驚いて見返すと、おばあちゃんが人差し指を立てて、「しっ」と内緒だよの仕草をした。

おばあちゃんの蔵書は、和紙に筆書きの古文書だけじゃなかった。量子理論や脳科学に関する専門書も混じっていた。

「まあ、年寄りが暇にませてあれこれ考えたことだから、真偽のほどは定かじゃないけどね」

耳たぶにかかる温もりがささやく言葉は難しく、後で本を読んで調べ直した。

おばあちゃんの言いたかったことは……神さまでも仏さまでもなくて、みんなの心と心が絡み合うことの大切さ。それが願い事を叶えてくれる。きっと、そうだと思うの。

「うちの家系は、願い事をする資質に優れた遺伝子を持っているんだと思う。引き換えに、他人の気持ちを思い遣ることがちょっと苦手だね。いつも私は余計なことを口走って面倒を増やした」

軒先から雪が滑り落ちる音がするたびに、おばあちゃんの視線は遠くを見遣っていた。そう感じた。

「祐久の里の人たちには、だから本当にお世話になったし、助けてもらった」

おばあちゃんのしわしわの指が私の髪を撫でた。

「智菜さんは大丈夫かい？」

首を横に振った。私も冷たいことを言って、先輩を傷つけた。視界が潤み始めたら、おばあちゃんが優しく笑った。

「手鞠姫は、泣いてはいけない。泣くと大雨になってしまうから」

この言葉で気づいた。おばあちゃんがいつも笑っていた理由を。

「あなたはまだ、自分の気持ちと、空の気の流れとが区別できないみたいだから――本当に心の

底から泣きたいと思うと、もしかしたら洪水を起こしてしまうかも知れない。気をつけるんだよ」

そして、おばあちゃんは素敵な笑顔でこう言ったの。

「約束しておくれ。もしも、私が死んでも葬式では泣かない。いいね」

うなずいたとたんに、涙が零れそうになった。

すすりあげて我慢した。

「大丈夫、手鞠姫はひとりじゃない。祐久のみんなは、次は智菜さんを支えてくれるから」

この頃、おばあちゃんは病身を押して、私のことをよろしくと、たくさんの人たちに手紙を書いていた。お葬式の後になって、その手紙のことを知ったとき——どうしても涙が止まらなくて、それでも無理やり笑って、私は必死になって泣かない約束を守った。

おばあちゃんが亡くなったのは、今年の四月初めのこと。

桜の花がしとしと雨に打たれていた。

「最後に、おばあちゃんが雨を降らせたんだ」

そう思えた。その雨も、お通夜が終わる頃には止んだ。

翌朝は爽やかな青空だった。

だから、私はおばあちゃんとの約束を思い出して、とにかく泣き出さないように我慢した。

遺言には、私を手鞠姫にすると書かれていた。それに、引継ぎに必要な色々な仕来りや挨拶先のリストも用意されている。ひとりになった私が困ることのないように、丁寧な文字で手鞠姫にとって入用《いりよう》な事柄を総て書き出してくれていた。

遺品や財産は、お父さんと親戚筋の人たちが分け合った。私には、祐久市郊外にある夕立山とおばあちゃんの集めた気象や昔話に関する蔵書、そして古びた手鞠がひとつ譲られることになった。

「えっと……お山をまるごと、ひとつですか？」

地図を見せられて目を丸くした。何でも市の景観保護条例に守られているから、開発は何もできないけど。頂上に小さな池のある夕立山は、トンボや野鳥の楽園になっているらしい。

それからは、とにかく大変だった。

おばあちゃんは、私に泣いている暇を作らせないつもりらしくて、めちゃくちゃに忙しい日程を遺していた。祐久市内に四十五もある地区の総代衆とかいう、おじいさんたち全部に挨拶回りをした。もちろん、ただの挨拶じゃない。地域信仰っていうのかな。慌ただしくて良く覚えていないけど、挨拶を受ける側に色々と仕来りや決まり事があるようだった。

総代衆のおじいさんたちから、おばあちゃんのことを色々と教えてもらった。

菊子おばあちゃんは、私よりも幼くして手鞠姫になった。私よりもずっと、やんちゃだったらしい。

祐久市には古い町並みが多く残っているけど、それはおばあちゃんがこの街を守ったからだっ

て言うの。太平洋戦争の頃の話、空襲警報が出るたびに、馬鹿でかい、かなとこ雲を作り出して空襲を防いだって……

祐久の里の人たちも、そんなおばあちゃんの気持ちに答えた。

おばあちゃんは、良くも悪くも、自分にも他人にも嘘を言わない人だから、戦時中みたいな難しい時代では色々とトラブルもあったらしい。だから、何か困り事があるたびに街中から大勢の人たちが集まって、おばあちゃんを守った。憲兵隊を総出で追い返したこともあるとか……

花曇りの空を眺めながら、総代衆のおじいさんたちが懐かしそうに語る昔話を聞いた。

それが、終わってひと段落、やっと自宅に帰れたと思ったら、わざわざ、私の通う中学校まで祐久市観光協会の青井さんは押しかけて来た。授業の途中に教頭先生が呼びに来て、なんと校長室へ案内された。当然、最初は話の事情が見えなかったから、校長室へ行くなんて、びっくりした。

それなのに……

「今年は、祐久市、市制三十周年の記念すべき年に当たりまして、新生手鞠姫にぜひ、雨乞い夏祭りの主役をお願いしたく……」

青井さんは、面倒なほどに爽やかな営業スマイルだった。

お祭りの数日前から祐久の家に泊まり込んで、雨乞い夏祭り実行委員会とタイトルされた資料を蛍光マーカーで塗りながら追い込み勉強した。当日は分刻みのスケジュールになっているし、ステージやパレードで使う台詞を暗記しなきゃいけないし、市議会の正副議長さんとか、商工会議所会頭さんとか、来賓の方々の顔写真も覚えなきゃいけない。

それに、雨も降らせたい。

祐久市はもともと雨が降りにくい地域だけど、手鞠姫が私に代替わりして以来、梅雨も少なめ、七月に入ってからカラカラの有様だった。たぶん、用事が済むと、私が新幹線に乗って帰宅してしまうからだと思う。さすがに祐久市から離れてしまうと都合良く雨は降らないみたいだった。

私のこと、晴れ女だとかあらぬ噂も立っているらしかった。あんなに熱心に教えてくれたおばあちゃんのためにも、やればできる子だって、このあたりで見せておきたいと思った。

夏祭り当日は頑張って早起きした。ほんの少しだけ時間をもらって、袂にPHSだけを忍ばせて近所のお寺にあるおばあちゃんのお墓に挨拶に行った。

「頑張ってきますね」

蝉しぐれの中で手を合わせて、たったひとことだけ。いつの間にか、着物姿で歩くことに慣れた気がした。

お祭りは始まってしまえば、後は勢いだけでイベント日程がどんどん進んだ。

最初に、本部テントに居並んだ来賓のおじいさんたちにご挨拶した。けれども取り囲まれて、わいわい騒がれているうちに慌ただしく終わった。誰が誰だったのかは、ちょっと、覚えていない。

駅前公園の特設ステージは、マイクを持ったとたんに、見事にあがってしまって、台詞が全部飛んでしまった。追い込み学習の暗記力には自信があったのに、ちょっとショックだった。パレードに至っては、恥ずかしいので、何も話したくない。

だけど、普段は静かな小さな街なのに、夏祭りの日だけは特別だった。

活気があるっていうか、ちっちゃな子からご老人のみなさんまで目が輝いているっていうか。とにかく、何かが不思議だった。

おばあちゃんが、この街のことを本当に好きだった理由がわかった気がした。

同時に、胸の中に今まで感じたことのない気持ちが浮かび上がってきたの。

たくさんのイベント企画をこなすだけでも一生懸命だけど、それだけじゃ物足りない。

この場所にいるみんなのために、私ができること。

私にしかできないこと。

もちろん、「雨乞い夏祭りで手鞠姫がすることとは、何？」って言ったら、決まっている。

雨を降らせよう。

だから、本部テントにいた青井さんを捕まえた。私は夏祭り会場を離れられないし、色々目立つみたいだったから。

「あの、にこにこ動物ビスケット、急いで買って来てください」

「へ？」

高ぶっていた気持ちのまま、言葉にしたら、当然だけど青井さんは理解できなかった。

「あの……ビスケットがないと、雨が降らないの」

一瞬の間、青井さんが笑った。私が、手鞠姫本来の役目を果たすことを思い立ったと、やっと気づいてくれたらしい。というよりも、青井さんはイベント企画に夢中で、この夏祭りの本来の目的が雨乞いだったことを忘れていたに違いない。

それとも、雨乞いなんて非科学的だから、青井さんたち若い世代の人たちにとっては、イベント企画のためのお題目に過ぎないのかも知れなかった。まあ、私じゃあ説得力が足りないのは仕方がないけど。

「かしこまりました。手鞠姫さま」

またも青井さんは芝居がかった仕草で、それを言う。もう、小学校の学芸会じゃないのに。呆

れてため息をついた。

ステージはミス祐久のお姉さんたちにお任せして、メイン会場を抜け出した。普段の様子からは信じられないくらいに賑わう駅前広小路通りを歩いた。パレード用の恥ずかしい巫女さん衣装じゃなくって、浴衣姿に着替えていたのに、やっぱり私は目立つみたいで、ときどき声をかけられた。

それから、ラムネやリンゴ飴や焼きそば、たこ焼きに金魚すくいに……色鮮やかな露店が並ぶ通りや裏路地を眺め歩いて、隅っこの場所を探した。言葉では説明が難しいけど、雨を願うのにも適した場所があるの。

ここかな？ って場所を見つけたのは、広小路通りからひとつ隣の細い路地。ここにもお祭りの賑わいが零れていた。浴衣姿で細い路地の中ほどに立って目を閉じる。左目だけを開いて色彩の洪水のように飾られた路地と、その向こうの大通りを見遣った。

大丈夫。ほんの少しだけど、雨の匂いがした気がした。この不思議な感覚みたいなものは、おばあちゃんに教えてもらった。だから、大丈夫。

ビスケットを左手の中に包み、ちょっとだけ涼しくなるくらいに雨を、と気持ちを込める。

欠片を撒いたとたんに、たくさんの鳩たちが舞い降りて来た。

再び、左手の中にビスケットを包んで、小さくつぶやいて砕いた。

羽ばたく羽音が次々と私の周りに舞い降りて来る。

始めてから十分ほどで、まるで街中に棲んでいる鳩を全部集めたようになった。私の足元や空にも、露店の屋根や、街路樹の枝先や、郵便ポストの上まで、数え切れない数の鳩が群れて、ぼうぼうと鳴いていた。

生前のおばあちゃんは、こんな私の雨の降らせ方を面白いと言った。祐久の里を離れて育った次の手鞠姫が、こんな方法で雨を降らせるのが興味深いらしかった。

おばあちゃんが最初に教えてくれた土盛りの小山に柄杓で水をかける作法は、祐久市北部の夕立山に雨が降るイメージを見立てたもの。祐久の里の情景に慣れ親しんだおばあちゃんの心の中にある雨のイメージだった。

砕いたビスケットに乗せて鳥たちに気持ちを空へ運んでもらう私の方法に、おばあちゃんは可愛いと目を細めた。けれども、魂を鳥に運ばせるのは鳥葬に似てるなんて、ちょっと怖い言葉もくれた。だから、おばあちゃんは私が失敗しないように、雨の匂いやイメージを本当に丁寧に教えてくれた。

だから、大丈夫。そう、自分の中で言葉にして繰り返した。

ラムネやチョコバナナを手にしたお客さんたちが、不思議な光景に目を輝かせていた。カメラを向ける人もいた。パレードなんかは恥ずかしくて目眩がしたけど、これなら私の本当の姿だから……大丈夫だった。おばあちゃんが、何度も繰り返し教えてくれた雨の匂いだから、そう大丈夫。

だから、お客さんたちみんなに、にっこりと微笑んで見せた。

「さあ、みんなのために雨を降らせておいで」

最後の一握りを空に向かって投げた。

百羽以上もいた鳩たちが一斉に舞い上がった。観客や周りのみんなからも歓声があがる。ちょっとだけ、自分の変な才能を褒めてあげたい気がした。

三十分後に、ほんの少しだけど、通り雨がざあーと降った。あっという間にあがってしまったけど、夏祭りの街角に涼しい風が吹いた。

雨に濡れたのに、夏祭りに集まったみんなは、笑顔だった。お客さんたちも、商店街のおじさんおばさんも、夏祭りの実行委員会のみなさんも。もちろん、観光協会の青井さんたちも。

つかの間だけど、みんなの気持ちをひとつに絡めて束ねることができた気がした。

それがすごく嬉しくって、少しだけ泣いてしまった。

うん、ほんのちょっとだけ。

天菜真祭（てんな・まつり）

<http://seq.fem.jp/cms/>

端っこの細かい設定を作ることを楽しんでいるばかりの異世界ファンタジーと、どこか不思議な嘘を混ぜたお話を書いています。色々と未熟者ですがよろしくお願ひします。

黄昏の国で再会した少女に揺れ動く心。恋慕と嫌悪。誠意と裏切り。そして――
心突き刺す幽玄の世界・現代幻想奇譚

山吹の 門

あんのーん
illustration
あんのーん



中学二年の春休み、僕は祖母の家に行った。

三学期の終業式を終えると着替えもそこそこに、僕はひとりでここに来た。

「ごめんね竣介、お母さん、会社休めないから……」

終業式の朝、気忙しい朝食の席で、母は申し訳なさそうにそう言った。

「いいよ、べつに」

トーストをコーヒーで喉に流し込みながら、そっけなく僕は答えた。母が忙しいのはいつものことだし、実際、もう母親がいなければ何もできない歳でもなかった。体は少し細めだけれど、運動部に所属していないわりにはしっかりしているほうだと思う。母と並べばすでに僕のほうが背も高かった。

自宅から特急と私鉄を乗り継いで三時間ほど行くと、古神《こがみ》という駅に着く。駅を中心に古い町があり、その周辺には田圃が広がる、多分典型的な郊外の一市町村だ。祖母はこの町の外れで、ひとりで暮らしていた。

町並みは低く空は高く、自宅近くのような便利さはないけれどのおんびりできる。この町には小学校の四年生までいたから馴染みもあった。僕はいわゆる鍵っ子で、この町にいた頃は、放課後を自宅よりも祖母の家で過ごすことのほうが多かった。祖母の家は平屋のボロ屋だったが僕は好きだったし、祖母のことも好きだった。

だがもう春休みも終わる――明日には母が僕を迎えに来る――それを思うと、僕の心は沈んだ。べつに迎えに来てもらわなくて、帰宅くらいひとりでできる。だけど母には、祖母に報告しなければならないことがあるはずだった。

祖母の家からはとある里山が見える。辺りでは「御座《みくら》山」と呼ばれている、なだらかなその山には、何度か祖母と登ったことがあった。当時のこの家は五右衛門風呂で、焚き付けの小枝を拾うのについていったのだ。子供だったからどれだけ役に立ったかはわからない。僕にとっては遊びだった。おむすびなどの簡単な弁当を用意してもらって山頂まで登り、一休みして降りてくるのが常だった。この辺りは標高もそれなりにあって、見晴らしの良い御座山の頂上からは遠くに白く光る海がよく見えた。

僕はふと、御座山に登ってみよう、と思った。

祖母は出かけて留守だった。祖母が飼っている黒猫が靴箱の上に寝そべっていた。それは物憂げに耳だけ上げて僕を見送った。

町中の明るさに比べ、山道はひんやりと薄暗かった。

この頃は登る人も少ないのだろう、記憶に残るそれより、随分荒れている気がした。雑木が生い茂り、陽の光を遮っている。それでも歩いていると、じんわりと汗が出てきた。僕は着ていたジャケットを脱ぎ腰に縛りつけ、シャツの袖をまくり上げると、上腕で額の汗を拭いた。

ふと目の端に明るいものを捉え、僕はその方向を見た。

黄色い花。たくさんの黄色い小さな花が涼しげに揺れている。薄暗い雑木林の中で、そこだけが明るく光る波のように見えた。僕はまくった袖を下ろすと登山道を外れ、藪を漕ぎながらその花へと近づいた。

それぞれの薄い花びらが木漏れ陽を集め、透き通るように輝いている。僕はその花を知っていた。

山吹だ。一重の山吹。

子供の頃、祖母に教わったのだ。昔の子供はこの木の芯を抜いて、鉄砲玉にして遊んだという話だった。

——地味な遊びだな。その何が面白いんだろう——。

僕は多分当時と同じことをまた思った。それよりも花の美しさに心がいった。それは当時とは違ったことだ。子供の頃には山吹の花の美しさなんてわからなかった。

控えめだけど品のよい、艶《つや》やかな花。僕はふと、四年生のときに同じクラスだった女の子を思い出した。

たいそう綺麗な子だった。名前は木村伽耶子《かやこ》といった。切れ長の毗《まなじり》に小さな口、素直な前髪を眉の下辺りで切りそろえたおかつぱが、とてもよく似合っていた。肩にかかるくらいの長さの髪が、伽耶子のちょっとした仕草や動きに合わせてさらさらと揺れるのを、僕はいつもこっそり見ていた。

そうだ。僕は伽耶子が好きだった。

伽耶子はおとなしい、無口な女の子だった。クラスからは浮いていたと思う。伽耶子が友達と楽しそうにしているのを、僕は見たことがなかった。僕もまた友達のいない子供だったから、伽耶子のことが余計に気になったのかもしれない。僕たちはぼつぼつと言葉を交わすこともあった。

伽耶子が突然いなくなったのは、僕の家が引っ越す直前だ。

学校から一旦帰り、その後出かけたまま戻らなかった。田舎町は大騒ぎになり、警察はもとより大人たちで捜索隊などもつくったはずだ。それでも伽耶子は見つからなかった。

なぜ今、伽耶子を思い出したのだろう。山吹の花が誘うように風に揺れていた。

山吹の木の前にはちょっとした空間があった。感傷が鼻の奥を突き上げてきて、僕はそこにしゃがみ込んだ。知らずに涙ぐんでいた。

ほのかに甘い匂いがする。多分、この花のものだろう。僕はそのまま花を見上げた。目の上にある緑と黄色。それは陽の光を透かして瑞々しく、また涙に滲んで夢のように美しかった。僕はふとこの美しさに染まりたくなり、身を預けるように一面の枝垂れた花木にもたれかかった。

そのとき。ぐらりと身体が傾《かし》いだ。

思わず声が出た。僕がいた側からはわからなかったが、向こう側はかなりきつい傾斜になっていた。山吹は僕を支えてくれず、僕は立木に引っかかりながらも、数メートルほど転がり落ちたと思う。急に視界が開けた。

そこは石ころだらけの沢だった。僕は呻《うめ》きながらしばらく蹲《うずくま》っていた。服は汚してしまっただけでも、打ち身と擦り傷の他にたいした怪我はなかった。ようやく起き上がり顔を上げると、目の前に女の子の姿があった。

僕は息を呑んだ。彼女も息を詰め、瞬きもせずに僕をみつめている。

同い年くらいだろうか、小柄で色白の、ほっそりした綺麗な女の子だった。春らしい白っぽいワンピースに、生成のニットのカーディガンを羽織っている。胸の辺りでさらさらと揺れる黒髪、長い睫に縁取られた切れ長の眦。漆黒の瞳が吸い込まれそうに美しかった。

「だ……、大丈夫……？」

小さな、形のよいピンクの唇が動いた。

「ああ、……うん」

もごもごと答えると、僕は思わず俯いた。先の醜態を見られたかと思うと顔から火が出た。

「もしかして……竣介くん……？」

僕は思わず顔を上げた。

一目見て、似ていると思ったのだ。幼かった彼女が今目の前に現れたなら、きっとこんなだろうと――。

「木村……？」

女の子が微笑んだ。先刻見た山吹の花のような、清楚な笑顔だった。

「やっぱり竣介くんなんだ。どうしたの？　なんでこんなところに来たの？」

その女の子――伽耶子――が僕を、苗字ではなく名前で呼ぶのも以前の通りだ。僕の苗字は久下《くげ》という、この町ではありふれたものだった。当時クラスにも久下姓の男子が僕を含めて三人もいて、区別のためにもっぱら渾名《あだな》や下の名前で呼ばれていたのだ。

「ああ、うん」

頬が熱い。僕は赤らんだ頬を見られまいと、慌てて背後へと身を振《ねじ》った。

「山吹を見てたら滑っちゃってさ――」

語尾が頼りなく小さくなった。目線の先にあったのは細い側道だ。山でよく見る沢沿いの、人が歩くことによって踏み固められてできあがった細い道。下から見ても古い道だとわかる。だが僕は、御座山の登山道の近くにこんな道があるなんて知らなかった。先刻、山吹の前に立ったとき、なぜ真下のこの道に気づかなかったのだろう。沢があると知ったのも初めてだった。

何か、おかしくないか？　側道のことは気づかなかったとして――この流れはどこへ――御座山の麓に、川なんてあったらだろうか……？　それに――。

唐突に僕は気づいた。何十メートルも転げ落ちたわけじゃない。高さは多分、せいぜいあの側道からこの沢までくらいのものだ。それなのに山吹の黄色は、もうどこにも見えなかった。

「竣介くん？　ねえ……？」

伽耶子の不安げな声に、僕は我に返った。

「ああ……」

と、出てきたのは意味のない生返事だ。

「いや、……ごめん。ちょっと、頭が……」

僕は伽耶子に背を向けた。心配そうな声に何か答えなければと思ったが、とてもそんな余裕がなかった。

「ちょっと考えさせて……。ごめん……」

そう言うと、伽耶子もそれきり口をつぐんだ。だが傍らに気配がある。きっと僕が口を開くのを、辛抱強く待っているのだろう。僕は懸命に納得のいく答えを探した。だがいくら考えてみても、不安がますます黒々と胸を塗りつぶしていただけだった。

ここ、どこなんだ……？

伽耶子にそう訊ねたかったが、できなかった。何か、恐ろしい答えが返ってきそうで……。

「竣介くん……」

伽耶子がとうとう遠慮がちに口を開いた。

「あの……。山、そろそろ降りたほうがよくないかな……」

「ああ……。うん、そうだな……」

僕は顔を上げた。気づけばもう陽も傾き始めている。翳り始めた山道は僕も歩きたくなかった。

「どっからか上の道に上がれるのかな」

「あそこ」

と、伽耶子が指を指した。

「あの辺に上に上がる道があるよ」

僕たちは歩き出した。ふたりで側道を並んで下る間、黙っているのも気詰まりで、僕はさり気なさを装って話しかけた。

「でもよかった……。帰ってたんだ。木村、四年のときに一回いなくなっちゃっただろ。けっこう、心配してたんだ。お祖母ちゃんに毎日電話して、木村が帰ってきたか聞いたりしてさ……」

思いがけない再会に昂揚していたせいか、普段の僕なら決して言わないような言葉が出た。でもそれは本心で事実だった。あのとき僕は、後ろ髪を引かれる思いでこの町を出たのだ。

伽耶子はしばらく黙っていた。それから僕の言葉には答えずに言った。

「私もびっくりした……。竣介くんがここにいるとは思わなかったから……」

「今、春休みだろ？ お祖母ちゃんどこにいるんだ。明日はもう、帰らなきゃなんだけど……」

「……そっか。遊びに来たの？ 古神にまた帰ってきたわけじゃないんだ」

「……うんまあ……。そういうとこ……」

なんだか奥歯にもものが挟まったような口ぶりになってしまった。伽耶子はそれ以上何も聞いてこず、僕は内心ほっとした。

再び沈黙がふたりを包んだ。しばらくして、今度は伽耶子が話しかけてきた。

「でも竣介くん、よく私のことわかったね。名前も……。もう忘れてるかと思った」

「木村だって。オレのことすぐわかったくせに」

伽耶子はちょっと目をそらした。心なしか頬が染まって見える。その顔がたまらなくかわいら

しくて、僕の頬も熱くなった。

「下の名前も覚えてるよ。カヤコ、だろ？」

「.....私だって、竣介くんの苗字も覚えてるよ」

「そりゃオレの苗字なんて、覚えてなくたってこの辺で一番多い苗字言えば当たるって」

あはは、とふたりで笑った。何年かぶりで会ったのに、ずっと一緒だったような気がした。

僕が伽耶子の名前を覚えていたのは彼女が好きだったから、ということもあるけれど、その名前の由来が印象的だったからだ。

同じクラスだった四年のとき、「自分の名前の由来を調べる」という、よくある宿題が出た。その発表に伽耶子が当てられたのだ。当時の担任は若い女の先生だった。なぜおとなしい伽耶子を指名したのか——クラスに溶け込ませようとか、もっとはきはきさせようとか、そんなことを考えていたのかもしれないが——僕は少し腹立たしく思ったりしたものだ。

案の定伽耶子は答えられず、教室で白々とした視線を浴びた。

「自分の名前の由来とかさ、知らなくたって全然困らないよな」

放課後、掃除当番でゴミを捨てにきた伽耶子に、僕は焼却炉の前で話しかけた。

伽耶子はちらっと僕を見、ほんの少しの逡巡の後に小さな声で言った。

「誰にも内緒にしてくれる.....？」

「.....？ うん」

僕がそう答えると、伽耶子は僕を見ずに言った。

「カヤグムって楽器があるの。私の名前はそれから取ったんだよ」

それからゴミ箱の底をぱんぱん、と叩き、中のゴミをすべて焼却炉に捨てると、伽耶子は教室へと戻っていった。僕はその足で図書室に向かった。分厚い百科事典を引き、それが海を隔てた半島の、古い国の琴の名であることを知った。

伽耶子——。彼女自身が持つ儂げな花のような雰囲気と相まって、その名前は僕の心に深く刻み込まれた。

僕たちはうち解け、たわいない会話に笑いながら山を下った。

2

山を下り、町へと入ったとき、僕は呆然となった。

どこかに予感があった。だが.....。

山中で伽耶子と再会したときの不安、一旦は小さく固まったそれが一気に膨れ上がり爆発し、胸を真っ黒に染めた。

町の様子が一変している。山の麓に広がるそれは、僕の知っている古神の町ではなかった。

舗装されていない、先刻の林道のような、人々が往来することでできあがった『道』。人影はなく、民家も僕が見知っているものよりも明らかに古い。それはまるで祖母のアルバムの、セピ

ア色に変色した写真の中の風景のように見えた。

僕はとうとう、堪えきれずに吐き出した。

「木村……、おまえ、知ってるんだろ……？」

伽耶子は顔を背けていた。だが僕はかまわず続けた。

「ここ、古神じゃないよな？ どこなんだ？ ここ——」

「……ここは、どこでもないところ……」

消え入りそうな声で、ようやく伽耶子が答えた。

「だから言ったじゃない……私……竣介くん、どうしてここへ来たの、って……」

一瞬頭に血が上った。伽耶子を睨《ね》めつけた僕の目は多分つり上がっていただろう。僕を見た伽耶子は明らかに怯えていた。

僕は怒鳴る代わりに大きく息を吐いた。

「そうじゃなくて」

極力平静に話そうと努めたが、どうにも声が裏返る。人間はこんなにも簡単に、自分を制御できなくなるものなのだ、と他人事《ひとごと》のように思った。

「ここがどこか、聞いたんだよ。答えろよ。木村はここにずっといるんだろ？」

伽耶子は黙りこくったままだ。僕は切れて手を上げそうになるのを必死に堪えた。

「あ」

唐突に小さな声を上げると、伽耶子は僕の手を引っ張った。

急なことに思わず手を引っ込めようとしたが、伽耶子は力一杯僕の手を握ると、物陰へと僕を引っ張り込んだ。

「なにす——」

シッ……、と、伽耶子が自分の唇に当てて指を立てた。

伽耶子の目線の先を追う。僕は思わず悲鳴を上げそうになり、慌てて自分の口を自由なもう一方の手で覆った。

向こうからゆらゆらと歩いてくるその、朽ちかけた骸《むくろ》以外の何者でもない姿。恐怖と吐き気が喉元までせり上がってくる。伽耶子が手を放した。僕は口を押さえたまま、体を背けた。

「もう行っちゃったよ……」

僕は伽耶子を見た。さっきまで居丈高に怒っていたのが、女の子、それも好きな子の前で怯えきった姿を見られては立つ瀬もなかった。

……それにしても……どうして伽耶子はあれを見て、こんなに冷静でいられるんだろ……。

「何だよあれ……木村はどうして平気なんだ……」

伽耶子は黙っていたが、しばらくして口を開いた。

「だって」

言いかけた言葉を伽耶子が呑み込む。物陰の暗がりと相まって、俯いた伽耶子の表情はよくわからなかった。

「だって、……なに？」

しびれを切らして問うと、ようやく伽耶子が小さな声で答えた。

「もう、……いつも、見てるから……」

僕は言葉を失った。言いたいことはたくさんあったけど、もう何も言えなかった。

町はオレンジ色に染まっている。空はまだ青かったが、もうじきに茜色に変わるだろう。そして――。

気づいて不安になり、僕は再び口を開いた。

「なあ……ここ、夜とかどうしてんの？ 木村の家とかあるの？」

「私の家じゃないけど……」

そう言うと伽耶子は立ち上がり表に回ると僕を手招きし、玄関の古びた引き戸を開けた。

「おい」

「大丈夫。誰もいないから」

伽耶子はそこが自分の家であるかのような自然さで上がり込み、僕もおっかなびっくりで後に続いた。祖母の家よりもずっと古いようだ。引き戸を開けるとそこは土間になっていて、畳敷きの部屋は障子と襖で仕切られていた。部屋の中は薄暗く、伽耶子がどこからかランプを持ってきて、それに灯を点した。

「竣介くんお腹空いてる？」

「……あ、いや」

言われて何も食べてないことに気づいた。けれど身に起こったことで頭がいっぱいで、僕は空腹は感じていなかった。

それよりも心のどこかに引っかかっているものがあつた。多分幼い頃に読んだ絵本だ。

祖母がくれた本だった。日本の神話をわかりやすく子供向けに書いたもので、なかでも子供心に印象的に刻まれたのは、黄泉の国へ妻を探しに行く男の話だった。何かあつた気がする。あの話の中には、今、思い出しておかねばならない大事なことが――。

だけどいくら考えても、それが何か僕にはわからなかった。

暗く、テレビもラジオもない夜は、もう寝るしかなかった。だが僕はなかなか寝付けなかった。当たり前だ。これから自分がどうなるのか、それを考えると叫び出しそうになる。

ランプの光はひどく心許なかったが、それでも暗闇ではないというだけで僕に安心をくれた。僕たちは同じ部屋にそれぞれ布団を敷き、背を向け合って横になっていた。死者の国の、誰が使ったかわからない布団で寝るなんて気持ち悪い、とは思ったが、僕のやわな背中では畳の上では到底我慢できなかつたし、体ひとつで寝っ転がるのも無防備な感じで心細かつたのだ。予想と違い、布団はよく膨らんでいて清潔な感じがした。

僕は寝返りを打った。薄明るいランプの灯に、伽耶子の黒髪が目に入った。

「木村……」

僕は小さな声で話しかけた。

「一緒に、帰ろうな……」

返事はなかつた。僕もそんなもの、最初から期待していない。再び寝返りを打つと、伽耶子の

これも小さな声が聞こえた。

「私……」

僕は待った。その言葉の続きを。だがそれっきりだった。僕はいつしか眠りに落ちた。

翌日、僕たちは川のほとりにいた。

大きな川だ。向こう岸には青々とした茂みが、春に霞んで朧《おぼろ》に見えた。一方こちら側は石ころだらけで、緑といえよところどころに貧相な草が生えているだけだった。その川原を見下ろす土手を歩きながら、ぽつりと伽耶子が言った。

「ずっと帰りたかったけど……」

僕は伽耶子の横顔を見た。伽耶子の表情は、長い髪に隠されていてわからなかった。

「私は今は……、この川の向こうへ行きたい……」

「向こう岸に行きたいなら、橋とか渡しとかあるだろう……？」

曖昧にそう言うと、伽耶子がこちらを見た。

「ないの。ずうっと探してるけど、橋も渡しも見たことない」

「え……」

「船は見たことあるんだけど……」

「じゃあやっぱりあるよ、少なくとも渡し場は、どこかに」

「……うん。そう思って、ずっと探してるんだけど……」

伽耶子は少し俯いた。再び上げたその顔には、すがるような色があった。

「竣介くん、一緒に来てくれる……？」

僕は答えに詰まった。川に隔てられた彼方と此方。簡単に頷いてはいけない気がした。

だけど僕にもこの世界でアテがあるわけじゃない。それどころか心細くてたまらない。伽耶子と離れてこの世界をひとりでさまようことなんて、考えられないのだ。

「とりあえず、渡し場を探そう」

僕はそう答えた。伽耶子はそれ以上何も言わず、僕も口をきかなかった。ただふたり、歩き続けた。

どれだけ歩いた頃か、ふと対岸を見た僕の目に、黄色い塊が映った。

山吹だ……！

その涼やかな黄色を目にしたとき、心にわだかまっていたものが晴れた気がした。ここが死者の国ならば、川の向こうが僕らの国、すなわち『この世』のはずだ。伽耶子が川の向こうに帰りたくなったのも、それで納得がいく。

「川の向こうに、一緒に行こう」

僕がそう言うと、伽耶子の顔が、それこそ花のように明るくほころんだ。

「本当？」

「うん」

僕は伽耶子の手を握った。どうしてか、とても親密な気持ちになっていた。

「一緒に帰ろう」

再びそう言った。伽耶子は答えなかった。ただ、手を握り返してきた。

僕たちは歩きながら、あるいは土手に腰を下ろして、色んなことを話した。伽耶子は元々おとなしかったからあまり会話が弾む、という感じではなかったけど、それでも小学校の同じクラスにいた頃よりは、何倍も話したと思う。僕はいつしか、伽耶子を苗字ではなく名前で呼ぶようになっていた。

日が暮ればそこらの家に潜り込んで眠り、目覚めては手を繋ぎ、渡し場を探して川の辺を歩く――。それは悪くない旅だった。早く帰りたかったのは本当だけれど、ほんの少しだけ、伽耶子とこうして歩き続けていたい気持ちもあった。

川を見下ろす土手に座り、ぼんやりと休息を取っていたときのことだ。昼下がりの空は明るく、柔らかい風が心地よかった。

「竣介くんのお母さんやお父さん、心配してるかな……」

伽耶子の言葉に、僕は前を向いたまま答えた。

「さあ、どうかな」

竣介なんて、いらない――。

と言われたことはないが、似たようなことは言われたことがある。

両親が喧嘩していたときだ。母が、「竣介さえいなければ、あなたと一緒になんかならなかったのに」と言ったのだ。

父も母も僕には優しくかった。このときふたりは、家に僕もいることに気づいてなかったのだ。だからきっと、母は本気だったと思う。少なくとも半分は。

残りの半分は……喧嘩でつい出た言葉だったのかもしれない。でも僕は当たり前にも母のことも父のことも嫌いじゃなかったから、この言葉はショックだった。それまでのかわいがられた記憶があったから、愛されていない――とはっきり思ったわけではなかったけれど、それ以来、僕は両親に自然に接することができなくなってしまった。

少しは心配すればいい……。

僕は子供っぽくそう思った。

「伽耶子のお母さんは心配してたよ」

内心を隠し、僕は言葉を継いだ。

「お祖母ちゃんところにも来てた」

「拝み屋さんだっけ……」

「もう廃業したけどね」

答えてから、思い当たった。

祖母が加持祈祷をやらなくなったのは伽耶子がいなくなった頃だ。すでに引っ越して古神の町を離れていたけれど、しょっちゅう祖母に電話をしては伽耶子が見つかったかどうかを訊ねていたあの頃、祖母が一度、「どこにもおらんものは見つけようがない」と言ったことがあった。僕はそのとき、祖母にひどく失望したのだった。徐々に電話をしなくなったのはそれも原因のひとつだったのだけど、今この異世界で伽耶子に再会してみると、祖母の言葉の意味がわかった気が

した。

ふと川原に目をやると、ゆらゆらと亡者が歩いているのが見えた。

「あの連中、なんであんな姿でうろうろしてるんだろうな」

僕は伽耶子に、訊ねるともなくそう言ってみた。伽耶子は少し考え込んでいる風だったが、やがて言った。

「きっとあの人たちにも、もうわからないんだよ。どうして、自分たちがああしているのか……」

言葉の最後は小さく消えた。まだ何か、続きがあるのかと僕は待った。

「私も、ずっと待ってたけど……」

伽耶子が言葉を継いだ。

「あんまり長い間待っていると、何を待ってるのか、誰を待ってるのかも、わかんなくなっちゃうんだよね」

そう言うと、伽耶子はまた口を閉じた。

「ただ待ってるだけ……理由も覚えてないのに……」

「もう、忘れちゃったんだ……？」

笑ってそう訊ねると、伽耶子も笑顔を見せ、

「でも思い出したの。竣介さんと会って」

と言った。

「私、お祖母ちゃんが迎えに来てくれるんじゃないかなと思ってたの。お祖母ちゃんも、ずっと帰りがあってたから……」

「帰りがあってた、って、どこへ……？」

竣介くんを待ってた……なんてやっぱり言うわけないか、と少しがっかりしながら、僕はそんな内心はおくびにも出さずに再び訊ねた。

「海の向こう。お祖母ちゃん、海の向こうから来たの」

伽耶子の口調はあっさりとしたものだった。伽耶子の名前の由来を知っていたから、僕にも特に驚きはなかった。

子供の頃にはわからなくても、今ならわかることもある。伽耶子のお祖母さんにとって、日本という国は決して生きやすい場所ではなかっただろう。伽耶子にもそのお祖母さんの血が流れている。それは伽耶子が、いつもひとりでいたことと無関係ではないはずだ――。

「お祖母ちゃんもきっとずっと待ってたと思う……誰か、海の向こうへ連れて帰ってくれる人を……」

とりとめのない考えに耽《ふけ》っていた僕を、伽耶子の声が呼び戻した。

「伽耶子が待ってたのも、『川の向こうへ連れていってくれる人』だったんだ？」

「だって……ひとりで行くのは怖いもの……」

僕はそれを聞き、伽耶子がいなくなったとき、まだ十歳の子供だったことを改めて思った。

伽耶子が顔を上げた。とても綺麗な、散る花のような笑顔だった。

「そしたら竣介くんが来てくれた。一緒に行こうって言ってくれた……だからわかったの。私

が待ってたのは、本当は竣介くんだったんだって——」

「え……」

頬が熱くなり、顔が赤らむのが自分でわかった。僕は伽耶子と目を合わせていられず、顔を伏せた。

「嬉しかった。竣介くんが来てくれて……」

伽耶子の声は本当に嬉しそうだったけれど、最後はなぜだかかすれていた。こっそりと盗み見ると、伽耶子も顔を伏せていた。

「伽耶子」

啜り上げるように、伽耶子が小さく嗚咽を漏らした。

「泣くなよ……もう、ひとりじゃないんだからさ」

そう言うのが精一杯だった。僕は所在なく辺りを見渡した。

土手にはとりどりの花が咲いていた。雑草の類の、名前も知らないどうということもない花だ

。

僕は立ち上がってそれらを摘むと花束のようにし、俯いた伽耶子の目線の先に差し出した。

「これあげるから……元気だしなよ……」

伽耶子が顔を上げた。そして僕を見、笑った。それは不思議な笑顔だった。ちょっと呆れたような、でも晴れやかな——。

「ありがとう」

目の縁はまだ赤みが残っていたけれど、伽耶子は明るい声で応えるとその花で器用に小さな腕輪を作り、

「お返し」

と言って僕にくれた。

伽耶子のそんな茶目っ気を見たことがなかったから、僕もなんとはなしに嬉しくなり、また立って花を摘んだ。伽耶子も立ち上がった。僕たちはふたりで歩きながら花を摘み、立ち止まって花を編みながら、川べりの土手を下った。

川には船があった。何度かすでに見かけたことのある、客を乗せ、ゆっくりと向こう岸へと渡る船。それはいつも小さく霞み、白く光っていた。

3

「それ」に気づいたのはいつだったろうか。

僕は伽耶子の白い頬に小さな染みを見つけ、自分の頬をつついて言った。

「ここ。汚れてるよ」

伽耶子は恥ずかしそうに自分の手で頬を拭った。だが染みは取れなかった。僕は手を伸ばし、伽耶子の頬に触れてそれを擦り落とそうとしたが、やっぱり染みはそこにあった。その小さな染

み一一否、僕が染みだと思ったものが、そのときから伽耶子を蝕み始めた。

腐り始めたのだ。少しずつ、伽耶子が。あの亡者たちのように。どれだけ頭で否定しても目で見ないようにしても、それを止《とど》めることはできなかった。

川辺では太陽が向こう岸へと沈もうとしていた。とろりと熟したオレンジ色の円形が、茜色の空に浮かんでいる。燃え立つような朝陽《あさひ》とは対照的に、それは光を内側に閉じこめ、まさに今眠りにつこうとしているように見えた。

常世の国は陽が沈むところにある一一死にゆく太陽に照らされ、茜色に染まった伽耶子を見ながら、僕はやはり川の向こうが『あの世』なのだと悟った。そして伽耶子が、川の向こうへあれほど行きたがった本当の理由にも、ようやく気づいたのだった。

伽耶子とは、行けない……。僕ははっきりとそう思った。伽耶子と僕では、最初から住むべき国が違っていたのだ。

でも僕は伽耶子と約束した。だからせめて、渡し場までは一緒に行こう……。僕はそう決心し、自分に強く言い聞かせた。でも伽耶子が差しのべた手を、僕はもう取ることはできなかった。

伽耶子は僕の仕打ちにひどく悲しそうだった。伽耶子の心は傷ついたと思う。だけど何も言わなかった。黙って手を引っ込めた。そんな伽耶子の様子に僕の心も痛んだ。腐り始めた伽耶子を僕はもうまともには見られなかったけれど、気持ちはまだ残っていた。

残ってはいたけれど一一。

込み上げてくる嫌悪や不快、そして恐怖はどうしようもなかった。

僕は自分で思うほど、伽耶子のことを好きではなかったのかもしれない。同じクラスだったあの頃からずっと一緒に過ごしていれば、伽耶子がどんな姿になっても大切に思えたのかもしれない。だけど僕たちにはそんな共有した時間などなかったし、どれだけ頭で考えたところで、現実にムリなものはムリだった。

どうしてこんなことになってしまったんだろう……。

思い当たることがひとつあった。いつだったか、川べりに道がなく、林の中を歩いていたときだ。一帯が沼地になっている場所に出た。

沼には八つ橋が組んであり、僕たちはその上を歩いていた。僕はふと目を落とし一一そう、全く何の気もなしに一一水面に映った伽耶子の姿を見てしまったのだ。

息が止まった。心臓をぎゅっと掴まれたかのような感覚だった。慌てて目をそらして一一あれはただの気のせい、見間違いだと何度も自分に言い聞かせたのに一一。

そこに映っていたのは、目の前の伽耶子とは似ても似つかない、醜くおぞましい姿だった。

でもあれが伽耶子の本当の姿だったのだ。今ならわかる。伽耶子は本当は、最初から湖に映ったあの伽耶子だった。ただ僕が気づかずにいただけだ。

態度を豹変させた僕を、伽耶子はどう受け止めているのだろう。僕にはそのことも恐ろしかった。でも僕には、それを確かめることはできなかった。

伽耶子が無口なのをいいことに、僕もまた口を閉ざし、顔を背けて旅を続けた。逃げ出すことは考えなかった。否、考えないようにしていた。伽耶子を川の向こうへ送り出す……そのことだ

けを、必死に考えていた。伽耶子を気遣う余裕など到底なかった。

どうせ腐った死人じゃないか、脳味噌だって腐ってるんだ、感情なんてあるわけない——そんな風に考えては、つい先日までの伽耶子の様子や自分の気持ちが思い出され、また泣けてくるのだった。

伽耶子はそんな僕の思いをよそに、どんどん腐っていった。白い肌が赤黒く変色し、やがて融ける。気づいたときには一言も、口もきかなくなっていた。

足取りもゆっくりと頼りなくなっていて、ちゃんと後ろをついてきているか、見たくないのに僕は何度も振り返って確かめなければならなかった。

伽耶子の落ち窪んだ眼窩からどろりと落ちるものを見てしまったとき、僕は思わず両手で口を覆った。だが大きく叫ぶように開いた口からは、声は出てこなかった。穴の開いた袋のように、息だけが漏れた。よくホラー映画で人が絶叫しているけどあれはウソだ。恐ろしすぎると声も出ない。

もう耐えられなかった。僕は駆け出した。

遠くへ、ほんの少しでも遠くへ。伽耶子から。僕はただ、伽耶子から離れたかった。

ただ闇雲に走った。伽耶子は追いかけてきたりはしないのに。なぜか涙がボロボロあふれて、前がよく見えなかった。最後には足がもつれ、つんのめった。

川原には柔らかな草が茂っていて、僕を受け止めてくれた。青臭い空気を痛む肺にせわしなく吸い込んで吐き出しながら、僕はいつまでも突っ伏したままでいた。

僕はすでに、あの絵本の内容を思い出していた。初めのうちは忘れていた、でもどこかに引っかかっていたあの話だ。あの神話——黄泉の国へ妻を迎えに行った男は、妻の腐った姿を見て逃げ出すのだ。

僕はあの話を讀んだとき、子供心に男はひどい、と思った。恋いこがれ、黄泉の国にまで迎えに行くほど愛していたんじゃないか。たとえ姿は恐ろしく変わってしまったとしても、男の気持ちが本当なら、逃げ出したりするはずがない。見た目が変わっただけで気持ちも変わるなんて、男の愛は本物じゃなかったんだと——。

「……っ」

僕はしゃくり上げた。鼻の奥がつんと痛くなり、再び涙が込み上げてきた。

あの男は僕だ。幼い僕が軽蔑し、怒りを覚えたあの男は、そのまま今の僕自身だった。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。僕はどうして、ここへ来たのか。どうしてこんな……悲しくやりきれない、惨めな思いをするためか……。

滲んで夢のように眼前に広がった、黄色い花。

手招くように揺れた、あの山吹の花を思い出していた。あのとき伽耶子を思い浮かべたのはなぜなんだろう。もう僕は、彼女のことは忘れて思い出しもしていなかったのに。

伽耶子が僕を呼んだのか……。

そう思ったとき、怒りと痛みが僕の胸を刺した。

なぜ、僕なんだ。

僕と伽耶子の繋がり、四年生のときに同じクラスだったということくらいしかない。呼ぶなら伽耶子の父親か母親か、そうでなくても誰かもっと、親しく交わった知人を呼べばいいじゃないか……。

だけどそんな気持ちもごまかした。内心では気づいていた。

伽耶子と再会し、一緒に旅をするうちに、僕にはわかったのだ。例えば、あの頃伽耶子と仲良くなっていれば、あの日伽耶子と一緒に過ごしていれば、伽耶子はきっと、こんなところに迷い込むこともなかったのだということがだ。

僕も寂しかったのに。伽耶子が好きだったのに。伽耶子も僕を特別に信頼してくれていたのに。ただ気恥ずかしく、声をかけ、親しくなることができなくて――。

伽耶子に竣介くんを待ってた、と言われ、晴れがましく誇らしかったあのときの気持ち。一緒に帰ろうと誓った。僕は本気だった。今度こそ、どこまでも伽耶子を守って一緒に行けると思った。それが――伽耶子が、僕の思っていた伽耶子じゃなかったというだけで――。

自分の身勝手さに反吐が出そうだった。けどどうしようもない。それもこの旅で、僕が知ったことだ。

人は弱い。すぐに惑い、あっけなく心も変わる。頼りなく、信じるに足らぬ存在。僕もまた、愚かで卑小な人間だった。

亡者の列が僕の脇を通り過ぎた。草むらに伏した僕など目に入っていないようだ。僕も何の感慨もなく彼らを見送った。再会したときの伽耶子のように、僕ももう彼らに慣れ、特別な感情を持たなくなっていた。

いっそ伽耶子に対しても、同じ気持ちになればいいのに……。

預かり物の荷物のように、何の思いもなくただ伽耶子を引きずって渡し場まで連れていき、船頭に託せたらどんなにラクだろう……。

僕は起き上がった。彼らは陽炎のように揺らめきながら、草影の向こうに消えようとしていた。

彼らはずっとただ歩いていた。彼らはどこへ行こうとしているのか……どこか、目指す場所があるのだろうか……。

唐突にひとつの考えが脳天を打った。

――伽耶子！ 伽耶子が亡者の列についていってしまう……！

慌てて僕は立ち上がり、再び元来た方向へと駆け出した。なぜそんなことをするのか、自分でもわからなかった。伽耶子があの列に加わってどこかへ消えるなら、そのほうが僕には都合がいいはずだ。伽耶子にだって、そのほうがきっといい……僕に疎まれ、恐れられながら一緒に旅をするよりは――。

それでも僕は、伽耶子の姿を求めて走った。

僕が伽耶子を置き去りにした辺りを少し探すと、伽耶子は簡単に見つかった。少し離れたところに所在なげに立っていた。

「……伽耶子」

荒い息を継ぎながら声をかけると、伽耶子はぼんやりと僕のほうに顔を向けた。

「ごめんな、伽耶子……いきなり走り出したりして……」

なぜか切なく、悲しくなった。僕は伽耶子を手招いた。

「……行こう……」

4

僕たちはどのくらい歩き続けたらろう。目に映る風景も随分変わった。僕が最初、この世界へ迷い込んだときは、風景は古びていてもはっきりとしていた。空には太陽があり、夜が訪れて月も見えた。僕は星座には詳しくないけど星もあった。

だけど今は――。

見上げて太陽は見えない。空は変わらず青かったが、磨りガラスを透して見ているように、あるいは青の上に白い絵の具を溶いて流したように霞んでいた。

地上に目を戻せば、そこも同じようなものだった。描かれた風景の上から薄い黄土色を重ねて塗り込めたような、画集で見た、夕暮れの風景のような……そこに確かにあるはずなのに、静かで遥かに遠い世界だ。

夜ももう、この世界にはやってこない。僕たちが歩き疲れる頃、世界は翳る。柔らかな草の上で眠り、目覚めればまた明るくなった川野辺を歩き出す。僕自身もまた、緩やかにこの世界の一部になろうとしているのだと思った。

この国は黄昏《たそがれ》の国――何もかもが穏やかにまどろんでいるのだ。ここで怒ったり泣いたりしているのは、きっと僕だけだ。

川だけが、くっきりと僕たちの前に横たわっていた。

僕は道の端《はた》に白い花を見つけた。瑞々しい葉の緑や花の形、それが風に揺れる涼しげな様子が山吹にとてもよく似ていた。

その花を、僕は短くいく枝《え》も折り取った。

「伽耶子」

僕は伽耶子に話しかけた。やっぱり正視はできなかったけれど、この頃僕は、また伽耶子に話しかけるようになっていた。どうせふたりで旅を続けるなら、伽耶子を物のように扱うのではなく、人のように接するほうがラクだと気づいたのだ。

この世界の空気が僕にそう思わせたのかもしれない。僕自身が伽耶子と同じ存在になりつつあるからなのかもしれない。とにかく僕はそう思ったのだった。

伽耶子はもう、ひどい有様だった。美しく清楚だった頃の面影は、もうどこを探してもない。僕が恐れ、嘆き悲しんで逃げ出したときより、もっとおぞましい姿になり果てていた。

「伽耶子の名前の由来は聞いたけど、オレの名前のことは話してなかったよな」

白いワンピースもカーディガンも、伽耶子の融けた肉でどろどろに汚れていた。僕は手にした白い花を、伽耶子の乱れて固まった髪に挿した。

「オレの名前はさ、画家の名前なんだ。母さんは色々尤もらしく言ってたけど、そんなんじゃなくて、単純に親父が自分の好きだった画家の名前をつけたの。オレの親父、元々絵描きになりたかったんだよ」

話しかけながら、何本も何本も……それからカーディガンのボタン穴や、ワンピースの襟元にも花を挿した。

「伽耶子のところも色々あったと思うけど……うちもあんまりよくなかったよ。親父、全然甲斐性なかったからね。お祖母ちゃんともうまくいってなくて、それもあって引っ越したんだ。

最初に会ったとき、どうしてここに来たのって聞いたけど？ 本当は親が離婚の話し合いすんのにジャマだから、こっちに預けられてたんだよ。まあオレは……不機嫌でケンカばかりしてる親と一緒にいるよりは、こっちにいたほうがなんぼかよかったけどさ……」

なんとなく惨めで恥ずかしくて、伽耶子には話せなかった。でももっと早く、会ったときはムリでも、旅の途中で話しておけばよかった。そうすれば伽耶子の話だって、聞いてあげられたかもしれないのに――。

伽耶子は教室で、どんな気持ちでいたのだろうか。自分が、他の級友たちとは違うと感じていたかもしれない。僕もそうだった。親に当たり前に甘えたり喧嘩をしたりしている友達が、うらやましく妬ましく、そして腹立たしくて――。

忘れたつもりの感情がじわりと胸に広がった。僕はそれを振り払うように、いつか伽耶子が目の前で見せたやり方を懸命に思い出しながら花を編み、花輪も作った。そしてそれを、伽耶子の頭に載せてやった。

「……………」

全身を白い花で飾り立てた、腐り果てた死体――。泣けばいいのか笑えばいいのか、僕にはわからなかった。

一陣の風に白い花びらがはらはらと舞い散った。僕は少し笑った。

今僕が伽耶子に捧げた花は、早晚萎れ、むなしく散ってしまうだろう。

「大丈夫。また花が咲いていたら、摘んでやるよ」

それは伽耶子にか、それとも己れに向けての言葉だったか。

僕はそう言い、また歩き始めた。

それから幾日後か幾月後か。僕たちは船を見た。

彼方に白く光る船じゃない。流れに棹を差し、ゆっくりと向こう岸へと漕ぎ出していくところだった。船頭も、客の姿もくっきりと見えた。川に飛び込めば泳ぎ着けるほどに近かった。

渡し場が近い……！

「伽耶子、早く……！」

僕は我慢できずに少し先まで駆けては振り返り、伽耶子をせき立てた。伽耶子の覚束ない足取りがひどく焦れつつあった。

背が高くなってきた草をかき分けながら進むと、唐突に僅かな空き地に出た。水辺に板を渡しただけの、あっけないほどに簡素な渡し場がそこにあった。空き地にこれのごく質素な床几《しょうぎ》が置いてあり、白く薄い髪と鬚《ひげ》を肩の辺りまで垂らした小さな老翁が座っていた。

老翁は穏やかな表情を僕に向けた。僕は気づいた。これは人じゃない――。

目鼻立ちも居ずまいも、人と全く変わらない。それでも何かが違うのだ。だがそれは、間違いなく僕がこの国で初めて出会った、「生きている者」だった。

「……こんにちは……」

僕はおずおずと声をかけた。

老翁は僕に笑いかけた。僕は少し安心し、言葉を継いだ。

「船に乗せて欲しいんですけど……」

「船に乗って、どうするね」

「向こう岸に渡りたいんです」

老翁の問いにそう答えると、老翁は「ふむ……」というように鬚をしごいた。

「おまえが、かね？」

「いえ……」

僕は言いよどみ、後ろを振り返った。伽耶子はそこにいた。

「この子です。この子を向こう岸まで、乗せてやってもらえませんか」

老翁は目を細め、僕から伽耶子へと、ゆっくりと視線を移した。

「おまえたちはこの川を渡るために、長い旅をしてきたのだね」

訊ねるともなく、そう言った。

柔らかな風が優しく頬を撫でる。老翁の背では川面がきらきらと光っていた。

「だがそれを、船に乗せることはできん」

「なぜですか」

問うてはみたものの、僕は老翁の答えには驚かなかった。なぜかそんな気がしていたのだ。

僕たちが見た船は白く美しく、乗っていた客も輝いて見えた。黒く腐った伽耶子は、ふさわしくない――。

でも僕は食い下がった。

「この子がこんなになってしまったのも、ここに長くいすぎたせいだ。この子は本当にもう長い間、川の向こうへ行く道を探していたんです。ようやくここまでたどり着いたのに……それはあんまりだ……」

ふむ……、と、老翁はまた鬚をしごいた。

「おまえは腐った亡者の列を見たことがあるだろう」

「……はい」

僕は答えた。老翁が何を言うつもりか、僕にはわからなかった。

「あれはこの世に思いを残した者どもだよ。未練や怖れはみな此岸に捨てていかなければ、船に乗ることはできんのだ」

「でも、この子は船に乗りたがってます。それがこの子の望みなんです。他にはもう何もありません。なのに、どうして乗せてもらえないんですか？」

老翁は再び目を細め、僕を見た。内心を見透かすような視線だったが、それは不快なものではなかった。

「おまえはウソをついているね。おまえはそれの望みを知っているだろう。その望みは、誰かと向こう岸へ行くことだ。だがおまえは一緒には行けない。だからそれも船に乗ることはできんのだよ」

「……ではこの子は」

と、動揺を押し隠して僕も続けた。僕は必死だった。

「永遠に船には乗れないのですか。僕がこの子と一緒に船に乗るのでなければ――、この子と一緒に、僕もこの国を旅し続けるしかないのですか？」

「神ならぬ身なら終わりは必ず訪れる。必ず救われる」

老翁は視線を緩めた。

「さあ、もう話は終わりだ。もう行きなさい」

そう言うと老翁は僕たちにすっかり関心をなくしたようだった。老翁は再び川面に視線をやり、地蔵のように動かなくなった。

「お爺さん……！　どうかお願いします……！」

もう一度言ってみたけど、もう何の反応もなかった。

僕と伽耶子は長い間そこに立ち尽くしていた。だが船は戻って来ず、僕たちもとうとうあきらめてその場を去った。渡し場は草に隠れ、すぐに見えなくなった。

老翁は言った。行きなさい、と。でも、どこへ？

これまでは渡し場を探すという目的があった。でもその目的は今ではもう消えた。これからの長い旅を、何を恃《たの》みに、どこを目指せというのか……。

老翁の言った「終わり」に向かって？　終わりって何だ？　僕もまた、死んでしまうということか……？

そこまで考えて、僕はなぜだかおかしくなった。それから涙が出た。

ここは死者の国。それならここにいる僕も、僕自身の気持ちはどうであれ、死人に決まってるじゃないか……。

僕たちは目的を見失い、それでも川辺を歩き続けていた。もし僕の他に生きている者がいて今の僕たちを見たとしたら、僕たちはきっと、ただ風に吹かれて歩いているように見えたことだろう。あの亡者たちのように。目的もなく、それでもあきらめきれずにさまよう僕たちは、あの亡者そのものだった。

川幅が随分広くなった。もう向こう岸も霞んで見えない。僕はふと、このまま歩き続ければや

がて海にたどり着くのだろうか、と思った。

いつか御座山の頂上から見た、彼方に白く光る海を思い出していた。不思議に心が温かくなった。こんな感覚も久しぶりだ。

「もし海にたどり着いたら――」

と、僕は心に浮かんだことを、独り言のように口に出した。

「伽耶子のお祖母ちゃんが、海の向こうから迎えに来てくれるかもしれないな……」

伽耶子はもちろん答えない。だが僕はこの考えが気に入った。

母でも父でもなく、祖母が迎えに来てくれるのをずっと待っていた伽耶子。僕はもう知っていた。

伽耶子が待っていたのは、本当は僕じゃなかった。伽耶子が帰りたくて、でもひとりでは帰れなかったまだ知らぬその場所は――。

海を目指そう、と思った。どうせ時間は永遠ともいえるだけあるのだ。

僕たちはいつか海にたどり着けるだろう。もし伽耶子のお祖母ちゃんが迎えに来てくれなくても、そのときは僕が伽耶子を連れ、海に漕ぎ出してもいい――伽耶子の望むところまで――いつかふたりが海のひとつ滴になるまで、伽耶子と一緒に――。

そのとき。

何か、とても懐かしい声を聞いた気がした。僕は我に返り、周囲を見渡した。

ミャー

今度ははっきりと聞こえた。猫だ。甲高い、仔猫が親猫に甘えるときのような声。僕はその声に聞き覚えがあった。

やがて黒い小さなケモノが草むらから姿を現した。

「みゃー！」

自分でも驚くような大きな声が出た。あの日、祖母の家の玄関で僕を見送った黒猫だ。雄のクセにやたらにかわいい声の持ち主で、ついた名前も『みゃー』だった。

黒猫は人懐っこく僕の足元にじゃれついた。僕はそれを抱き上げた。懐かしく確かな重みと温みに触れ、僕の血が再び熱く脈打ち始めた。黒猫はぴくりとヒゲを動かすと僕の腕からずとんと降りた。そしてもう一度ミャーと鳴くとついと離れ、僕を振り返った。

みゃーはついてこいと言っているのだ。僕にはわかった。でも僕は動けずにいた。また僕は伽耶子を裏切るのか……今僕は――伽耶子と行こうと考えたばかりなのに――。

僕は振り返った。伽耶子はただ無言でそこに立ち尽くしていた。

「伽耶子――」

名前を呼んでも、答えが返るわけもない。伽耶子の姿が滲んだ。

「ごめん、伽耶子……」

再び小さくみゃーの声がした。向き直ると、みゃーはもう随分と遠くへ行ってしまうていた。

僕は再び伽耶子を見た。どんなに目を凝らしても、目の前の伽耶子にかつての面影を見出すことはできない。だけど思い出の中の伽耶子は、今でも可憐で清楚な一輪の花だ。

教室でひとりぼっちだった伽耶子。内緒だよと言って、僕にだけ名前の秘密を教えてくれた。手を繋ぎ花を摘んで一緒に歩いた。僕たちにはこの国で、確かに分かちあった時間があり、通いあわせた心があった。

——伽耶子——僕は——。

「ごめんな……！ ごめん……」

涙があふれた。僕は駆け出した。

やはり僕は生きたい。現世へ戻りたい。冷淡でも情けなくても身勝手でも、僕は——。

僕は振り返らなかった。伽耶子はどんどん小さくなりながら、それでもいつまでも僕の心の中に佇んでいた。

小さなみゃーは時折僕を確かめるように振り返りながら、少し前を歩いていく。僕はただぴんと尾を立てたみゃーの後ろ姿だけをみつめ、見失わないよう必死でついていく。

行く手は徐々に暗くなり、やがてすっかり闇に閉ざされて、みゃーの姿もほとんど見えなくなった。

「みゃー、みゃーどこだ？」

ひとりではこの闇の中は歩けない。泣きそうになりながら名を呼んだ。振り返ることはしなかった。振り返ってもそこにすでに道はないのはわかっていた。

ふと傍らに気配を感じ、僕はそちらをおそるおそる盗み見た。

そこにいたのは若い男——いや、若い男の姿はしているが、川辺の渡し場にいた老人と同じ、人ならざる何かだった。それは黒っぽい服を着込み僕と並んで歩いていて、銀色に光る大きな瞳で前を見据えたまま、僕に片手を差し出した。

ためらいがなかったわけではない。だけど僕にはすべてを押し包む漆黒の闇の中、ひとりで立っている気概は到底なかった。僕はさすがのようにその手を取った。

その掌は大きく厚く温かく、僕に安心をくれた。姿はすでに闇に溶け込もうとしていた。瞳はなおも銀色の光を放っていたが、それすら闇に呑み込まれるのも時間の問題だろう。長く伸びたその爪が食い込むのを気にもかけず、僕はその手を強く握った。手の中の温もりと痛みだけを恃みに、僕は漆黒の中をただ歩き続けた。

その闇をいつ、どうやって通り過ぎたのか、僕は覚えていない。気がつくとも僕は祖母の家の前にいた。

目眩がしように明るい昼下がりだった。気温は高く、長袖のシャツの下はべったりと汗で濡れていた。雑草が茂り放題の手入れのなっていない庭と、見慣れた古びた玄関。僕は引き戸を開けた。三和土を上がった廊下の隅には、いつものようにみゃーの茶碗が置いてある。それはなぜだか伏せられていて、その下に紙切れが挟んであった。ふと興味を惹かれ、僕はそれを広げて読んだ

。

たちわかれ いなはのやまの みねにおふる まつとしきかは いまかへりこむ

どこからかみゃーが現れて、例の甘えた声で鳴きながら僕の足にじゃれつき、額を擦りつけてきた。

「竣介……！」

みゃーの声に気づいたのか、廊下の奥の襖が開《あ》き、顔を出したのは母だった。

「母さん？ なんで、ここにいるの……？」

「なんでって、あんたは……！」

母は狭い廊下を転がるように駆け寄ってくると僕を抱きしめ、揺さぶった。母は泣いていた。

「あんたは、もう……！ どれだけ心配したか……！」

「……え……と、……あの……」

母の激しい反応に戸惑っていると、奥の座敷から祖母も出てきた。今度はその足元にじゃれついていたみゃーを抱き上げると、

「お帰り、みゃー。ご苦労だったね」

と頭を撫で、僕にも

「お帰り、竣介。よう帰ってきた」

と言った。

「……ただいま」

そう口にすると、ああ、帰ってきたんだな、という実感が湧いた。

僕は何処《いずこ》か、遠いところを旅してきたのだ。そしてみゃーに連れられここに帰ってきた。

僕は息を大きく吸い込んだ。

「ただいま、お祖母ちゃん、お母さん」

もう一度、そう繰り返した。

終章

僕がこの世へと帰還した夜、祖母の家へ父も来た。あの国では時間も止まったようで、どれだけの間を過ごしたのかよくわからなくなっていたけれども、実際は三月余りのことだったらしい

。

その夜から原因不明の熱が出て、僕は十日も寝込んだだろうか。熱が下がった後に、その間《かん》のことを母が話してくれた。

僕が行方知れずになり、両親が祖母を責め互いを責め、最後には自分たち自身を責め始めた頃

のこと、みゃーが祖母の夢に現れ、「竣介を連れて帰る」と言ったのだという。その日からみゃーは姿を消した。元々気まぐれな雄猫、母は祖母の言うことなどまるきり信じてはいなかったが、それでもどこか、藁にもすがる思いがあったのだろう、みゃーが僕を連れて無事に戻れるようにと、祖母に教えられて呪《まじな》いをしたのだそうだ。みゃーの茶碗の下にあったあの和歌は、猫返しの呪文だった。

帰ってきたと思ったら熱を出して寝込んだりして、結局僕の復学は夏休み後、二学期になってからだった。多分それもよかったのだと思う。心配してであれ興味本位であれ、失踪中のことについてとやかく聞いてくる者がそう多くなかったことは助かった。問われても答えようもないからだ。両親にはすまなかったが、世間的には、「親の不和に傷ついた子供の家出」で片がついた。

僕はあの国で見聞きしたことは、誰にも話さなかった。両親、そして祖母にさえ。もちろん伽耶子のことも……。

僕はゆっくりとこの世界へ、日々の生活へと戻っていった。

最後にその後についても、簡単に記しておこうと思う。

両親は結局別れた。僕の「事件」の後、ふたりは良好な関係を取り戻したかに見えたが、やはりそれは有事に於ける一時的なものであったらしい。一度壊れてしまった関係は、多分そう簡単に修復できるものではないのだろう。

あのとき僕を迎えに来てくれたみゃーは、とっくに猫の国へと帰った。祖母もすでに泉下の人となり、あの古ぼけた小さな家があった辺りには、今は幹線道路が走っている。

僕は大学入学を機に家を出、以来気ままな独り暮らしだ。三つ子の魂とでもいうのだろうか、人嫌いなわけではないけれど、ひとりが性にあっているのだろう。

僕はあれからも長い間、人知れず咲いている山吹を見つけると時々潜《くぐ》っていた。だが二度とあの世界は現れなかった。

何年前か前、唐突に母から電話がかかってきたことがあった。

御座山が宅地造成のために崩されたのだが、そのとき小さな子供の骨が出てきたという話だった。十歳前後の女の子で、鑑定の結果では死後もう三、四十年も経っているらしい、とのことだった。

多分、その話を聞いたとき、母は僕がその子のようにならなくてよかった……、と、心底思ったことだろう。息子が小学生だったとき、突然失踪した同級生《クラスメイト》がいたことを思い出したかもしれない。母のとりとめのない話を聞きながら、僕は伽耶子のことを考えていた。

伽耶子もようやく、帰ったのだと思った。骸はこの世に、そして魂は川の向こうへと――。

もう山吹の花の下を潜ることもない……。

そう思った。

山吹の花が咲くところには幽界への入り口がある、そう聞いたのはつい最近のことだ。だがあの花を潜らずとも、生きとし生けるものはすべてがやがてその門に至るのだ。

それが一年後か五十年後か、あるいは明日なのかは誰にもわからない。人生が旅ならば、それはその門に向かってただ歩き続けるものなのだろう。出会っては別れ、美しい風景もやがてはゆき過ぎる。残るのは一抹の思いだけだ。その儚さはかつて僕が迷い込んだあの黄昏の国の、心許なく揺らめいた風景となんら変わるころはない。

僕はなぜあの国に迷い込み、伽耶子と再会したのだろう。そしてその伽耶子を見捨て、ひとりでこの世に戻ってきたのだという忸怩《じくじ》とした思いも、小さく滲んだ伽耶子の姿と共に、ずっと僕の心の奥底にあった。だがいずれ門を潜り伽耶子に再会するのなら、そうしたことを気に病むこともないのだろう。

人が最期まで捨てられないもの。思い出や憎しみ、悲しみ。喜び。愛。全てはやがて終わり、赦《ゆる》されるのだと語った老翁の言葉。僕もまた、あの老翁の水棹《みさお》に送られて、川の向こうへと還っていくひとりなのだ。

あんのーん

<http://novelz.blog4.fc2.com/>

ちょっと古風な世界観や少し不思議なお話が好きです。基本的にシリアス指向、多分「ほろにがほのあま微妙に（但R作品除く）エロい」が私の作風。



あの者に報いを!

——夜な夜な神の御許に通い、呪いの言葉を捧げる女の正体は!?

夜風は囁く

GB

illustration 立神勇樹

えんじの上衣《じょうい》は正義のしるし。

茶色の髪青年が、調子外れな歌を口ずさみながら、えんじ色の上着を袖で腰に結わえた。慣れた手つきで剣帯を留め直し、「これでよし」と胸を張る。

ここは、峰東《ほうとう》州の都ルドスの、馬車の行きかう中央通り。町の治安を守る警備隊、その証しである制式上着は、夏には薄手のものが支給されるのだが、この炎天下に襟つき長袖は暑苦し過ぎる、と言って、彼一ガーランはまともに着用したためしがない。

「なんだ、その変な歌は」

少し先を歩いていた警邏の相方が、怪訝そうにガーランを振り返った。こちらは、前のボタンこそ留めてはいないものの、上着をちゃんと身に着けている。尤《もっと》も、これが普通であって、「警備隊の誇り高き象徴」を結んだり団子にしたりするのは、隊内ではガーランぐらいのものだ。

「一昨日しょっ引いた羊泥棒が、『えんじの上衣はムカつく奴ら』とか何とか歌ってやがったんでな。正しい内容を広めようと思ってな」

「よくやるよ」

呆れ顔になる同僚を見て、ガーランの頬がますます緩んだ。悪戯っぽい光を目に宿し、より素っ頓狂な歌を披露し始める。

いいかげんにしろ、と同僚が眉を吊り上げるのと時を同じくして、道の向こうの路地からガーランの名を呼ぶ声がした。

「うわ、やべ。さっさと行こうぜ」

大慌てで歩調を速めるガーランを、同僚が小走りで追いかける。

「行こうぜ、って、あれ、東の助祭長だろ」

「だから逃げるんだよ。あのクソ坊主、俺のことをていのいい使いっ走りとしか思っていないんだからな。どうせまた、『教会の前のドブ掃除を頼むわ』とか何とか言いやがるに決まってる」

と文句を言いながら、人波をかき分けたガーランの前に、ひらりと人影が立ち塞がった。

「名を呼ばれて無視をする奴があるか」

「お、おやっさん……！」

いつの間に先回りをしたのか、噂の人物が、腕組みをしてガーランを睨みつけていた。

こんがり日焼けした小麦色の肌に、白い僧衣が輝いて見える。袖口から覗く腕は、老境に身を置く者とは思えないほど鍛え上げられており、その活力に溢れたさまは、若いガーランと比べてもなんら遜色がない。現に今も、小柄な助祭長に対して頭二つ分は背が高いはずのガーランが、圧倒される一方である。流石は、若い頃、南方で船乗りをしていたという、元・荒くれ者だ。

先ほどまでの余裕はどこへやら、すっかり意気消沈してしまった様子 of ガーランに対し、助祭長が得意げに口角を上げる。

「他でもない、おぬしに頼みがあつてな」

ほらきた、と呟いてから、ガーランは両手を腰にあてた。

「なんだよ。ドブ掃除か？」

「そんなつまらぬ用事に、わざわざ警備隊員殿のお力など借りぬわ」

しれっと言い切る助祭長に、ガーランの眼差しが冷ややかなものとなる。それを気にしたふうもなく、助祭長は言葉を継いだ。

「礼拝堂の尖塔に、カラスの死骸が引っかかっておっつな。それを取っ払ってもらえんかな」

ガーランの背後で、同僚がふき出した。

「やっぱり掃除じゃねえか」

「尖塔に登ろうにも、わしはもう歳だし」抗議の声を華麗に受け流して、助祭長は語り続ける。

「司祭様のお手を煩わせるわけにはいかぬし、助祭も侍祭も高い所は駄目だと言いよるし、癒やし手達の伴侶をあてにしようにも、独り身の者か年寄りしかおらぬし、いかんせん男手が足りんのだ」

「俺だって忙しいんだぞ」

吐き捨てるように反論を口にするガーランだったが……。

「酒場でくだをまく暇はあるのに、可哀相な老いぼれの頼みを聞く時間はないというのか。なんと無慈悲な」

見事に返り討ちにあい、彼はがくりと肩を落とした。

助祭長は、そんなガーランの様子を満足そうに見つめて、それからそっと声を潜めた。

「それに、あまり『あのこと』を広めたくない。既に知っているお前は適任だ」

「また、それかよ」

何やら口の中でぶつぶつと悪態をついたのち、ガーランは両手を上げて降参した。

「分かった、やりゃいいんでしょ、やりゃあ」

「仕事がひけたら帰りに寄ってくれ。死骸を放置しておいて、良からぬ虫が病気を運んできたら大変だからな」

と、そこで助祭長は片目をつむってみせた。「町の平穩を守るのがおぬし達の仕事だろう？」

ガーランは心底悔しそうに石畳を蹴りつけた。

折角の貴重な日勤日だったのに。盛大な溜め息とともに、ガーランは礼拝堂の丸屋根の梯子に手をかけた。もう一度深く溜め息をついて、いざ、茜色に染まる空へと段を上る。

「非番に酒飲んで何が悪いってんだ。つうか、酒でも飲まなきゃ、あんな苦勞の多い仕事、やってらんねーよ、くそつたれ」

ここなら助祭長の地獄耳も及ぶまい、と、ガーランは心置きなく毒づいた。途中から仕事の愚痴になってしまっているのも構わず、風を相手に鬱憤を晴らす。ひとしきり文句を吐き出したところで、また大きく息をつき、それから、少しだけ眉間を緩めた。

「まあ、あのクソ坊主のためじゃなくて、教会のため、ってんなら、屋根でも何でも登りますけどね」

ここ、東の教会は、生命の神アシアスを祀っている教会だ。

アジア信仰は、この国における実質的な国教であり、他の八百万の神々とは一線を画する存在であった。それは、祈りによって神の加護を得る「癒やしの術」の影響力によるところが大きい。アジアの教会には大抵、「癒やし手」と呼ばれる術者を集めた治療院が併設されており、そこは、アジアへの感謝の「気持ち」を持つ者なら誰でも一たとえ異教徒でも一救いを求めて訪れることができるのだ。

ガーラン自身、子供の頃から治療院には何度も世話になっている。つい先月も、捕り物の際の刀傷で、ここに駆け込んだことを思い出し、ガーランは心の中で頭《こうべ》を垂れた。それから、よし、と気合を入れ直して、最後の段を登りきる。

夕暮れの鐘に背中を押されながら、ガーランは尖塔に辿り着いた。

そこは、円蓋屋根の頂上にしつらえられた東屋とでもいふべきものだった。大人が四人ほど手を繋いで輪を作れば、丁度これぐらいの広さになるだろう。その円形の床の中央に、そこらにある井戸と同じぐらいの大きさの丸い穴が、ぽっかりとあいていた。

その穴は、礼拝堂丸天井の天辺にあけられた、明かり取りの眼窓《めまど》だった。尖塔は、この円形の窓から雨が礼拝堂内部に入り込まないように、傘のような役割を担っているのだ。

穴の縁は周囲の床よりも少し高くなっており、気をつけてさえおれば、そうそうこの眼窓から落ちることもない。が、流石にこの高さである。ガーランは、黒々とあいた穴から十分な距離をとって、壁際に背負い袋を下ろした。荒縄の束と麻袋を取り出して、やれやれと一息をつく。

そこへ、ガーランの名を呼ぶ声が、足元から響いてきた。

一一聞こえる、聞こえる。

そうっと眼窓から下を覗けば、会衆席の間に、ちんまりと佇む助祭長の姿が見える。ガーランは、にんまりと口の端《は》を引き上げた。

これこそが、昼間、助祭長がガーランに耳打ちした「あのこと」であった。一体どういうからくりなのだろうか、礼拝堂内の音が、驚くべき明瞭さでこの塔の上まで響いてくるのだ。

今からおよそ二十年前、父親の大工道具を勝手に使って壊してしまったガーランは、叱られるの嫌さに教会の尖塔に隠れて、偶然この秘密に気がついた。そうして、自分を探しに来た助祭長一一当時はまだ助祭であったが一一に、興奮した面持ちでこの大発見を報告した。

ところがガーランの思いをよそに、助祭長はこの知らせを聞くなり、難しい顔で、「悪戯する人間が現れてはいけないから」とガーランに口止めをした。今から思えば、悪戯は勿論のことだが、「司祭様達が祈りの声に耳をそばだててるらしいわよ」といった不名誉な噂が立つことを、彼らは心配したのだろう。

「おおーい、ガーラン、首尾はどうだ」

過去から現在へと意識を戻すと、ガーランは穴の上へと心持ち身を乗り出した。そして「問題ねえよ」と返答する。

「……なんだって？ 声が小さくてよく聞こえんわ」

そういえば、聞き耳のからくりは礼拝堂から尖塔への片道のみだったな、と、ガーランは改めて腹の底から声を張り上げた。

「何も問題ねえっての。今から仕事にかかる」

「そうか。山神様のお使いだからな、くれぐれも丁重に頼むぞ」

ついでに俺のことも丁重に扱ってもらえませんか。そう胸の内ではぼやきつつ、ガーランは大きく息を吸った。

「助祭長のアンタが、んなこと言ったら、アシアス様が嫉妬すんじゃねえの？」

「我らが主は、そんな狭量なお方ではないわ」

「そうだな、アンタが神職につけるぐらいだもんな」

助祭長の豪快な笑い声を聞きながら、ガーランは辺りを見回した。

梯子と反対側の屋根の縁に、物悲しい黒い影が、風に揺らめいてぶら下がっていた。

ガーランは慎重にカラスの死骸を屋根から下ろした。夏の日差しに冒されつつあるそれを麻袋に入れ、閉じた袋の口を荒縄の端に結わえつける。それから眼窓の傍に膝を突き、階下へと袋をゆっくり下ろしていった。

助祭長が袋を受け取ったのを確認して、ガーランはやれやれと立ち上がった。両手を軽くはたき、大きく伸びをする。そうしてガーランは周りをぐるりと見回した。

西にそびえる連山の縁が、燠火《おきび》のように鈍く光っている。血の色にも似たその明かりも、やがては薄汚れた灰に静かに埋もれていくのだろう。東の地平線から迫り来る藍色の下、家々の灯りが点々とまたたき始めているのを見下ろしながら、ガーランはそっと目を細めた。

大陸を東西に分断する山脈に沿って、その麓に細長く伸びている坂の町、それがこルドスだ。町の中心を南北に貫く大通りを境目に、西の高台に為政者など上流階級に属する者の住居が、東に下々の者どもの住み処がある。この東の教会は、その中央通りから細い路地を一角《ひとかど》くだった所にあった。

ガーランの生家は、ここから少し北の、いわゆる職人街にあり、物心ついた頃からこの辺りは彼の庭だった。助祭長こと「おやっさん」は、そんな彼が何か悪さをするたびに、遠慮のないゲンコツを喰らわせてくれていたものだった。

まさか、おやっさんを返り討ちにしたいくて励んだ体術や剣術が、自分の身を立ててくれることになるうとは。つい口元を緩ませたところで、当の助祭長の呼び声を足元に聞き、ガーランは慌てて咳払いをした。

「どうしたガーラン、何か問題でもあったか」

「人使いの荒い誰かさんのせいで、疲れてんだよ。ちょっと一服してから降りるわ」

「そうか。ならば、わしはこいつを裏の畑に埋めに行ってください。真っ暗になる前に、気をつけて降りてくるんだぞ」

「へいへい」

薄暗さを増した町並みの上を、心地よい風が吹き抜けていく。比較的標高のあるルドスの夏は、日さえ暮れてしまえば、とても過ごし易い。しばし夕涼みをば、と、ガーランは壁際に腰を下ろした。

壁に身を預けると、手足の先から疲れが一気に這い上がってくる。警備隊という職務の特性上、日勤日といえども仕事が長引くことは珍しくない。ガーランは助祭長の依頼に応えるために、昼から一度も休憩を取っていなかったのだ。

「感謝しろよクソ坊主」

言葉に見合わぬ穏やかな笑みを口元に浮かべ、ガーランはそっと目を閉じた。

――なんてこったー！

ガーランが次に目をあけた時、周囲は深い闇に包まれていた。

満天の星の下、山肌に這いつくばる灯りの数から判断するに、時刻はどうやら真夜中のようだ。毒虫にどこも噛まれていないことと、眼窓から落ちなかった幸運にほっとしつつ、ガーランは立ち上がった。自分のあまりの間抜けっぷりに、助祭長に八つ当たりする気力すら湧いてこない。心の中でベソをかきながら、凝り固まった肩をほぐしていると、地の底、もとい階下の礼拝堂から、人の声が聞こえてきた。

「……どうか報いを」

それは、触れれば切れそうなほどに張り詰めた、女の声だった。

眼窓から下を覗けば、闇に沈む会衆席を、月明かりがおぼろかに浮かび上がらせている。だが、床に差し込む月の光も、声の主のところまでは届いていないようで、姿かたちは勿論、その影すら定かではない。

「苦しみを与えたまえ」

切々と放たれる呪詛の声に、ガーランは身動き一つすることができなかった。

次の日、夜半過ぎ。準夜勤を終え帰途についたガーランは、ふと、教会に寄ってみようと思
い立った。

昨夜は結局、ガーランが呆然としている間に、呪詛の主はさっさと礼拝堂を退出してしまった
ようだった。意を決したガーランが、屋根の梯子をくだり、礼拝堂の二階の回廊に降り立った時
には、辺りには人の子はおろかネズミー匹見当たらなかったのだ。

――あんな忌まわしい祈りを神に捧げる者がいるとはな。

他人の不幸を神に願うなど、果たして許されることなのだろうか。ガーランは眉を寄せた。

呪いは、呪った者に返ってくる。彼は子供の頃に何度もそう言い聞かされ育ってきた。そして、
今でもそれは真理だと思っている。

尤《もっと》も、呪いは勿論のこと祈りにしても、呪文や印のちからによって恩恵を賜る「癒
やしの術」と違い、神がそれらを漏れなく拾い上げてくださるかといえは、決してそういうわけ
ではない。だが、それでも人は神に祈り続けてきたし、これからも祈らずにはおられないだろう。
人々にとって神という存在は、「心の支え」そのものに他ならないのだ。

そういえば、と、ガーランは苦笑を浮かべた。教会は当然として、鎮守の大木と呼ばれている
榎の木や、天高くそびえる霊峰相手にも、「良縁がありますように」だの「逃げた羊が無事帰っ
てきますように」だの、皆好き勝手に祈っているな、と。神様も、管轄外の仕事を請け負った場

合は、それぞれの担当の神様に申し送ったりするのだろうか、などと馬鹿なことを考えてみる。

そうこうしているうちに、ガーランは東の教会に辿り着いた。簡素な門をくぐり抜け、年季の入った石畳を奥へと進む。灯りこそ灯されていないが、祈りに訪れる者のために、礼拝堂は夜中も施錠されることはない。盗まれて困る物など何もないからな、と豪胆に笑う助祭長の顔を思い浮かべながら、ガーランは礼拝堂へ向かった。

と、暗闇の中、前方でひらりと何かがひるがえった。

次いで、静かに扉が閉まる音。

ガーランは口をきつく引き結んだ。そして、今度は気配を殺して歩き始めた。正面にある、先ほど何者かが入ったと思われる扉を横目で見、礼拝堂の側面へ回り込む。

例の眼窓の真下、祭壇のある祈りの場は建物の一番奥まった所にある。その場所へ少しでも近づくべく、ガーランは壁際を這い進んだ。植栽を避けながら、側壁に並ぶ腰高窓の下部に隠れるようにして。

そろそろか、と足を止めたガーランの耳が、遠い声を捉えた。

「何卒、愚か者に報いを」

暗がりをぬって聞こえてきたその声は、ともすれば風の音にかき消されてしまいそうなほど小さく、だが、決して弱々しくはなかった。並々ならぬ思いを込めて、静かに紡がれる、闇の祈り……。

――意外と若そうだな。

紡がれる言葉の内容とは裏腹に、凜とした美しさすら感じられる、声。俄然興味が湧いてきたガーランは、声の主の姿を求めてそっと身を起こした。窓の下辺に手をかけて、そろりそろりと頭を上げる……。

体勢を変えようとした拍子に、ガーランの靴が小枝を踏んだ。枝の折れる音が、夜のしじまにやけに大きく響き渡る。

しまった、とガーランが思う間もなく、礼拝堂の中を足音が走り去っていった。慌ててガーランも立ち上がり、建物の表側へと向かう。

木の根に何度も躓きながら植え込みを抜け、なんとか礼拝堂の正面へ出たガーランを待ち受けていたのは、人っ子一人いない静まり返った前庭と、……微かに残る甘い花の香りだけだった。

翌日、準夜勤二日目。同じく準夜勤だった警備隊隊長の、「飲みに行かないか」との誘いを断って、ガーランはまたも教会へ向かった。どうしても「彼女」のことが気になったからだ。

この世知辛い世の中、ガーランだって人を呪ってやりたくなかったことは、これまでに何度もある。「ヘソ噛んで死ね」程度の悪態なら、正直なところ日常茶飯事だ。ヘソではすまない鬱憤について、酒場でくだをまくことも、珍しくもなんともない。

昨夜の彼女にしても、ああやって呪詛を声にして吐き出して、心の安寧を保っているのだろう。呪いの言葉を神に聞かせるのはどうかと思うが、独りで恨みつらみを抱え込むよりは、ずっと

いい。

――耐えて、耐えて、その挙げ句、限界に達して、取り返しのつかないことになるよりは……

。

時を巻き戻すことは、誰にもできないのだ。そう、神にすらも。ガーランは苦虫を噛み潰したような顔で、夜道を急いだ。

昨日よりも少しだけ早い時間に教会に着いたガーランは、迷うことなく礼拝堂に入り込んだ。勝手知ったる何とやら、入り口脇の狭い階段を登り、二階の回廊から丸屋根へと出る。件の人物を尖塔で待ち伏せする作戦だ。

果たして、ガーランが眼窓の傍に腰を下ろすのとほぼ同時に、階下から足音が聞こえてきた。

作戦成功、と口角を上げたガーランだったが、下を覗いてがっくりと肩を落とした。一昨日と同様、月明かりはその人物を照らしきることができず、ただ何者かの気配だけが、闇の中にぼんやりと感じられるばかりだったのだ。これでは、下の彼女がどこの誰だか、判別のしようがない

。

「卑怯者に、相応の報いを」

凜とした声が、礼拝堂の壁を駆け上がり、眼窓を抜けて、ガーランの耳元をそっとくすぐる。

なすすべもなく、ガーランは唇を噛んだ。

次の日、ガーランは夜勤だった。

夜警に出ている間も、ガーランは礼拝堂へ、あの声の主へと、思いをめぐらせていた。

――今日も祈りに……、いや、呪いに行っているのだろうか。

愚痴をこぼす相手として、神は打ってつけの存在かもしれない。尖塔に誰かさんが隠れているようなことでもない限り、その思いが他人に漏れることはないのだから。

だが、もしも、それが単なる恨み節などではなく、決意表明だったらば……。

ガーランは、ごくりと唾を呑み込んだ。

そっと山の方角を振り返れば、月明かりの中、家々の屋根の向こうに切り立った崖が見える。大昔に大きな鬼が腰掛けに使っていた、と謂われている「居敷きの崖」だ。

九年前、ガーランの目の前で、一人の娘があの崖から身を投げた。

その娘は、ガーランもよく知っている娘だった。実家の裏に住んでいた、一つ年下の、いつもガーラン達悪ガキどもから少し離れたところで一人静かに本を読んでいた、内気な娘。

それは、ガーランが警備隊員になって一年目の春のことだった。まだ実家住まいだったガーランが、裏庭で剣の素振りをしていた時、珍しくも彼女のほうから、木柵ごしに彼に問いかけてきたのだ。ねえ、あなたは人を斬ったことがあるの？ と。

答えを口にするのが躊躇われて、ガーランが黙ったまましていると、彼女は小さく笑った。笑

って、一言を呟いた。

「あのひとを、ころしてやりたい」

彼女が最近、婚約までしていた男に捨てられたということ、ガーランは人づてに聞いていた。なんでも、相手の男が他の女の財産に目がくらみ、婚礼を目前にあっさり鞍替えしたらしい。

ガーランは、彼女に何と言えば良いのか、分からなかった。分からなかったから、ただ、おざなりに言葉を返した。

「そんな物騒なこと、言うなよ」

しばしの沈黙ののち、彼女はそっと目を伏せた。そうね、と囁くように言葉を残して、彼女は去っていった。

そして一週間後、ガーランは彼女と対峙する。捕り手と下手人という立場で、崖の上で。

あの時、もっと親身になって彼女の話聞いていれば。ガーランのこぶしが、固く握り締められる。

――もう二度と、あんな失態は繰り返さない。

ガーランは、昨夜の礼拝堂の声を思い返し、唇を引き結んだ。あの、痛々しいほどに張り詰めた声は、九年前の彼女と同じ、覚悟を決めた者特有のものだ、と。

――いい声なんだけどな……。

他人を呪うことなどやめて、いっそ妙なる調べを聞かせてくれたら。そう溜め息をついたガーランの脳裏に、ふっと閃くものがあった。

「……まあ、駄目でもともと、ってな」

ガーランは小さく頷くと、にいつと口の端《は》を上げた。

夜勤明けの休日。昼間にたっぴりと身体を休めたガーランは、夜を待って教会を訪れた。

二日前と同様、尖塔に上がって待ち構えていると、またしても夜半になって、女がやってきた。

「神よ。どうか我が願いを聞き届けたまえ」

どんなに目を凝らそうと、月の光なくしては、女の姿は闇に沈んだきりだ。

だが、それは、向こうにとっても同じこと。ガーランは二度三度と深呼吸を繰り返した。そう、下にいる彼女からも、暗い尖塔に潜むガーランの姿を見ることはできないはず。

「どうか、苦しみを与えたまえ」

ならば、上手くやれば、彼女が一体どういう問題を抱えているのか、聞き出すことができるかもしれない。たとえ力にはなれなくとも、彼女の憂さを多少なりとも晴らすことができれば……。

ガーランは、大きく息を吸い込むと、下腹に力を入れた。

「おのれの浅はかな行いで、傷つけられた者がいることを忘れぬよう、生涯消えぬ苦しみを」
「随分深い恨みなんだな」

思いきってガーランが階下に放った声は、壁や床に反響しながら、暗闇の中へ吸い込まれていく。

女が、黙り込んだ。

女の出方を窺おうと、ガーランもまた口をつぐんだ。

――我慢比べか。

中庭の木々が夜風に囁きを交わしている。

沈黙を守り続ける女に、ガーランも無言で対抗した。

と、不意に、階下の気配が揺らいた。

礼拝堂を吹き抜ける風の音が、ガーランの五感を惑わせる……。

風がやみ、再び静寂が訪れた。

ガーランはそうっと唾を呑み込んだ。全神経を集中させて、下の様子を探る。

――逃げられたか。

小さく舌打ちして、ガーランは腰を上げた。溜め息一つ、礼拝堂に下りようと梯子へ向かう。

その時、山のほうで突然ヨタカが鳴きだし、ガーランはぎょっとして動きを止めた。

キョキョキョキョ、キョキョキョキョ。

甲高い鳥の鳴き声が、小刻みに何度も夜陰を震わせる。脅かすなよ、とガーランが肩を落とした直後、軽い足音が眼窓の下から聞こえてきた。

足音はまたたく間に遠ざかり、扉が開いて、閉じて、そうして今度こそ間違いなく真の静寂が世界を包み込む。

危なかった、と、ガーランは思わず胸を撫で下ろした。

次の日、準夜勤が終わると、またまたガーランは教会に直行した。

今度は念のため礼拝堂の中を通らずに、暗闇に乗じて外から尖塔を目指すことにした。抜かりなく持参した背負い袋に靴を放り込み、木陰の死角を選んで石積みの外壁に挑みかかる。

実は、ガーランが礼拝堂の壁に登るのは、これが初めてではない。去年も助祭長に庇の修理を頼まれて、壁から屋根へと登らされている。ただ、その時は助祭長が縄梯子を用意してくれていた。登はん訓練はガーランが最も苦手とする種目であったが、真面目に励んでおいて正解だったな、と彼は満足そうに自らに頷いた。

――迷える仔ヤギを群れに戻すのだ。どこから入ろうが、神様も大目にみてるに決まっている。

月の光に助けられながら、ガーランはなんとか尖塔に辿り着いた。

いつもどおりに眼窓の傍らに腰を落ち着け、息を殺して、ガーランは待ち続けた。

半時が過ぎる頃、階下に変化が現れた。突然、隅の暗がりでは何者かの気配が動いたのだ。

ガーランは知らず息を呑んだ。

扉は開かれなかった。つまり、彼女もまたガーラン同様、下で待ち伏せをしていたのだ。念には念を入れて良かった、と胸を撫で下ろしてから、ガーランは上唇を舌で湿した。

階下では小柄な影が一つ、会衆席の隅々までを見回っていた。そのまま月明かりの中に留まってくれ、とのガーランの願いも虚しく、影は最後に窓の外を確認したのち、定位置に戻る。

そうして、再び辺りは静謐に満たされた。

さて、と、ガーランは顎をさすった。物事を先へと進めるためにも、彼女から情報を引き出さなくてはならない。

――野郎相手なら、話は簡単なんだがなあ。

こと女性相手ならば、「女たらし」の称号も輝かしい我らが隊長の真似をするのがいいだろう、そう結論づけてガーランは居住まいを正した。お定まりの呪詛を吐き出し始めた女の声を遮るようにして、眼窓から声を投げる。

「貴女のような美しい方に、かような呪いの言葉は似合いますまい」

隊長の物真似にかけては隊内随一、とガーランは自負している。それに、これはガーランの本心からの言葉だった。尤《もっと》も、根拠など何もないのだが。

「美しい？」

――呼吸置いて、鼻で嗤う声が響いてきた。対話成立、作戦成功だ。

「ふざけないで。あなたは誰？ 昨日もいたわね。どこに隠れているの？」

強気なところも悪くない。ガーランは満足そうに口角を引き上げた。さて何と名乗ったものか、しばし思案してから、ガーランはその瞳を悪戯っぽく輝かせた。

「私は精霊です。夜風の精霊です」

さしものガーランも、神を騙るのはあまりにも畏れ多いと考えたのだ。

一方、女は逃げるでなしに、靴音も高く、説法台や祭壇の裏を見て回っているようだった。残響のせいで、ガーランの声がどこから聞こえてくるのか判らないのだろう。そもそも、自分の声がこんな高い所にまで届いているなど、夢にも思っていないに違いない。

「隠れていないで、出てきなさい」

――意外と肝が据わっているな。

ガーランは思わず笑みを浮かべた。気の強い女は隊長の鬼門だからな、などと勝手なことを胸の中で呟いてから、今度は、心持ちいかめしい顔で、「どこにも隠れてなどおらぬ」と助祭長の口調を真似てみる。

「嘘」

冷たく一言を言い放ち、女は今度は窓を改め始めた、それから、祭壇の横手にある通用口を開く。

まさか、このまま立ち去るつもりだろうか。ガーランは猿真似をかなぐり捨てて女を呼び止

めた。

「だから、どこにも隠れてなんかいないって！」

「まさか」

「現に、どこにもいなかったら？」

「でも、精霊がヒトの言葉を話すなんて……」

精霊もまた、神と同様にヒトの理に縛られぬ存在である。だが、そんなことは、ガーランの知ったことではない。

「精霊だって、たまには人恋しくならあな」

「……ふうん」

物凄く不審そうな声が、下から漂ってきた。が、ガーランは気にせず、ここぞとばかりに質問を繰り返す。

「で、この間から何をそんなに呪っているんだ？」

女が、大きな大きな溜め息をついた。ややあって、投げやりな口調がそのあとを継ぐ。

「今度、結婚させられるのよ……」

「させられる？ 好きでもないのに、ってことか？」

また、溜め息が聞こえた。

そして沈黙。

やがて、いつもの感情を押し殺した声が、真っ直ぐ眼窓を突き抜けてきた。

「姉がいたの」

唐突な話題転換に、ガーランは目をしばたたかせる。

「『いる』じゃなくて『いた』？」

「……死んだわ」

吐き捨てるように発せられたその言葉を追いかけるようにして、どこかでヨタカが鳴き始めた。

夜気を打ち震わせる鳥の声に、つい気を取られたガーランが我に返った時には、女の気配はすっかり消え失せてしまっていた。

それから毎晩、ガーランは礼拝堂の壁をよじ登った。

女はいつも、開口一番「いるの？」と囁いた。

ガーランが無言でいると、女はこれまでどおり呪詛を口にしながら始めたので、彼は毎回「いるよ」と答えなければならなくなった。

そうすると、女はわざとらしい溜め息とともに、黙り込む。

そうして、あまりの静けさにガーランがうっかり居眠りをしてしまいそうになる頃、女は「精霊」に話しかけてくるのだ。

あなたは誰、どこにいるの、どこからきたの？

俺は精霊で、ずっとここにいる。アンタこそどこから来たんだ？

そんな問答を懲りもせずに繰り返しては、ヨタカの声とともに女は姿を消すのだった。

「また昨日も夜勤を交代してもらったらしいな」

大あくびとともに警備隊本部に登庁したガーランは、訓練場の扉の前で、不機嫌そうな声に呼び止められた。しびしび振り返れば、えんじの上衣をビシッと着こなした切れ長の目の青年が、いかにも文句を言いたげな表情で、階段を下りてくる。彼こそが、ルドス警備隊隊長その人だ。

「夜勤だけじゃなくて、ちゃんと非番も一くくりにして、交代してますから」

文句は言わせませんよ、と唇を尖らせるガーランに、隊長は、「そういうことが言いたいんじゃない」と肩を落とした。

「いいかげん休みを入れないと、身体を壊すぞ」

「でも、それじゃあ夜勤も入れなきゃならなくなるでしょ」

「当たり前だ」

隊長に真正面から顔を覗き込まれて、ガーランは思わず目を逸らした。しまった、と即座に視線を戻すも、隊長の目つきは険しくなるばかりだ。

「ガーラン、お前、何を企んでいる？」

「何も企んでいません。人間きの悪い」

ガーランはそう苦笑を浮かべてから、大きく息をついた。

「仔ヤギがね、懐かなくて」

「は？」

「群れに帰ってくれないんスよ」

無言で眉をひそめる隊長に、ガーランは肩をすくめてみせた。

「そんなわけなんで、もう少し俺の好きにさせてもらえませんかね」

そうして更に五日が過ぎた。

ガーランと女は、お互いの正体は棚に上げたまま、世間話をぽつりぽつりと交わすようになっていた。

ガーランは、会話の内容から女が良家の娘であると推理した。他愛ない話題に、さりげなく混ぜ込んだ政《まつりごと》の話に、彼女が難なく話を合わせて来たからだ。この国の歴史や社会情勢などなど、ガーランが職務上必要にかられて必死で詰め込んだそれらの知識を、彼女はとても自然に口にした。

初等学校だけでは到底得られない博識さ。それは、彼女がいわゆる「上流階級」に属する人間だということを、示しているといえよう。そう思って眼窓から影の仕草を見れば、なるほど、彼女には確かにそこらの町女とは違う、優雅さや気品が感じられるような気がした。

裕福な家のお嬢さんが、深夜お屋敷を抜け出してまで、呪いたい相手とは。ガーランの興味は、日を重ねるごとにますます深みを増していった。

その答えは、何の前触れもなくもたらされた。

ふと途切れた会話の糸を、どうやって繋ぎ直そうかガーランが考えていると、彼女がぼそりと呟いたのだ。まるで今朝見た夢の内容でも語るかのように、事も無げに。

「姉が、死んだの」

それは、彼女がガーランと最初に言葉を交わした時に、口にした台詞と同じだった。

ガーランは黙って続きを待った。

「身分違いの恋人を父に殺され、断崖絶壁から身を投げたわ」

あまりにも衝撃的な告白に、ガーランは言葉もなく奈落を見つめる。

「姉は、父に仕えていた下級騎士と恋に落ち、将来を約束し合った。でも、父はそれに猛反対した。何故なら、父はさる有力者に、姉を嫁がせるつもりだったから」

深呼吸一つ、なんとかガーランは平静を取り戻した。

「政略結婚、ってやつか」

「お相手は、五十を越えてまだ独り身の男で、良からぬ性癖が噂される人物だった。まあ、絶望する姉の気持ちも解らないでもないわね」

淡々と紡がれる言葉からは、一切の感情が読み取れなかった。

「しかし、いくら縁談の邪魔になるからって、殺す、ってのは酷過ぎるぞ。どこかに訴えろとかできなかったのか？ いくらお偉いさんでも、実の娘の告発なら……」

「枷が無ければ、ね」

彼女の声が、更に一段低くなった。

「『お前が余計なことをすれば、妹を殺す』……父はそう姉を脅したのよ。

母は早くに亡くなり、私達はたった二人だけの姉妹だった。だから……」

なんて腐れ親父だ、とガーランはこぶしを握り締めた。そんな奴なんかとつと見限って、姉妹で家を出てしまえば良かったのに。そう考えかけたガーランだったが、即座に「無理か」と思い直す。

世間知らずの細腕の娘二人では、とても世の荒波を乗り越えてはいけないだろう。たちまち身を持ち崩すか、追っ手に捕まり連れ戻されるか。こうやって夜な夜な恨み言を神にぶつけるのですら、彼女にとっては精一杯の冒険のはずだ。

「妹を守りたい。でも、ヒヒジイと一緒ににはなりたくない。それで自ら……、ってことか」と、そこでガーランはあることに思い当たった。「って、まさか、アンタが今度結婚する相手って……」

「そうよ」

なんだか急にやりきれなくなって、ガーランは大きく息を吐いた。

「で、アンタは、夜な夜な父親を呪い続けている、ってわけか」

「違うわ」

刃物のような声音が、辺りの空気を両断する。

「私が呪っているのは、姉よ」

彼女の言わんとしていることが理解できずに、ガーランはおずおずと問いかけた。

「でも、お姉さんは、亡くなったんじゃ……」

「ええ、あの崖から落ちたら、命はないでしょうね」

冷笑とともに彼女は言い放つ。

死者を呪う、ということの重さに気づいたガーランの背筋を、怖気《おぞけ》が走った。

――腑に落ちねえ。

夜道を歩きながらガーランは独りごちた。とはいえ、実際のところ何が腑に落ちないのか、自分でもよく分からない。おのれの頭が悪いことを恨めしく思いつつ、ガーランは今夜も日課をこなす。

「また来たのか」

「あなたもね」

「俺は夜風の精霊だからな」

すっかり細くなった月の光が、頼りなげに床を照らしている。

雄弁だった昨日が嘘のように、彼女はじっと黙りこくっていた。

『私を身代わりにして、自分は常世でのうのうと暮らしているなんて、許せない』

昨夜、立ち去り際に彼女が残した言葉を、ガーランは反芻していた。

八つ当たり以外の何ものでもない子供じみた捨て台詞を聞いて、ガーランは驚くと同時に首をかしげた。これまでのやり取りから想像していた彼女の人物像と、酷くかけ離れた印象があったからだ。

普通の会話で窺える彼女は、とても聡明だった。ガーランの小芝居に対する反応一つとっても、愚かな小娘という像からはほど遠い。

それが、いきなりのこの台詞だ。そうでなくとも、もやもやとはっきりしない「何か」が、彼女の姿を震ませている気がして仕方がないのに。ガーランは知らず唇を噛んだ。

――姉さん、か……。

兄弟のいないガーランには、それがどのような存在であるのか今一つ見当がつかない。なんとかして彼女の思考を辿れないか、と頭をひねるガーランの脳裏に、先日、同僚の妹が忘れ物を届けに本部にやってきた時のことが浮かび上がってきた。兄を容赦なく言い負かす妹を見て、ガーランは自分に妹がいないことを神に感謝しつつも、じゃれあう二人をどこか羨ましく思ったものだった。

――ああそうか、甘えているのか。

意識を階下に戻したガーランは、何となく納得した。きっと、彼女達は仲の良い姉妹だったんだろう。姉が亡くなってしまった今も、彼女は姉に甘えにここにやって来ているのだ。「馬鹿なこと言わないの」との叱責を求めて。

こうやって人目につかない所で羽を伸ばし、そうしてまた朝が来れば、たった独りで理不尽な運命と闘うのだ……。

――もしかしなくても、俺、お邪魔虫なんだな。

悪いことしたなあ、とガーランが頭を搔いていると、久方ぶりに彼女が話しかけてきた。

「どうして、毎晩邪魔をするの」

痛いところを突かれて、ガーランは密かに苦笑を漏らした。潮時か、と。

ガーランはゆっくりと深呼吸をした。それから、腹に力を込めた。

「アンタみたいないい女に、呪いの言葉は似合わない」

「何も知らないくせに」

あからさまに鼻で嗤う気配が伝わってくる。

もう一度ガーランは息を整えた。

「いいや、知ってるさ」

面と向かっては、とてもこんな台詞は言えないからな。そう心の中で呟いて、ガーランは胸腔一杯に空気を吸い込んだ。

「アンタが、しっかりと背筋を伸ばして、惚れ惚れするほど真っ直ぐに立ってるってことを」
階下で、息を呑む気配がした。

再び、沈黙が辺りを支配する。

さて、猿芝居の種明かしといこうか、と、ガーランが腰を上げた時、遠くから木が軋むような音が聞こえてきた。

ヨタカの声だった。

「星送りが始まるわね」

ぽつり、と彼女が呟いた。

星送りとは、毎年この季節に行われる追悼と慰霊の祭りのことだ。新月の夜から三日間、人々は死者を悼んで川におふだを流す。太古の昔から続く、夏の情景だ。

彼女は、どんな思いで姉を見送るのだろうか。唇を噛み締めるガーランの耳に、いつになくしおらしい声が飛び込んできた。

「毎晩、こんな馬鹿な女の話に付き合ってくれて、ありがとう」

不意打ちを喰らい言葉に詰まりながらも、ガーランはなんとか声を絞り出した。

「いつ、なんだ？ 結婚式は」

「星送りの祭りが終わったら」

「って！ もう五日もないじゃねえか！」

礼拝堂内に、ガーランの悲鳴が何度も反響する。

微かに、ほんの微かに、彼女が笑った。

「さようなら、精霊さん。今まで楽しかったわ」

囁きが、夜風とともにガーランの頬を撫でる。

そして、扉が開く音。

「待てよ！」

そう叫ぶや否や、ガーランは屋根の梯子に飛びついた。何度も足を踏み外しそうになりながら、二階の回廊に下りる。階段を駆けくだり、扉を押し開き、礼拝堂の表へ飛び出した。

見渡す限り動くものは何もない、寝静まった世界に、ただヨタカの鳴き声だけが虚しくこだましていた。

次の夜、女は礼拝堂に現れなかった。

ガーランは朝一番に本部に登庁すると、一目散に隊長の執務室に飛び込んだ。

「隊長、アンタお貴族様の端くれなんだったら、社交界ってのもお馴染みなんだろ？ 星送りの祭りのあとに結婚式を挙げる奴の噂とか、知らないか？」

窓際の執務机で事務仕事に勤しんでいた隊長は、書類から顔を上げることなく言葉を返してきた。

「すまないが、私はそういうことには疎いんだ」

「晩餐会に舞踏会に、高嶺の花をとっかえひっかえだったくせに、何が『疎い』だ」

「いつまでも昔のことを蒸し返すな」

眼光鋭く、隊長がガーランを睨みつける。

「嫡男でもない上に、家を出てしまった『放蕩息子』が、そんな貴重な情報を持っているわけがないだろう」

「じゃあ、お屋敷に戻れば情報が手に入る、と」

大きく身を乗り出すガーランに、隊長は思いっきり眉間に皺を刻んだ。

「ガーラン、お前、人の話を聞いているか？」

「聞いてますよ、隊長。俺が必要としている情報が、隊長のご実家にある、ってことっしょ？」

「さっさと調べに行きましょう！」

言うなり、ガーランは隊長の腕をむんずと掴んだ。そのまま椅子から引っ張り立たせようとするのを、隊長が全力で拒む。

「いや、だから、私は、父が彼女のことを認めるまでは屋敷の門をくぐらないと……」

「じゃあ、手紙書いてくださいよ。セバスのじいさんに、これこれこういう人を知らないか、って」

「お前、どうして我が家の家令の名を……、って、いや、そうではなく、ガーラン！ 理由を言え！ まずはそれからだ！」

「おかしいぞ」

ガーランの話を一通り聞き終わるなり、隊長がきっぱりと言い切った。

「まず第一に、良家の娘が夜中に町をうろつけるというのがおかしい。ましてや東の教会だろう？ 西ではなく」

町の中央を貫く大通りの西と東では、住民の層が違っている。町の有力者や貴族といった「持てる者」の屋敷は、町の西側、山へと続く高台に建ち並んでいた。

「そもそも、騎士を擁するほどの有力者なら、普通は屋敷に礼拝堂があるだろう？ どうして、わざわざ外に出る必要がある？ お前、おかしいとは思わなかったのか」

尊大に言い放つ隊長に対して、ガーランは盛大にムツとした顔を作った。

「俺にとっては、礼拝堂ってったら、教会にあるものと決まってるんでね」

「それにしても、だ。連れはいなかったのか？ 馬車の音は？ 婚礼を控えた娘が夜中に独りで出歩くなぞ、絶対にありえない」

「ありえないも、ありえなくもないも、事実がそうなんだから仕方がないでしょう」

一歩も退くつもりのないガーランの勢いに、隊長は溜め息をついて、ペンを手に取った。

その日の夕方、警邏から帰投したガーランは、隊長に執務室に呼び出された。

机の前に立ったガーランに、隊長は手に持った紙をぞんざいに机上に広げて見せた。

「該当者無し、だそうだ」

「は？」

「州知事が有する名鑑の中に、星送りの前後半年間に婚姻した、もしくは婚姻する予定の者はいなかった、とのことだ」

その瞬間、ガーランは見えない手につんと頭を殴られたような気がした。

「夢みがちな乙女の、お姫様ごっこだったのではないか？ 悲劇の姫に自らをなぞらえて、一人芝居を楽しんでいたところに、精霊を騙る馬鹿者が闖入し引くに引けなくなったとか、もしくは、お前の悪戯に気づいての仕返しだったとか……」ほんの少しだけ同情の色を瞳に浮かべて、隊長が椅子に背もたれる。「それとも、その者こそが、ヒトにあらざる存在であったとか……」

まるで、隊長の声がどこか遠くから聞こえてくるようだ。

ガーランは、ただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

東の教会、礼拝堂より少し下がった所に建つ治療院。その裏手で、白いエプロンを身につけた若い女性が洗濯物を干していた。

雲一つ無い夏空を背景に、何枚もの敷布が気持ち良さそうにはためいている。最後の一枚を干し終えた女性は、物干し場をぐるりと見渡してから、大きく頷いた。そうして空になった洗濯籠を抱え上げ、治療院の裏口へと戻ってくる。

ガーランは、扉の陰から出ると、女性の進路を塞ぐような位置で足を止めた。

女性が、怪訝そうな表情で立ち止まる。

束ねられた褐色の髪は、日の光を受けて艶やかに波打ち、襟足を優雅に飾っている。涼しげな瞳は、澄みきった泉のごとく。思ったとおり、いい女じゃねえか、と、心の中で呟いてから、ガーランは姿勢を正した。

「アンタがラナさん？」

ガーランの問いかけを――声を聞くなり、彼女の足元に籠が落ちた。

ラナと呼ばれた女性は、しばし身動き一つせずにガーランの顔を凝視していたが、やがて何か観念したかのように、両手を軽く上げた。

「もしかして、私は、何かあなた方の仕事を邪魔してしまっていたのかしら」

彼女の視線がえんじの上衣に注がれていることに気づき、ガーランは小さく首を横に振った。

「俺が勝手に夜の散歩をしてただけさ」

「とんだ精霊がいたものね」

冷やかな眼差しを、咳払いではね返して、ガーランは話を続ける。

「アンタの話を聞いていて、どうしても引っかかることがあったんだ」

ラナの、形の良い眉が、すっとひそめられた。

「俺は頭が悪いからさ、何がどう引っかかってんのか、すぐには解らなかった」

「すぐには、ということは、今はもう解っているってこと？」

挑戦的な質問に、ガーランは得意げに頷いた。

「アンタ達姉妹は、仲が良かった。特に、姉は妹のことをとても大切に思っていた。自分の幸せよりも妹の命を優先するほどに。でもな、そんなに妹が大事なんだたらなおのこと、何故死んだのか、腑に落ちねえんだよ。政略結婚なんだから、自分が死ねば妹が身代わりになることぐらい、いくらでも想像できるはずだ。死ぬほど嫌だった縁談を、死んでまで守りたかった妹に押しつける、っておかしくないか？」

ラナの表情が、僅かに硬くなる。

「そもそも父親の脅し文句だって、『姉のお前がいうことを聞かなければ、代わりに妹を嫁にやる』でも良かったはずだろ？　なのに、実際は違った。腐れ親父は妹の命を盾にし、姉は死を選んだ。妹では姉の代役にはなれなかったんだ。

だが、妹に何か問題があったわけではない、というのは、今回政略結婚のお鉢が妹に回ってきたことから分かる」

まさしくこの矛盾こそが、ガーランの抱いた違和感の大本だったのだ。

「つまり、こうだ。アンタ達は歳の離れた姉妹だった。それも、四つや五つどころではなく。幼い妹が後釜におさまることはないと確信できたから、姉は命を絶ったんだ」

沈黙を肯定と捉えて、ガーランは話し続ける。

「すると、ますますアンタが姉を呪う理由が解らなくなる。その当時の姉の事情がアンタに理解できないことはないだろうし、それなら姉に甘えるにしてももっと違うやり方を選びそうなものだしな。そもそも、アンタが呪うべきは、父親だろう？　そして、それをアンタ自身も承知して

いた」

ラナが唇を噛む。

「なのに、アンタは姉を呪い続けた……」

ガーランは一旦言葉を切ると、大きく息を吸った。それから、静かに言葉を継ぐ。

「……ラナ、アンタが『姉』なんだろ？」

洗濯物がばたばたと暴れる音とともに、一陣の風が二人の間を吹き抜けていった。

「……と、まあ、答えを知ったあとなら、いくらでも偉そうに言えるわな」

ガーランは、少しばつが悪そうに頭を掻いた。

「答えを知った……？」

「アンタ達が歳の離れた姉妹だ、ってところまでは想像がついたものの、その先、なんでアンタが姉を呪うのかがさっぱり解らなくてな。でも、嘘や作り話というにはアンタの雰囲気は痛々しすぎるし。とりあえず、アンタの正体は棚上げにすることにして、亡くなったという『姉』について調べてみたんだ」

「隊長さんね。確か、州知事の息子さんだとか。……本当、あなたが警備隊員だったなんて、迂闊だったわ」

「ああ、まあ、普通だったら俺みたいな庶民にゃ、お偉い方々の、しかも異郷の事情なんて分かりっこないからなあ」

ふう、と息を吐き出すと、ガーランはこれまでの経緯を語り始めた。

「隊長んちで訃報の束を調べたところ、今から十年前に、さる南方のお貴族様が、妙齡の娘さんを不慮の事故で亡くした、という記録が引っかかった。

どんな小さな手がかりでも欲しかったんでな、俺はこの助祭長に話を聞きにきた。南の海で船に乗っていたおやっさんなら、もしかしたら何か知っているかもしれない、ってね」

そこでガーランは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「おやっさんも歳だね、思い出話につると悲恋の姫が登場した。口が滑ったことに気づいて、誤魔化そうとしやがったが、なんとか聞き出してやったぜ」

引き換えに、今度の休日に教会の薬草畑の柵を修理する羽目になったことは、自分の胸にしまっておくことにする。

「十年前、世話になっていた船長が倒れたという知らせに、おやっさんは海を渡った。そこでおやっさんは、海岸の波打ち際に倒れていたアンタを見つけたんだ。

事情を知ったおやっさんは、アンタをルドスへ連れてきた。そうしてアンタは、ここルドスで別人として暮らし始めた」

ラナが、小さく頷いた。

「だが、最近になって、アンタは、風の便りに自分の妹が結婚することを知った。そうなんだろ？ お相手は、自分の時と同じ、隣の領主。それで、アンタは後悔にうちひしがれた……」

深い溜め息とともに、張り詰めるようだったラナの気配が緩んだ。一息つくガーランのあとを受けて、彼女は訥訥と話し始める。

「あの時、妹はまだ五つだったし、相手は既に老境にさしかかっていた。あの子が私の身代わりになるなんて考えもせずに、ただ絶望から、私は発作的に海に身を投げた……」

そこで、ラナの口元が僅かに歪んだ。

「そもそもあの強欲な父が、将来有用な手駒になりうるあの子を、私への見せしめのためだけに殺すなんて、ありえない。父は見抜いていたのよ、運命を嘆くばかりで、自分からは何も動こうとしない私のことを。だからこそ、心にもない脅し文句を平然と口にすることができたんだわ。そんなことすら解らずに、私は……」

喘ぐように息を繰り返し、ラナは顔を伏せた。こぶしを握り締め、もう一度大きく息をつき、震える唇を再度開く。

「あの子に謝らなければ、と思った。できれば代わってやりたかった。でも、私は既に死んだ人間だから、今更故郷には帰れない」

「だから、アンタは『自分』を呪ったんだ。何も知らない妹の代わりに、全身全霊を込めて呪詛を吐いた」

「……私が死んだと思えばこそ、あの子は運命を受け入れたのでしょうか。ならば、今ここで私がおのうのうと一人生き永らえてはいけない。でも……」

そこまでを語って、ラナは言葉を詰まらせた。握ったこぶしを胸にあて、青い顔で息をつく。

ガーランはそっと目を細めると、彼女の言葉を引き取った。

「……でも、既にアンタは、ここになくってはならない人になっていた」

息を呑み顔を上げるラナに、ガーランは片目をつむってみせた。

「相当頑張ったんだってな。おやっさんが誉めてたぜ。なんにもできなかった気弱なお嬢様が、今や治療院筆頭の癒やし手だ、って」

唇を噛んで、ラナが顔を背ける。

ガーランは怪訝そうに片眉を軽く上げたものの、そのまま話を続けた。

「実はさ、最初は『星送りの祭りのあとに挙式予定のある名家』ってふうに、『妹』の線で調べてただけどさ、それでは該当する家が見つからなかったんだよ」

ラナが困惑の表情でガーランを見た。

その様子を横目で見つつ、ガーランはすまし顔で言葉を重ねる。

「それがな、去年だったんだ。アンタの妹さんが結婚したの。なんてったって海の向こうだ、遠いからなあ、風の便りは風任せ、一年かかってやっとアンタのもとへ辿り着いたってわけだ」

「去年……！」

なんてこと、と目を見開くラナをよそに、やけに勿体ぶった調子でガーランが口を開いた。

「そう。去年の星送りの祭りのあと、マタル領主の娘口ナと、カフタス辺境伯アクラムの結婚式が執り行われた、ってね」

「え？」

ぽかんと口を開いて絶句するラナに、ガーランは遠慮なくにやにや笑いを浴びせかける。

ラナは、たっぷり一呼吸の間、身動き一つしなかった。それからごくりと唾を呑み込んで……、そして、ガーランに噛みつかんばかりの勢いで詰め寄ってきた。

「アクラム!? イスハルではなく……？」

「前《さき》の辺境伯は、二年前にポックリ流行り病で亡くなって、ド田舎に追いやられていた甥が跡を継いだんだと。若いのに優秀だってんで、領民の評判も上々、結婚してからは愛妻家でも通っているって噂だ」

それを聞いて、ラナはまるで糸が切れたかのように、へなへなとその場にへたり込んだ。

ガーランは、黙って彼女を見守り続ける。

やがてラナは、ぽつりぽつりと話し始めた。まるで独白のように。

「……私がいなくなれば、教会の皆が困る……、それはそうなのかもしれない。でも……、私は……私はただ、死にたくなかっただけなの。ここでの生活を手放したくなかっただけなのよ……」

ラナの日に焼けた頬を、幾つものしずくが、つたって落ちる。

「あの時のことは、今でも覚えている。私は、全てを捨てて崖から身を投げた。誰かに助けられるなんて夢にも思わず、本気で命を絶とうとした」

小さくしゃくり上げてから、ラナは激しく頭を振った。

「でも……！ もう、駄目なの。物見櫓に上っても、居敷きの崖に行っても、もう足がすくんで動かない。死を選ぶほど嫌だったことをあの子に押しつけておいて、今更死ぬのが怖いだなんて、ふざけているにもほどがあるわ。だからせめて、自分のしたことをこの身に、魂に、刻みつけようと……」

やがて彼女は両手で顔を覆って、静かに肩を震わせ始めた。

「折角おやっさんが助けてくれた命なんだ、死に急ぐことないだろ」

ガーランはラナの前にしゃがみ込むと、その頭をぽんぽんと軽く叩いた。

「妹さんも、良い旦那さんに恵まれてよろしくやってるわけなんだしさ」

とうとう嗚咽を漏らし始めたラナの頭を、ガーランは撫で続けた。ここで抱き締めるのは反則かなあ、などと余計なことを考えながら。

「なんだ、その変な歌は」

深夜の町角、警邏の終わり頃になって、同僚が思い余ったようにガーランに問いかけてきた。

「え？ 歌？ 俺何か歌ってたか？」

真顔で返すガーランに、同僚は呆れ返った表情で天を仰いだ。「分かってないんだったら、いい」

「え？ なんだよ、気になるだろ。歌がどうかしたのかよ」

ガーランがしつこく食い下がると、同僚はこれ見よがしに肩を落としてみせた。

「幸せそうで良かったな、ってことだ」

「しあわせ？ まさか！ 夜勤続きでへとへとな俺に、そんなことよく言うな」

はいはい、と軽くいなす相方に、ガーランはなおも言い募る。

「明日は明日で、貴重な休みの日だったのに、治療院の大掃除手伝わされるんだぞ。まったく、あのクソ坊主め、人使いが荒過ぎるっての」

無然とした口調とは裏腹に、その頬は緩み、足取りはどこまでも軽い。

「さーて、さっさと次の組と交代しようぜー」

溜め息をつく同僚をあとに残し、ガーランは鼻歌を口ずさみながら巡回路を進んでいった。

GB（ジービー）

<http://greenbeetle.xii.jp/>

ファンタジーや謎解き、恋愛など、その時々のおもえのままに書いています。タネや仕掛けのある物語が大好きです。

立神勇樹（たつかみ・いさぎ）

http://isag.sakura.ne.jp/isagi_t/

くうねるあそぶ、をモットーに、読んだり書いたりしています。小説のジャンルは、ミステリ、刑事モノ、軍モノ、ファンタジー、現代もの、近未来ものなどなど。です。

Pixivはこちら。 <http://www.pixiv.net/member.php?id=120784>

Twitterはこちら。 http://twitter.com/intent/user?screen_name=isagi_t

▼お待たせいたしました！ オリジナル短編小説誌「でんしょでしょ！」4号をお届けいたします。

▼当初、5号まで発行する予定でしたが、諸事情でこれが最終巻となります。最後を飾るに相応しい作品集になったと自負しております。どうぞご堪能ください。

▼本誌作成にあたって、作者さま、絵師さま、そして、校正担当のメンバーのみなさまには大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

▼また、応援して下さった読者のみなさま、本当にありがとうございました！

『でんしょでしょ！ 企画室』

<http://densyo.sblo.jp/>

【オリジナル小説誌】
でんしょでしょ！ vol.4

<http://p.booklog.jp/book/77638>

定価 無料

でんしょでしょ！ 作成企画室 (<http://densyo.sblo.jp/>)

作成責任者：なび (<http://wanavi.squares.net/>)

校正担当者：相沢秋乃・竹村いすず・なび・冬木洋子・村崎右近・柚希実・ゆめの（五十音順）

表紙イラスト：あから

初版：2013年10月

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77638>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77638>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ